

# FD・SD教育改善支援拠点の活動（1）

平成 23 年度総合報告書

名古屋大学高等教育研究センター





# FD・SD教育改善支援拠点の活動（1）

平成23年度総合報告書



## はじめに

本報告書は、名古屋大学 FD・SD 教育改善支援拠点事業について、平成 23 年度の活動状況をまとめたものです。

この事業は、名古屋大学高等教育研究センター（以下、センターと略）が中心となって進めています。センターは、高等教育改革に資する実際的な研究を志向して活動を続けてきました。その傍ら、質の高い教育を大学の各場面で実現するために、教員や職員の能力向上のための取組を実施してきました。その中には、セミナーやワークショップなどの開催があります。これらは、ほぼ毎月、なんらかの形で開催しています。また、他大学の教職員にも利用してもらえるように、各種の著作物を出版しています。これらの著作物は、ワークショップを開催する際に教材として活用したり、教職員が多忙な業務の合間に気軽に読んだりできるもので、分量はコンパクトでも内容は実際の取組に役立つことをめざしています。

センターは、名古屋大学内にとどまらず、名古屋市内、愛知県内、さらには東海地域の大学にも活動の成果を公開してきました。さらに、平成 20 年度からは、名古屋市内の 3 大学とともに FD・SD コンソーシアム名古屋を組織して、4 大学が連携して FD と SD に取り組む体制を整備してきました。

このような実績が認められ、平成 22 年に、名古屋大学高等教育研究センターは教育関係共同利用拠点「FD・SD 教育改善支援拠点」として文部科学省に認定されるに至りました。従来の東海 3 県を中心とする地域にとどまらず、さらに北陸地域等を含めた中部地域の大学やその他の高等教育機関を対象として活動を行うこととなりました。

拠点事業は平成 22 年度からスタートしていますが、同年度は FD・SD コンソーシアム名古屋の事業との併行でした。単独での拠点事業の開始は、平成 23 年度からになりました。活動に当たっては、従来の活動を大切にしつつ、新たな課題に挑戦することをめざしています。多少とも成果を上げることができたとすれば、センターの活動を支えてくださっている各方面のみなさまのご支援の賜と存じます。

多くの方が本報告書を読んでもくださるとともに、率直なご意見をお寄せくださることを切に願っております。ご意見をふまえて、活動内容をさらに充実させる所存です。

平成 24 年 3 月 30 日

名古屋大学 FD・SD 教育改善支援拠点運営委員会委員長  
名古屋大学高等教育研究センター長

木 俣 元 一



# 目次

はじめに	1
目次	3
2011年度の総括	7
事業報告	13
1 組織的研修	15
1-1 大学教育改革フォーラムin東海2012	17
資料1 広報チラシ	20
資料2 プログラム集	22
1-2 大学教員準備講座	50
資料 ポスター	52
1-3 セミナー・ワークショップ	
第96回招聘セミナー「教養教育を中心とした学部は創れないのか—科学教養を 21世紀の教養教育に—」	53 55
第97回招聘セミナー「副学長として大学改革に取り組む」	55
第57回客員教授セミナー「大学教育の改革—政策・研究の現段階—」	55
第98回招聘セミナー「動詞で語る『大学職員の専門性とその形成』」	57
第99回招聘セミナー「授業支援システムを活用した授業改善コミュニティの創造」	58
第100回招聘セミナー「フランスにおける高等教育グローバル化と大学経営改革」	60
第58回客員教授セミナー「大学教育のプロフェッショナル化」	62
第101回招聘セミナー「学びのかたちを皆でつくる—水戸芸術館“高校生ウィーク” の実践を中心に—」	63
第102回招聘セミナー「政策におけるエビデンスの活用—ポストドクターに関する 調査研究の事例から—」	64
第103回招聘セミナー「失敗事例・成功事例を通じた教務系職員育成のあり方」	65
第104回招聘セミナー「立命館大学で教学改革に挑む—FDの次のステップ—」	68
第105回招聘セミナー「あらためて考えてみる大学で働くということ」	69
第59回客員教授セミナー「大学国際化の日英比較—類似点と差異—」	71
第60回客員教授セミナー「大学生の学力形成支援」	73

1-4 教職員海外派遣事業	75
2011年POD年次大会において学んだこと	76
2011 Annual POD Conference 参加報告書	82
1-5 名古屋大学における研修	87
教員のための全学的研修	87
部局等における研修(センター主催・共催)	89
部局等における研修(センター・スタッフ協力)	92
1-6 名古屋大学外における研修等	93
1-7 教員メンタープログラム	96
資料1 紹介パンフレット	98
資料2 メンター教員のためのガイド	100
資料3 メンティ教員のためのガイド	102
資料4 教員メンタープログラムHP	104
1-8 東海高等教育研究所刊行物の利用促進	105
資料 東海高等教育研究所の刊行物一覧・内容紹介のHP	106
<b>2 研究会活動</b>	<b>107</b>
2-1 アカデミック・ライティング研究会	109
資料1 2011年度名古屋大学学生論文コンテストポスター	111
資料2 2011年度名古屋大学学生論文コンテスト授賞式の様子	112
2-2 アカデミック・リーダーシップ研究会	113
2-3 多人数授業研究会	115
資料1 ファカルティガイド「多人数授業の工夫」	116
資料2 ファカルティガイド「ミニットペーパーを活用する」	118
2-4 名古屋SD研究会	120
2-5 なごや科学リテラシーフォーラム	121
2-6 名古屋哲学教育研究会	122
名古屋哲学教育研究会共催セミナー実施報告	123
資料1 共催セミナーポスター	126
資料2 共催セミナーアンケート	127
2-7 能力認定学位研究会	128



2-8 物理学講義実験研究会	129
資料 物理学講義実験研究会ウェブサイト	131
2-9 留学生研究会	132
3 教材・プログラム開発	137
3-1 博士のキャリア展開に資するスキル開発プログラム	139
設計と実施	139
院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー 2011秋	140
クリティカルシンキングの技法—科学技術論の事例を通して学ぶ—	141
研究評価の現状—研究者として知っておくべきこと、研究者コミュニティとして 考えていくべきこと—	147
研究公正入門—研究不正に巻き込まれないために—	149
人の力を引き出す技法—研究者のためのコーチング入門—	151
単発セミナー	153
サイエンスイラストレーション入門—オブザベーション・ドローイング—	153
研究発表資料をつくる ポスター・スライドづくりの理論と実践	158
学術広報の世界へようこそ—広報誌制作教室—	163
資料1 サイエンスイラストレーション入門ポスター	167
資料2 研究発表資料をつくるポスター	168
資料3 学術広報の世界へようこそポスター	169
院生・PDキャリア形成支援セミナー(数学系)	170
人文学系大学院生・PDキャリア形成支援プロジェクト	173
グローバルPFF研修「英語で教える」概要	173
資料1 研修Bにおけるルーブリック	182
資料2 公開セミナーポスター	183
3-2 ファカルティガイド	184
参考資料	185
拠点の概要と設立経緯	187
センターおよび拠点の規程	189
委員会実施状況	191
拠点が提供している教育改善支援ツール	193



# 2011年度の総括



## ◎2011年度の総括

### はじめに

2011年度は、FD・SD教育改善支援拠点としての活動の2年目にあたる。前年度は「FD・SDコンソーシアム名古屋」としての活動との併行しての活動であったから、2011年度は新たなスタートの年度といえる。

拠点事業を開始するにあたって、われわれは次のような目的を掲げた。

- ①大学教員の教育能力および職員の職業能力の開発・向上を通じて、教職員の自発的な教育改善の取組を促進すること。
- ②中部地域を中心とした各大学における教育・学生支援の質向上を実現すること。

教職員の自発的な取組が、教育改善活動を行う上で不可欠であることは、改めて言うまでもない。教育やそれを改善する活動には、多大な時間と労力とともに想像力と創造力が必要であり、それらは自主性や自発性のないところには成立しないからである。

教育改善が、外圧によって強制されるのではなく、教員の自発性・自主性にもとづいて行われるためには、教員の最も大切にしている価値や活動に根ざすことが必要である。その代表的なものは、各教員の専攻領域に関するものである。それぞれの専攻領域で研究を行うにとどまらず、専攻領域の内容やみずからの研究成果を学生に教え伝えたり、学生の学習活動を支援したりしている。そのことは、大学教員としての自分の職務遂行やキャリア形成にどのような意味をもつのか。これは素朴ではあるが、根本的な問いである。この問いを抜きには、ホンネで教育改善活動を語ることは難しい。

上記の点は、高等教育研究センターが以前からとくに大切にしてきたことであり、拠点事業を進める上でも正面に掲げている。

拠点事業のいまひとつの特徴は、対象地域の拡大である。「FD・SDコンソーシアム名古屋」としての活動では、主に愛知県を中心に東海地域の大学・短大等を対象としてきた。これに対して、拠点事業では中部地域の高等教育機関を対象としている。これは、当拠点と同時期に認定された総合的なFD拠点としての東北、京都、愛媛の3大学と、担当する地域を分担する狙いによるものである。このため、従来以上に、スタッフの力量を高めるとともに、活動内容を充実させることが求められている。

拠点事業では、この目的の実現に向けて、多様な活動を行っている。大きく分けると、1) 組織的研修、2) 研究会活動、3) 教材・プログラム開発に分類することができる。以下、この3つの柱に沿って、2011年度の活動内容を振り返ってみる。

### 1. 組織的研修

組織的研修は、比較的規模の大きい活動である。主な対象は中部地域の大学等の関係者であるとはいえ、この地域に限定せず不特定の方々に向けて開かれた活動である。

名古屋大学における研修では、まず高等教育改革関係のセミナーをあげることができる。ほぼ毎月のように開催しており、参加者も一定数を得ている。拠点の活動として定着した感がある。名古屋大学だけで実施するにとどまらず、他大学でのFD・SDの実施を支援する活動にも取り組んでいる。高等教育研究センタースタッフの講師派遣は、年間20件以上にのぼる。

これらの地道な活動をベースに、年に一回、「大学教育改革フォーラム in 東海」を開催している。毎年3月の年度末に名古屋大学で開催している。東海地域の大学・高専・高校等の関係者が一堂に会して、実践報告や率直な意見交換を通じて各機関の教育活動改善の方策をさぐるという趣旨である。

## 2. 研究会活動

組織的研修が比較的多数の教職員を対象とするのに対して、研究会活動は小規模な活動である。教育改善、授業改善などの活動は、教員みずからの研究にかかわったところで追求しないと、一般的な内容になりがちである。結果的に、活動への参加意欲が薄れがちである。このような考え方にたち、本拠点事業では研究会活動を組織したり、活動を支援したりしている。

前年度、本拠点事業としての活動を行ったのは、なごや科学リテラシーフォーラム、名古屋哲学教育研究会、名古屋経済学教育研究会の3研究会にとどまっていた。2011年度は、アカデミック・ライティング研究会、留学生研究会、物理学講義実験研究会、アカデミック・リーダーシップ研究会など、9研究会へと大幅に増加した。これは、大学や学生をめぐる状況の変化によるニーズが多様化している状況を敏感にとらえている教員や、教育改善や学生の学習支援の活動に関心を持つ教員が多くなったことが、この結果につながっているとみることができる。

また、名古屋SD研究会のように、教員だけで研究会を組織するのではなく、大学職員も加わって教員と職員が共同で研究会を組織する動きもみられる。これも、運動の広がり的一端を示すものと言えよう。

## 3. 教材・プログラム活動

本拠点事業では、FD・SDに関する上記の組織研修や研究会活動の成果を、中部地域をはじめ全国の大学等に向けて発信し、普及させることを重視している。そのことは、つねに第三者のニーズを考慮して活動を行うことにつながり、

また、FD・SD活動を単発のイベントにせず効果を持続させること、組織する側のメッセージを確実に第三者に伝達することも重視している。それを実現するための手段の一つに、教材づくりを位置づけている。FD・SDの対象者の職位・職務内容や専門性の多様性に対応して、それぞれのニーズに的確に答え得る教材の開発・刊行である。この活動は、名古屋大学高等教育研究センターの基本的なスタンスとして、従来から展開してきたものであるが、本事業でも同様のスタンスで臨んでいる。

この活動としては、『大学の教務 Q&A』、『Mei-Writing 日本語版 論理的に書く技法』、ファカルティガイドを 2011 年度に刊行した。

プログラム活動に関しては、2011 年度の重点と位置づけて、院生・ポストクのためのスキル開発プログラムを企画・実施した。これは、従来から実施している「大学教員準備講座」の趣旨・内容を発展させたものである。同講座が主に大学院生を対象としているのに対して、このプログラムは大学院生だけでなくポストクをも対象にしている。「大学教員準備講座」は、大学教員として求められる知識・スキルを、専門にとらわれずやや一般的な内容で行っている。これにたいして、スキル開発プログラムは、それぞれの専門領域に即した内容で行っている。クリティカルシンキングの技法、研究評価の問題、研究発表資料の作成、キャリア形成支援セミナー、専門内容に関する英語による授業の手法等、多様な内容で行った。

#### 4. 新たな課題

2011 年度の活動を展開する中で、新たな課題も明らかになった。主に以下のような点がある。

##### ① 研究会活動の充実

上記のように研究会活動は、比較的小規模で組織できること、専門領域に即した内容で行えることなど、活動を行う上でのメリットが多い。大学・学部環境や学生のニーズは今後とも多様化することが予想されるため、これに対応すべく研究会をさらに増やして、多様な活動内容で展開することが求められる。そのために、名古屋大学の内だけでなく、大学の枠を超えて問題意識を共有する教員や職員で研究会が組織されるように、支援を行うことが必要である。

##### ② 大学職員向けの活動

本拠点事業の支援する研究会には、大学職員も加わるものもある。しかし、まだその数は限られている。一方、大学職員の能力向上に関するニーズは大きく、これにこたえていくことが必要になっている。大学職員が中心となって組織している大学行政管理学会をはじめ、大学の連合体組織等とも連携しつつ、大学職員向けの各種の活動の実施や支援を行うことが求められている。

##### ③ 他の FD・SD 拠点と連携した相互の機能の拡充・強化

本拠点と同時に認定された FD・SD 拠点は、東北大学、京都大学、愛媛大学の各大学教育センターを拠点とするものである。これらの大学とは、共同の会合を開催するなどして情報交換に努めている。大学執行部等の管理職調査など、共同で実施している活動もある。4 拠点は、直面する課題には共通する点も多く、活動内容が重複することもしばしばである。相互に協力したり分担したりすることにより、活動内容をより生産的・効果的にすることができる部分もある。相互の連携を緊密にして、連携が必要かつ可能な活動を追求することが必要である。





# 事業報告



## 組織的研修



## ◎大学教育改革フォーラム in 東海 2012

大学教育について、近隣の大学関係者が一緒に議論をし、連携、連帯を深め、もって質の高い大学教育をこの地区に実現することを目指して、本年度も大学教育改革フォーラム in 東海を下記の要領で開催した。

場 所：名古屋大学東山キャンパス ES 総合館

日 時：2012年3月3日[土] 10:00-17:00

プログラム：

10：00 開会挨拶

山本 一良（名古屋大学理事・副総長）

10：10 基調講演「震災後の日本社会と大学教育」

講演者：野家 啓一（東北大学理事）

11：00 休憩

11：10 オーラルセッション I

I-A: 自律的な学びを促す学習環境デザイン

座 長：太田 達也（南山大学外国語学部）

報告者：渡辺 義和（南山大学総合政策学部／国際教育センター）

森 朋子（島根大学教育開発センター）

境 一三（慶應義塾大学経済学部／外国語教育研究センター）

I-B: 学習者中心の理数系授業を創るために

座 長：土屋 孝文（中京大学情報理工学部）

報告者：白水 始（中京大学情報理工学部）

何森 仁（神奈川大学工学部）

益川 弘如（静岡大学大学院教育学研究科）

近藤 秀樹（九州工業大学大学院情報工学研究院）

I-C: 留学生受け入れにおける危機管理

座 長：近田 政博（名古屋大学高等教育研究センター）

報告者：榎並 岳史（新潟大学研究支援部国際課）

山口 博史（名古屋大学大学院情報科学研究科）

I-D: 地域間交流・連携で育む大学職員力

座 長：加藤 史征（名古屋大学総務部総務課）

報告者：松村 典彦（金沢大学学長秘書室）

小山 敬史 (名古屋大学医学部総務課)

12:30 ポスターセッション (計40件)

ミニワークショップ「現象と概念をむすぶー物理学講義実験という挑戦」

企画: 物理学講義実験研究会

14:00 オーラルセッションII

II-A: 改めて考える教養教育改革

座長: 宮嶋 秀光 (名城大学大学教育開発センター長/人間学部)

報告者: 安村 仁志 (中京大学副学長/国際教養学部)

中 裕史 (南山大学教務部長/外国語学部)

森川 章 (名城大学副学長/経営学部)

II-B: 大学行政管理学会 (JUAM) を通した大学職員の学び、成長

座長: 林 透 (中部・北陸地区: 北陸先端科学技術大学院大学)

報告者: 稲垣 智成 (中部地区: 南山大学)

柴田真由美 (北陸地区: 金城大学)

武藤 正美 (常務理事: 名城大学)

II-C: 図書館における学習支援ーラーニングコモンズの活用

座長: 木俣 元一 (名古屋大学大学院文学研究科/高等教育研究センター)

報告者: 加藤 信哉 (名古屋大学附属図書館事務部)

指定討論者: 松林 正己 (中部大学総合学術研究院出版室)

15:20 休憩

15:30 パネルディスカッション「学生に質の高い体験をどのように与えるか」

パネリスト: 大島 まり (東京大学大学院生産技術研究所)

宮川 正裕 (中京大学総合政策学部)

岡 多枝子 (日本福祉大学社会福祉学部)

司 会: 中井 俊樹 (名古屋大学高等教育研究センター)

16:50 閉会挨拶

17:00 終了

17:30 交流会

参加数：237名（参加費無料 事前参加登録不要）

実行委員会：大川 隆（南山大学）

齋藤 芳子（名古屋大学） \*事務局幹事

楯 一也（名城大学）

夏目 達也（名古屋大学） \*委員長

間野 益次（中京大学）

事務局：名古屋大学高等教育研究センター

主催：大学教育改革フォーラム in 東海 2012 実行委員会

FD・SD コンソーシアム名古屋

名古屋大学高等教育研究センター [FD・SD 教育改善支援拠点]

URL：<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2012/>

【資料1】 広報チラシ

基調講演  
震災後の日本社会と大学教育  
講演者：野家啓一(東北大学理事)

ポスターセッション  
+ミニワークショップ

ポスター発表  
募集中!  
2012.2.7 火 締切  
お申し込みはWebから

オーラルセッション

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2012/>

パネルディスカッション  
学生に質の高い体験をどのように与えるか  
パネル：大島まり(東京大学)  
宮川正祐(中央大学)  
岡多枝子(日本福祉大学)  
司会：中井俊樹(名古屋大学)

交流会

# 大学教育改革フォーラム in 東海2012

大学教育について、一緒に議論をし、連携、連帯を深め、質の高い大学教育をこの地区に実現しませんか。  
大学教育をよりよくしたい、という意志や希望をお持ちの方々のご参集をお待ちしております。

**2012年3月3日[土]10:00-17:00**  
場所：名古屋大学東山キャンパス ES総合館ほか **事前参加登録 不要** **参加費 無料**

主催：大学教育改革フォーラムin東海2012実行委員会、FD・SDコンソーシアム名古屋、名古屋大学高等教育研究センター[FD・SD教育改善支援拠点]



基調講演 10:10

## 震災後の日本社会と大学教育

講演者：野家啓一(東北大学理事)

オールラセッション 11:10 / 14:00

### 自律的な学びを促す学習環境デザイン

座長：太田達也(南山大学外国語学部)  
報告者：渡辺義和(南山大学総合政策学部/国際教育センター)  
森 朋子(島根大学教育開発センター)  
境 一三(慶應義塾大学経済学部/外国語教育研究センター)

### 学習者中心の理数系授業を創るために

座長：土屋孝文(中京大学情報理工学部)  
報告者：白水 始(中京大学情報理工学部)  
何森 仁(神奈川大学工学部)  
益川弘如(静岡大学大学院教育学研究科)  
近藤秀樹(九州工業大学大学院情報工学研究科)

### 留学生受け入れにおける危機管理

座長：近田政博(名古屋大学高等教育研究センター)  
報告者：榎並岳史(新潟大学研究支援部国際課)  
山口博史(名古屋大学大学院情報科学研究科)

### 地域間交流・連携で育む大学職員力

座長：加藤史征(名古屋大学総務部総務課)  
報告者：松村典彦(金沢大学学長秘書室)  
小山敬史(名古屋大学医学部総務課)

### 改めて考える教養教育改革

座長：宮嶋秀光(名城大学大学教育開発センター)  
報告者：安村仁志(中京大学副学長/国際教養学部)  
中 裕史(南山大学外国語学部/教務部)  
森川 章(名城大学副学長/経営学部)

### 大学行政管理学会(JUAM)を通じた大学職員の学び、成長

座長：林 透(北陸地区/北陸先端科学技術大学院大学)  
報告者：稲垣智成(中部地区/南山大学)  
柴田眞由美(北陸地区/名城大学)  
武藤正美(常務理事/名城大学)

### 図書館における学習支援 ラーニング commons の活用

座長：木俣元一(名古屋大学大学院文学研究科/高等教育研究センター)  
報告者：加藤信哉(名古屋大学附属図書館事務部)  
指定討論者：松林正己(中部大学総合学術研究院出版室)

### ポスターセッション+ミニワークショップ 12:30 ポスター発表 募集中!

ポスターセッション 発表内容：本フォーラムの趣旨に沿った内容の実践または調査研究の報告  
申込方法：ウェブサイトよりお申し込みください  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2012/>  
申込締切：2012年2月7日(火)

ミニワークショップ 現象と概念をむすぶ 物理学講義実験という挑戦  
企画：物理学講義実験研究会

### パネルディスカッション 15:30

#### 学生に質の高い体験をどのように与えるか

パネル：大島まり(東京大学生産技術研究所)  
宮川正裕(中京大学総合政策学部)  
岡多枝子(日本福祉大学社会福祉学部)  
司会：中井俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

### 交流会 17:30

参加費：2,000円(予定) 事前参加登録不要

## 大学教育 改革フォーラム in 東海2012

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2012/>

2012.3.3[土] 10:00-17:00

### プログラム

- 10:00 開会挨拶
- 10:10 基調講演
- 11:00 休憩
- 11:10 オールラセッション
- 12:30 ポスターセッション  
+ミニワークショップ
- 14:00 オールラセッション
- 15:20 休憩
- 15:30 パネルディスカッション
- 16:50 閉会挨拶
- 17:00 終了
- .....
- 17:30 交流会

### 会場案内図



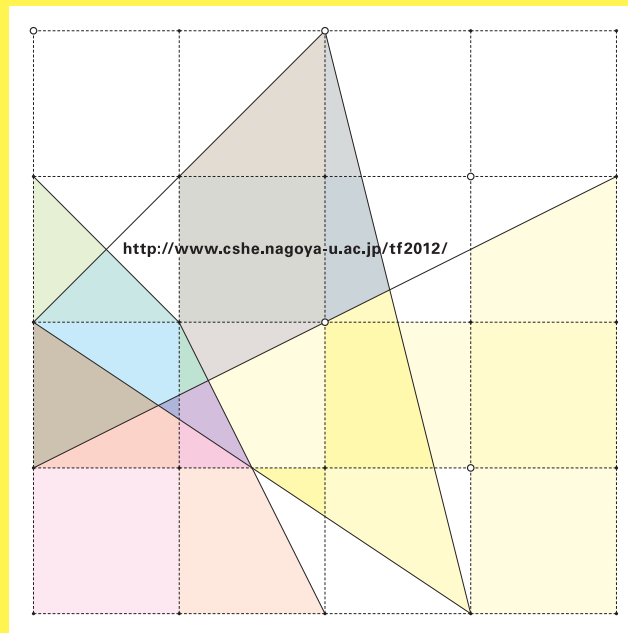
### 大学教育改革フォーラムin東海2012

実行委員会  
大川 隆(南山大学)  
齋藤芳子(名古屋大学)\*事務局幹事  
楠 一也(名城大学)  
夏目達也(名古屋大学)\*委員長  
間野益次(中京大学)

事務局  
名古屋大学高等教育研究センター(担当:齋藤)  
〒464-8601 名古屋市中区千種区不老町  
Tel: 052-789-5696 Fax: 052-789-5695  
E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

主催  
大学教育改革フォーラムin東海2012実行委員会  
FD・SDコンソーシアム名古屋  
名古屋大学高等教育研究センター〔FD・SD教育改善支援拠点〕

【資料2】プログラム集



2012年3月3日[土] 10:00-17:00 場所:名古屋大学東山キャンパス ES総合館ほか

# 大学教育改革フォーラムin東海2012

大学教育  
改革フォーラム  
in東海2012

2012.3.3[土]  
プログラム

10:00	開会挨拶	山本 一良(名古屋大学理事・副総長)
10:10	基調講演	p.2-3 ▶ 1F・ホール <b>震災後の日本社会と大学教育</b> 講演者:野家 啓一(東北大学理事)
11:00	休憩	
11:10	オールラウンドセッション	p.4-7 自律的な学びを促す学習環境デザイン ▶ 2F・A会場 座長:太田 達也(南山大学) 報告者:境 一三(慶應義塾大学)/森 朋子(島根大学)/渡辺 義和(南山大学) 学習者中心の理数系授業を創るために ▶ 2F・B会場 座長:土屋 孝文(中京大学) 報告者:白水 敏(中京大学)/何森 仁(神奈川大学)/益川 弘如(静岡大学)/近藤 秀樹(九州工業大学) 留学生受け入れにおける危機管理 ▶ 2F・C会場 座長:近田 政博(名古屋大学) 報告者:榎並 岳史(新潟大学)/山口 博史(名古屋大学) 地域間交流・連携で育む大学職員力 ▶ 2F・D会場 座長:加藤 史征(名古屋大学) 報告者:松村 典彦(金沢大学)/小山 敬史(名古屋大学)
12:30	ポスターセッション	p.8-16 ミニワークショップ p.17 ▶ 1F・ロビー & 会議室 ポスターセッション ミニワークショップ 現象と概念をむすぶ—物理学講義実験という挑戦 企画:物理学講義実験研究会
14:00	オールラウンドセッション	p.18-20 改めて考える教養教育改革 ▶ 2F・B会場 座長:宮嶋 秀光(名城大学) 報告者:安村 仁志(中京大学)/中 裕史(南山大学)/森川 章(名城大学) 大学行政管理学会(JUAM)を通じた大学職員の学び、成長 ▶ 2F・C会場 座長:林 透(北陸先端科学技術大学院大学) 報告者:稲垣 智成(南山大学)/柴田 真由美(金城大学)/武藤 正美(名城大学) 図書館における学習支援 ラーニングcommonsの活用 ▶ 中央図書館ラーニングcommons 座長:木俣 元一(名古屋大学) 報告者:加藤 信哉(名古屋大学)/指定討論者:松林 正己(中部大学)
15:20	休憩	
15:30	パネルディスカッション	p.22-23 学生に質の高い体験をどのように与えるか ▶ 1F・ホール パネル:大島 まり(東京大学)/宮川 正裕(中京大学)/岡 多枝子(日本福祉大学) 司会:中井 俊樹(名古屋大学)
16:50	閉会挨拶	木俣 元一(名古屋大学高等教育研究センター長)
17:00	交流会	

ごあいさつ

夏目 達也

大学教育改革フォーラムin東海2012実行委員長  
(名古屋大学高等教育研究センター教授)

本日は「大学教育改革フォーラムin東海2012」にご参加いただき、ありがとうございます。

「大学教育改革フォーラムin東海」は、東海地域の大学・短大等に所属する教員や職員が、一堂に会して教育改善の方策について率直に意見交換をしようという趣旨で毎年開催しているものです。

大学教育をめぐる状況は、近年ますます厳しくなっています。進学率上昇の中で多様なプロフィールをもった学生がふえ、従来の伝統的な考え方で授業や指導では対応が難しくなりつつあります。その一方で、教育の質保証やその観点から学生の学習成果を達成することが政策的に重視されており、各大学ともその対応を迫られています。ここ数年間続いている経済不況の影響により、学生の学習支援のための施設・設備を充実させることに、どの大学も苦慮しています。

学生は明日の社会を担う主体であり、大学は学生を一人前の社会人としての自立に必要な能力を獲得させることを社会から負託されています。いかに環境は厳しいとはいえ、教育機関である以上、大学がその責務から逃れることはできません。

大学も社会の一部である以上、大学だけでは対処できない問題も少なくありませんが、大学で対処できる、大学自身が対処すべき問題も多いはずで、大学で働く私たちは、自分たちのすべきことをしっかり自覚し、質の高い教育を実現して、大学としての社会的責任を果たしたいと考えています。

「大学教育改革フォーラムin東海」が、そのための議論の場となるように、実行委員会でも内容を検討して参りました。昨年に引き続き、「FD・SDコンソーシアム名古屋」に加盟する中京大学、南山大学、名城大学、名古屋大学の企画・運営によるセッションを設けました。各セッションとも、コンソーシアムとしての活動や各大学でのFD・SDの取組を行う中で課題として浮かび上がってきた問題を取り上げています。さらに今年度は、大学行政管理学会を含む大学職員グループによるセッションを2つ設けるとともに、物理学講義実験のミニワークショップを設けました。

今日一日、活発な議論を行い、明日からの実践への示唆とエネルギーを生み出せるように、ご参加のみなさまのご協力をお願いします。

## 未来世代への責任 大震災以後の科学技術と大学教育

講演者：野家 啓一（東北大学理事）

昨年3月11日に起った東日本大震災とそれに伴う福島原発事故から、早や一年が経とうとしている。私が所属する東北大学も、震災による人的被害こそわずかに留まったが、建物や実験施設をはじめ、研究資料や貴重書など総額で数百億円を下らない損害を被った。さいわい教育活動は現在ほぼ平常に復しており、研究面では、被災地域の中核大学としての責任を果たすべく、東日本の復興・地域再生の課題に取り組み、その成果を発信・実践するために「災害復興新生研究機構」を立ち上げている。この4月にはそのヘッド・クォーターの役割を期待される「災害科学国際研究所」を開設する予定である。

だが、取り組むべき課題は山積しており、しかもその多くは解決のために文理連携、すなわち自然科学と人文社会科学の連携・協力を必要としている。今回の地震と津波が未曾有の天災であったことは言うまでもないが、引き続いて起った原発事故は、その後の調査報道を見れば、明らかな人災と言わざるをえない。それゆえ、震災の影響は、今後われわれの自然観、人間観、文明観など「価値」に関わる問題にまで及ぶであろう。そして「価値」をめぐる考察は、ほかならぬ人文社会科学の役目である。

すでに寺田寅彦は昭和9年(1934)に「天災と国防」の中で、「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増すという事実」を指摘し、科学技術のあり方に警告を発している。もとより、科学技術と社会との関係は、寅彦の時代と比べて大きく変貌しており、現代社会はいわゆる「トランス・サイエンス(領域横断的科学)」の時代に入っている。A. ワインバーグによれば、それは「科学によって問うことはできるが、科学によって答えることのできない問題群からなる領域」を意味する。すなわち、環境問題、BSE問題、インフルエンザ問題など科学と政治・経済・文化の領域が複雑に絡み合い、科学知識は不可欠だが、それだけでは解決できない問題群のことである。問題解決に要求されているのは、理系の技術的知識と文系の社会的判断力との相補的協働にほかならない。

大学教育改革フォーラム  
in 東海2012

こうした現代社会のあり方を、U.ベックは「リスク社会」と呼んでいる。彼によれば、従来の政府は「富の再分配」を主たる任務としてきたが、現代では「リスクの分配」を課題とせねばならない。原発事故による放射能の影響が周辺地域に深刻な被害をもたらしているように、科学技術によるリスクの当事者(ステークホルダー)は地域住民である。それゆえ、科学技術政策の決定に際しては、当事者である市民の参加による「シヴィリアン・コントロール」が必要となる。いま大学に求められているのは、「学問の知」と「生活世界」を媒介し、リスク評価とリスクの分配を的確に判断できるような専門的職業人の育成である。そのためには、文系の学生には「科学リテラシー」を、理系の学生には「社会文化リテラシー」を身に付けさせるような教養教育が必要であろう。しかも、リスク・コミュニケーションを含めた文理横断的教養教育は、個別分野において専門的な訓練を受けている大学院生に対してこそ不可欠だと私は考えている。

最後に、今回の原発事故で浮かび上がった「未来世代への責任」の問題に触れておきたい。原子力発電は、放射性廃棄物の処理すらままならない不完全な技術である。しかも、地下埋設による直接処理をしたとしても、放射能の途方もない半減期を考えれば、その影響は子々孫々にまで及び、子孫に美田どころか醜田を残すことになる。これは現存世代の未来世代への責任という「世代間倫理」の観点から考えられるべき問題である。こうした長期的展望に立った考察こそは、短期的な市場原理からは相対的に独立した位置にある大学教育が率先して担うべきものであろう。

野家啓一氏 略歴

東北大学理事、附属図書館長、大学院文学研究科教授。専門は科学哲学、言語哲学。

1949年生。東北大学理学部物理学科卒業、東京大学大学院理学系研究科(科学史・科学基礎論)博士課程中退。南山大学専任講師、プリンストン大学客員研究員などを経て現職。近代科学の成立と展開のプロセスを、科学方法論の変遷や理論転換の構造などに焦点を合わせて研究している。また、フッサールの現象学とウィトゲンシュタインの後期哲学との方法的対話を試みている。著書に『言語行為の現象学』『無根拠からの出発』(以上、勁草書房)、『物語の哲学』(岩波現代文庫)、『科学の解釈学』(ちくま学芸文庫)、『パラダイムとは何か』(講談社学術文庫)など多数。1994年第20回山崎賞受賞。

## 自律的な学びを促す学習環境デザイン

座長：太田 達也(南山大学外国語学部)

報告者：境 一三(慶應義塾大学経済学部 / 外国語教育研究センター)

森 朋子(島根大学教育開発センター)

渡辺 義和(南山大学総合政策学部 / 国際教育センター)

### セッション趣旨

技術的にも構造的にも目まぐるしく変化する現代社会にあって、いま学んだ知識や技術が数年後にも通用する保証はまったくない。むしろ十年、二十年先の社会の中でも時代の要請に対応し能力を高めていけるような「自律的な学び」の力を育成することこそ、これからの大学教育においてますます重要な柱となるだろう。そのためには、自律学習・生涯学習の視点に立った「学習環境デザイン」を構想し、実現していかなければならない。ここで言う学習環境デザインとは、学習者中心の授業設計や協働学習・プロジェクト型授業といった教育的アプローチのレベルから、社会の中での体験的学習、さらにはICTを利用した学習支援環境や学習者コミュニティの形成を促進する学内環境といったインフラ整備の問題まで含んでいる。本セッションでは、こうした「自律的な学びを促す学習環境デザイン」がどのように実現され得るか、各大学での事例報告をもとに検討する。

### 報告 1

境 一三  
慶應義塾大学経済学部 /  
外国語教育研究センター

#### 授業コンテンツ・方法と学習環境の照応

「自律的学習能力の養成」というテーマが外国語教育においても取り上げられるようになって久しい。それなくしては、生涯にわたる外国語学習は考えられない。しかし、その養成には、それに適した学習内容と方法ばかりでなく、それを支える学習環境の構築が不可欠である。レイアウトを含めた教室の設計は、重要な研究課題であるはずだが、その研究は多くない。本発表では、学習内容・方法と照応した学習環境の重要性を論ずる。

### 報告 2

森 朋子  
島根大学教育開発センター

#### 学生を自律学習に導く授業デザイン PBL学習を例に

本発表では、授業レベルにおいて自律的な学びを促す学習環境および授業デザインについて報告を行う。扱う事例は、島根大学初年次教育授業「スタートアップセミナー」において6回分の授業時間をかけて実施しているPBL(Project based learning)である。PBLには振り返り活動を組み入れており、初年次教育において自律的学習の第1歩となる他者の存在とメタ認知活動を組み入れたアプローチを導入する意義について述べる。

### 報告 3

渡辺 義和  
南山大学総合政策学部 /  
国際教育センター

#### 国際力育成を目指した授業外学習環境の整備：ワールドプラザのシステムと運営

南山大学のワールドプラザは、「外国語の練習施設」という枠を超えて、「国際力育成の場」を提供すべく、環境整備、人員配置、施設運営を行っている。学生が国際社会に出て活躍するための基礎力を養うことを念頭に、語学学習の機会提供だけでなく、自律学習方法の習得、外国語による組織運営の実践、異文化理解の実践等を促す指導と、それを助長する環境の提供および維持が、大学教職員に求められているのではないだろうか。

## 学習者中心の理数系授業を創るために

座長：土屋 孝文(中京大学情報理工学部)

報告者：何森 仁(神奈川大学工学部)

白水 始(中京大学情報理工学部)

近藤 秀樹(九州工業大学大学院情報工学研究院)

益川 弘如(静岡大学大学院教育学研究科)

### セッション趣旨

本セッションでは、確率統計を題材として、学習者中心の理数系授業を創るための条件について考える。抽象的・形式的なことがらを扱う理数系授業では、ややもすると教師による手続きの教え込みが中心になる。これに対して、授業現場での学習を科学する「学習科学」の分野からは、意味も含めた能動的な教科理解のために、学習対象に関する豊富な経験と学習者自身の話し合いが重要だとする知見が蓄積されつつある。しかし、どの程度の経験量が必要なのか、何についてどのように話し合わせればよいのか、経験から話し合いへと展開しやすい環境はどのようなものかといった問いに答えが出されているわけではない。こうした問いが、個別具体的な実践の中で検討すべきものだからだろう。本セッションでは、何森氏による確率授業を軸として、その詳細と成果を丁寧に照らし合わせて学習者の学習過程を明らかにし、理数系教育を強化するさまざまな方法を提案したい。

### 報告 1

何森 仁  
神奈川大学工学部

#### 分析し協力して抽象化する：能動的数学理解を促進する教具と実験

授業での学習者は、毎日「初めてのこととの出会い」であり「未知との遭遇」である。そこでは、彼らが思いっきりワクワクするような出会いの機会を創るのが授業者の努め。そうするには、学習者個々が数学を分析し、他と協力して、総合し抽象化する過程を、一気に経験することも有効だと思う。そこから、確率事象を体験できる実験「10cm切り」「サイドタ」が生まれた。

### 報告 2

白水 始  
中京大学情報理工学部

#### 学習科学から見た学習者中心の理数系授業

何森実践は、年度ごとに学習者の学びを見ながら、次々修正・改善されていった。その過程と、修正点がどう学生の学びに繋がったかを学習科学研究者の視点から検討して、豊富な体験と話し合いの組み合わせの効果について考えたい。

### 報告 3

近藤 秀樹  
九州工業大学大学院  
情報工学研究院

#### MILAI S: 学習者中心型授業のための未来の教室

学習者中心の学びを効果的に実現するためには、一人ひとりの多様な学びを支える学習環境 授業と関連する経験を学習者が豊富に体験でき、話し合いへと発展しやすい環境やツール が必要。そのために創られた教室と「サイドタ」実験の集計ツールを紹介し、活用事例を報告する。

### 報告 4

益川 弘如  
静岡大学大学院教育学研究科

#### 授業作りからコンテンツを学ぶ：教員養成課程の改革から

理数系科目を学ぶには、自分が教える立場に立つことが有効である。それがコンテンツとその学び方両方に対する内省を引き起こすからだろう。そこで、教師志望の学生たちが学習科学の知見を基に協動的に授業を検討し実践し分析する活動を繰り返す授業実習カリキュラムを通して、教科内容と学習者理解双方を深めた活動を報告する。



## 留学生受け入れにおける危機管理

座長：近田政博(名古屋大学高等教育研究センター)

報告者：榎並岳史(新潟大学研究支援部国際課)

山口博史(名古屋大学大学院情報科学研究科)

### セッション趣旨

2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故は、大規模災害に際して、大学にどのような緊急対応が求められるかという課題を浮き彫りにした。被災地の多くの大学では、教職員自身が被災している状況下で学生の安否確認作業に追われることとなった。文部科学省の調査によると、震災後1ヶ月以上が経過した昨年4月20日時点で、東北地方に在住する外国人留学生のうち、通学圏内にいることを確認できたのは35.1%にすぎなかった。緊急帰国した留学生も少なくなかった。このことは、いかに大規模災害時の安否確認が容易でないかを示している。

これまで日本の大学では、平時における個別の留学生アドバイジングやオリエンテーションなどの充実を図ってきた。しかし、言語的・文化的差異を抱える留学生に対して、非常時に受け入れ大学がどのように迅速かつ正確に情報発信を行うかという点については未整備な点も多い。本セッションでは、「非常時における組織的な危機管理」という観点から、留学生対応のあり方について意見交換したい。

### 報告 1

榎並 岳史  
新潟大学研究支援部国際課

#### 東日本大震災時における留学生危機管理業務について 新潟大学の事例を中心に

昨年3月11日の東日本大震災では、日本社会に暮らす多くの人々の生活が一変し、その対応に追われることとなった。それは日本の大学に在学する外国人留学生や、その支援を業務とする大学スタッフにおいても例外ではない。報告者は自らが実した新潟大学における事例に即し、今回の震災によって生じた事態(留学生の大量一時帰国・安否状況の問い合わせ・各種支援要請など)、また国際業務に携わるスタッフがどのように対応したかに関する事例を紹介し、あわせて業務を遂行する中で見えてきた課題について私見を述べてみたい。そのうえで本シンポジウム参加者各位と意見交換を行い、今後の危機管理体制の構築に資する知見を得たいと考えている。

### 報告 2

山口 博史  
名古屋大学大学院情報科学研究科

#### 大規模災害時の留学生・国際交流スタッフの対応を考える

東日本大震災は各地に未曾有の被害をもたらした。留学生アドバイジングや国際交流に関わるスタッフも業務上さまざまな影響を受けたところが多い。本報告では、震災時に留学生アドバイジングにあたった報告者の経験、また大きな被害を受けた地域に立地する大学での聞き取りにもとづいて報告を行う。留学生の実際の動静にふれつつ、留学生・国際交流関係スタッフは非常時の業務にどのように取り組んだのか、またそこから明らかになった組織的課題について話題提供してみたい。そのうえで参加者とのやりとりを通じて、今後の方向性についてなんらかの示唆を得ていきたいと考える。

## 地域間交流・連携で育む大学職員力

座長：加藤 史征(名古屋大学総務部総務課)

報告者：松村 典彦(金沢大学学長秘書室)

小山 敬史(名古屋大学医学部総務課)

### セッション趣旨

大学は、全国津々浦々に設置されている。そのため、様々な地域で、それぞれの地域特有の課題と全国共通の問題を抱えながら、大学職員は日夜業務に邁進している。

大学を取り巻く環境が激変しつつある昨今、各地域で問題意識を共有した大学職員が集まり、有志の勉強会が開催される例が多く見受けられるようになった。そうした勉強会に集まった参加者は、初対面の場合にもまるで旧知の間柄のように語り、互いの向上心を刺激し合う。参加の動機はそれぞれであっても、彼らのベクトルが一つの大きな方向性を共有しているために、発現される傾向であろう。彼らは地域を越えて連携し、緩やかにつながることで、多方向に感化し合うネットワークを形成している。

本セッションでは、それら地域で実践されている勉強会等の一例に関して、その指向性、実施手法、現時点における成果、今後の展望などを報告するとともに、フロアとの意見交換を行い、大学職員力を育むことのできる交流の場としたい。

### 報告 1

松村 典彦  
金沢大学学長秘書室

北陸地域における地域内交流・連携  
～ KUMA・ほんわか会の取組を中心に～

### 報告 2

小山 敬史  
名古屋大学医学部総務課

東海地域における地域内交流・連携  
～ 名青会・みぎあし会の取組を中心に～

### 報告概要

「各大学が学内外におけるSDの場や機会の充実に努める」ことが必要であるとの中央教育審議会による平成20年の答申を受け、北陸地域においては、平成21年度から大学コンソーシアム石川によるSD事業が、東海地域においては、平成20年度からFD・SDコンソーシアム名古屋によるSD事業が始まるなど、全国各地でSD活動は継続的に行われている。特に現在では、週末にはどこかでSD関連のイベントが開かれているとあっていいほど、その活動が盛んになってきている。

また、そうした公的な活動のほかに、若手職員が自主的にSD活動に取り組み、所属大学で勉強会を形成したり、さらに所属大学の枠を越え、全国レベルの勉強会やそれぞれの地域内での勉強会を形成したり、密に交流・連携しながら互いの能力・意欲の向上に努めている。

その一例として、報告1ではKUMA(金沢大学職員勉強会)、ほんわか会(北陸地区国立大学若手職員交流会)等について、報告2では名青会(名古屋大学職員勉強会)、みぎあし会(東海地区大学人ネットワーク)等について、その成果と展望を報告しつつ、東海地域と北陸地域などの地域間交流・連携による大学職員力の育成の可能性について述べ、セッションにおけるフロアとの意見交換の一助とする。

## ポスターセッション

1F・ロビー & 会議室 / 12:30-14:00

### P1 ジェネリックスキル自己評価による “学びの成長”検証

谷口 進一 / 青木 克比古 / 石井 晃 / 大林 博一 / 中 勉 / 高 香滋  
(金沢工業大学 基礎教育部 数理工教育研究センター)

我々は、数理分野での学士力を学力面とジェネリックスキルの両面から捉え、測定可能な形で定義し、質的・定量的に学生の成長を測定・評価することを試みている。今回、学生のジェネリックスキルに関する意識のアンケート調査を行い、その自己評価の度合いについて検討を試みた。また、この調査結果をもとに理工系学部におけるジェネリックスキル自己評価尺度の構築について考察したのでその結果を報告する。

### P2 米国教育システムの日本への展開 職員現地視察から

中村 章二(愛知教育大学)

米国の大学制度は、近年の大学改革においてモデルとして取り上げられ、その教育システムの導入が各種答申に示されると、多くの大学がセメスター制に移行する等、日本の大学制度に大きな影響を与えている。しかし、個別の事例を見ると、その趣旨が活かされていないことも垣間見える。2011年に米国の大学を訪問・協議した内容を紹介し、背景が異なる日本において教育の質保証に向けた有効な方策を大学職員の立場から報告したい。

### P3 大学教務のQ&A 名古屋SD研究会からの発信

上西 浩司(鳥羽商船高等専門学校)  
村瀬 隆彦(佐賀大学)  
水谷 早人(日本福祉大学)  
辰巳 早苗(大阪樟蔭女子大学)  
長尾 義則 / 中井 俊樹 / 齋藤 芳子(名古屋大学)

名古屋SD研究会(名古屋大学高等教育研究センター)は、教務WGを設置し、約2年間にわたって大学の教務系職員の専門性を高めるための方策について研究してきました。同WGのメンバーは、国立大学及び私立大学に勤務する教務事務に関する専門性の向上に熱心な職員と、教務に対して関心の高い教員です。本発表では、WGの成果としてこのたび出版される『大学の教務Q&A』について、その作成の経緯と今後の課題を提示します。

### P4 博士課程後期課程学生とポスドクの キャリアパス支援

森 典華 / 河野 廉 / 植田 速雄 / 武田 穰  
(名古屋大学 社会貢献人材育成本部 ビジネス人材育成センター)

全国の博士後期課程学生とポスドクを対象にキャリアパス支援を行っている。博士学位取得者が研究職はもちろんのこと、それ以外の多様な分野で活躍することを目的としている。個別面談、セミナー、長期インターンシップなどを行っている。セミナー講師が企業で活躍している人である点や、長期インターンシップ先は博士学位取得者が自ら開拓していく点が特徴である。当日は支援内容や成果を発表する。

**P5** 地域を巻き込むFD  
「英語教育お助けサイト」の構築

松本 佳穂子( 東海大学外国語教育センター )

東海大学外国語教育センターでは、ヨーロッパ共通基準枠(CEFR)を外部指標とし、新しい英語教育の方法論を様々な形で見取り入れた新カリキュラムを2011年度より導入した。その前後4年間に、所属英語教員150名に対して行ってきた講演会・研修会・ワークショップの内容と資料をまとめて、地域の中学・高校の先生方が新しい英語教育の概念や実践例を学べるような交流型のウェブサイト構築した。中学・高校でも来年度から新指導要領が導入されるので、神奈川県の高校の先生方に試用して頂いた結果も良好であった。

**P6** 学生の主体的な学びの方法論について  
考えるFD

堀口 朝示 / 高木 志郎 / 橋 一也 / 鈴木 修二  
( 名城大学大学教育開発センター )

名城大学では、教育改善の知恵と工夫を共有する場として、FD委員会や大学教育開発センターを中心にFD活動を推進している。これまで、FD活動方針を「学生の主体的な学びを促すための、教育活動の探求・実践および蓄積を目指したFD環境構築」と定め、学生の主体的な学びの方法論について考えるFD活動を推進してきた。本発表では、名城大学のFD活動を「学生の主体的な学びの方法論について考えるFD」という視点で捉えなおし、授業アンケートのデータなどから見えてくる学生の学びの現状や、学生の主体的な学びを促す授業づくりの取り組み、FDの課題について考察する。

**P7** 地域子育て支援拠点サポートスタッフ  
育成の取組

新川 泰弘( 関西福祉科学大学社会学部福祉学部臨床心理学科 )

関西福祉科学大学から運営支援を受けている大阪府柏原市の地域子育て支援拠点(ひろば型)において開催された子育て・子育て支援に関する講習の機会を活用して地域子育て支援拠点(ひろば型)におけるサポートスタッフを育成するための教育支援を行った。地域子育て支援拠点事業のうち「子育て・子育て支援に関する講習など」のサポートを行うための子どもと家庭を支援する実践者を育成する事前教育と実践現場における取り組みの概要を報告する。

**P8** 女子高校生への工学部進学支援  
教科「家庭」から

内海 那保子( 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程 )

女子高校生への工学部進学は、科学技術に関わる女性が増えることで多様性が期待でき、職業に直結することで女性の活躍の場が広がるという点で、女性のキャリア形成上、大変魅力がある。そこで、高校の教科「家庭」の授業を通してできる支援について分析した。家庭科では、生活の中の科学技術を知ることにより興味関心を持続することや、性別に縛られずに生き方の多様性を考えることができる教科としての可能性がある。

**P9** 学生・高校生が作る  
図書館パスファインダー

堀 一成(大阪大学大学教育実践センター)  
久保山 健(大阪大学附属図書館利用支援課)

大阪大学では、図書館ラーニング commons の積極活用の試みを続けている。

また、少人数対話型の教養教育である「基礎セミナー」に、近隣の高校生に参加してもらい大学での学びの体験をしてもらう試みも行なっている。

今回の発表では、図書館パスファインダーを作る基礎セミナーを実施したことを発表する。通常教職員が作成するパスファインダーを、学生(1年生)が学習成果発表として作成する点と、図書館のラーニング commons で実施した点の特徴である。

またそのセミナーに高校生が参加し、自ら大学での学びの成果を情報発信する体験をしてくれたことについても報告する。

**P10** 生涯発達の視点に着目した  
対人援助専門職養成教育

新川 朋子(関西女子短期大学)

生涯発達の視点に着目した対人援助専門職養成教育を福祉系講義の中で行った。まず、視聴覚教材を用いて少子高齢化社会の実際について学生が学んだ。次に、21世紀の福祉社会を学生自身が今後どのように生きていくか、自分自身の生き方をふりかえり、見つめ直した。その後、各自レポートにまとめて提出した。講義後に提出したレポートの内容を生生涯発達の視点から整理し、学生自身がどのような点について自分自身の生き方を見つめ直していたかを把握するとともに、今後の対人援助専門職養成教育の内容・方法を検討した。

**P11** 大学マネジメント研究会若手編集委員会の活動から

池田 一郎(筑波大学病院総務部)  
三橋 ゆう子(東京工業大学総務部)  
中元 崇(京都大学総務部付京都国立近代美術館)  
松永 倫紀(京都大学学務部)  
加藤 史征(名古屋大学総務部総務課)  
染川 真由美(明治学院大学総務部)  
小野里 拓(東京大学本部国際企画課)  
林 透(北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター)  
上垣 友香理(大阪府立大学総務部)

国公私立大学9名の若手大学職員は大学マネジメント研究会会誌『大学マネジメント』の若手編集委員を2年間の任期で務めた。このような形で高等教育に係る誌面に関与することはおそらく初めてのことであろう。企画・編集、そして、23年11月に東京で「大学創生エンジン2011」の開催も実施した。本発表では、2年間の活動を振り返り、高等教育広報のあり方の一部について考える機会としたい。

**P12** 現場触発型教育・学習による  
就業力の育成

宮崎 信二(名城大学経営学部)

名城大学経営学部では、少人数教育の個別指導体制が整っているゼミナール教育を主たる場を実施される。取組は基礎ゼミナールでの「キャリア形成導入教育」、専門ゼミナールでの「現場触発型教育・学習」を導引力として、学生の将来展望・キャリア形成に対する意識を高め、体系的な学知・技法の学修の深化を動機づけ、さらに専門領域の科目群や実務実習関連科目を履修することによって、自立的な就業力を育成する取組である。

**P13** 「リベラルアーツカフェ～静岡の教養～」の活動

藤井 基貴(静岡大学)  
宮田 舞(東京大学大学院)  
松原 央達(静岡大学大学院)

リベラルアーツカフェは「専門家と市民」「科学と社会」の双方向コミュニケーションを目指す静岡版サイエンスカフェとして、これまでに20回のイベントを企画開催してきました。運営スタッフには大学教員、学生、社会人が参加し、静岡に根ざしたノンフォーマルな「学びの場」づくりを進めています。今年度は「NPO静岡ラーニング・ラボ」を立ち上げるとともに、「中部教育学会第60回記念大会」や「サイエンスアゴラ2011」でも出張イベントを開催しました。来場者のみなさんとの意見交換を楽しみにしております。

**P14** 静岡大学における「防災・道徳」教育の授業開発

藤井 基貴 / 上地 香社 / 松永 尚徳(静岡大学)

本発表では、2011年度に静岡大学教育学部藤井研究室と静岡大学防災総合センターとの連携協力のもとで進められた「静岡県における防災および災害対応のための道徳教育プログラムの開発事業」の成果および課題について報告する。本事業のねらいは、非常時においても主体的・自律的に判断能力できる人間を育成するための「道徳の授業」を開発することにある。授業は災害時におけるジレンマ状況を教材化した「モラルジレンマ授業」とジレンマをあらかじめ回避するための「ジレンマくだけ」授業の二時限より構成されている。研究者・学生が共同して開発した15種類の授業の特色と小・中学校での実践について報告する。

**P15** 世代をつなぐ学びの場～名古屋大学学童保育所の試み

榊原 千鶴(名古屋大学男女共同参画室)

名古屋大学には現在、常設としては全国初の大学内学童保育施設「ポピンズアフタースクール」があります。2009年に開校した本施設は、これまで育児と仕事の両立において立ちはだかっていた「小1の壁」を越える解決策のひとつとなるとともに、本学の構成員や地域の協力により、様々な教育プログラムが展開される場ともなっています。今回の発表では、学生から名誉教授にいたるまで、幅広い年代が取り組む教育プログラムを通じて、世代をつなぐ学びの場としての名古屋大学学童保育所の現在をご紹介します。

**P16** 教員養成大学におけるジェネリック・スキルの養成

久保田 祐歌 / 満田 清恵(愛知教育大学教育創造開発機構)

愛知教育大学教育創造開発機構においては、平成23年度より文科省特別経費によるプロジェクト「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」を推進している。「リベラル・アーツ型教育」の構築を目指す本取組は、学生のジェネリック・スキル養成を一つの柱としている。本発表では、(1)学生が身につけるべきジェネリック・スキル、(2)それを学生が身につけるための教育方法、(3)今後の課題を報告する。

**P17** データに基づく大学改善  
現場で集めたIRのギモン

藤井 都百(名古屋大学評価企画室)  
中井 俊樹(名古屋大学)  
鳥居 朋子 / 岡田 有司 / 川那部 隆司(立命館大学)

多くの高等教育機関でデータに基づく活動改善が主流になると予測され、データを判断に活かせる人材育成も急務と考えられる。改善に際して関連するデータを集めて分析・解釈し、それに基づいて改善案作成や方策決定を判断する一連の行動を、日本の大学におけるIRと考える。本発表では、大学で諸活動改善に取り組む教職員が現場で遭遇する課題とその解決法を、聞き取り等で収集・整理し、知恵を共有する。

**P18** 自己啓発を通じた職員力UP!

武藤 正美(名城大学経営本部秘書室)  
加藤 千咲子 / 藤井 徹(名城大学)

大学事務職員は、大学のミッション・ビジョンを達成するために、業務を遂行するだけでなく、戦略的思考や高度な専門知識を有し、社会の期待をはるかに超える意欲と熱意を持って自ら課題を発見し解決できる自立した存在でなければならない。「人材」から「人材」への転換が求められる中、名城大学が『明るく、厳しく、前向き』に職員の活躍できる大学であるために取り組む研修制度について、若手職員の具体的な活躍も交え紹介する。

**P19** 芸術教育充実プロジェクト  
「アート・クラス」

茂登山 清文(名古屋大学大学院情報科学研究科)  
川喜田 奈保(名古屋大学芸術教育充実プロジェクト)  
中島 健志郎(名古屋大学情報化学部)  
戸田山 和久(名古屋大学教養教育院、大学院情報科学研究科)

名古屋大学では2003年4月より、全学教育において6科目12コマの芸術系科目を開講してきました。こうした現状をふまえ、芸術教育の更なる充実に向け、芸術教育充実プロジェクト「アート・クラス」と題し、芸術教育について議論し、名大生を対象にした実技カリキュラムを試行しました。アーティストたちによるワークショップ、作品展、シンポジウムなどを通して得られた成果と課題を発表します。

**P20** ラーニング・アシスタントの活躍、  
活躍を支える組織

竹中 喜一(関西大学教育開発支援センター)

関西大学では、大学における学びの基礎科目「スタディスキルゼミ」を54クラス開講している。本報告ではまず、この科目の受講生の学習支援をする「ラーニング・アシスタント(以下、LA)」について活動内容や特徴を紹介する。次に、LAの活躍を支える組織体制(教員・職員・学生の「三者協働組織」)について報告する。最後に、LAや「三者協働組織」の成果や課題について言及した上で、関西大学以外の高等教育機関への汎用性についても可能な限り検討する。

**P21** 中国の高等教育改革における  
学生支援の課題

呉 嬌(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程)

近年、中国の高等教育の拡大化、学生の多様化に伴い、学生支援を取り巻く環境は大きく変わっていく。従って、学生がより豊かな大学生生活を送るために、学生支援の活動を充実するように求められる。本稿では、中国高等教育の改革状況と学生支援の取り組みを考察しながら、高等教育の新しい状況において、学生支援はどんな課題に直面していかを明らかにする。

**P22** BRD( 当日ブリーフレポート方式 )による  
講義の実際

宇田 光( 南山大学総合政策学部 )

90分間をいくつかに分節化した講義手法がある。BRD( 当日ブリーフレポート方式、宇田、2005 )は、そうした工夫の一つである。授業の始めに教員はレポート用紙を1枚配布した上でテーマを発表し、15分程度の考慮時間を与える。以降、レポートを書くという具体的かつ明確な目標に向かって、授業は進められる。ここでは、こうした講義の手順や、成績評価の実際を報告したい。

**P23** 現任者研修を意識した  
「教職実践演習」の開発

青山 佳代 / 森山 雅子( 愛知江南短期大学 )

「教職実践演習」は、教育職員免許法施行規則の改正に伴い、2010年度入学生から必修科目となった。この科目は、教員になるうえでの課題を自覚し、教員としての資質能力の最終的な形成と確認を目的としている。教職課程における集大成となる科目といえよう。しかし、その方法については、各大学で試行錯誤していると思われる。発表者は、具体的な実践の論理的背景・多角的視点の理解、コミュニケーション力およびプレゼンテーション力の向上を目的とした「教職実践演習」の方法を開発した。本発表では、その授業の具体的内容および受講者の評価について紹介し、本方法の成果を明らかにする。

**P24** 中国と日本の大学における初年次教育の  
比較研究

呉 曉( 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程 )

日本と中国の大学における初年次教育プログラムの現状、問題点などについての研究結果を発表する。両国の四つの大学の実施事例をもちいて、両国の初年次教育の異同点を説明する。

**P25** SNSを活用した体験型学習の振り返り  
促進の試み

佐藤 慎一 / 影戸 誠( 日本福祉大学 )

体験型学習において重要とされる振り返り活動を、ソーシャルネットワーキングサイト( SNS)を活用して支援する取り組みを紹介する。実践として、学生が協働で行うプロジェクト型学習( PBL: Project-based Learning)を取り上げ、そこにおけるSNSの活用方法とその実態を述べる。さらに、蓄積された記録を活用して効果的に振り返り活動を行うことを狙いとして開発したビューアについても紹介し、体験から得られる成果を大きなものとするために必要な一連の学習サイクルについて考察する。

**P26** リサーチ・アドミニストレーションシステム  
の整備

武田 穰 / 渡辺 正実( 名古屋大学リサーチ・アドミニストレーション室 )  
野中 尋史( 名古屋大学研究推進室 )  
戸次 真一郎( 名古屋大学リサーチ・アドミニストレーション室 )

名古屋大学では、平成23年度「リサーチ・アドミニストレーター( 配置支援 )事業」への採択にともない、大型研究プロジェクト等を戦略的に提案・実施するための研究支援一環体制の整備を開始した。プロジェクト立案、申請、運営管理、フォローアップ、研究成果発信までの総合的支援を実施する。これらの活動を通じ、育成カリキュラムの策定、OJT指導等のURA育成システムの整備と地域他大学等の普及を目指す。



## P27 あいちサイエンスフェスティバル2011

藤吉 隆雄(名古屋大学社会貢献人材育成本部)  
戸次 真一郎(名古屋大学リサーチ・アドミニストレーション室)  
市原 俊 / 大矢 恵 / 大住 克史 / 河本 さつき / 竹内 あかり / 古田 央哲  
(名古屋大学社会貢献人材育成本部)  
寿 桜子(科学技術振興機構、元・名古屋大学社会貢献人材育成本部)  
武田 稔(名古屋大学産学官連携推進本部)

2011年より、愛知県で地域科学祭「あいちサイエンスフェスティバル」をスタートした。毎年10月を愛知県でのサイエンス月間と位置付け、各種主体が実施するサイエンスイベントが企画参加する形で実施する。これは、JST科学コミュニケーション連携推進事業「地域ネットワーク支援」を受けて愛知県内11機関により形成した「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」の活動である。

## P28 大学図書館ラーニングコモンズにおける利用実態調査

毛利 志保 / 加藤 彰一(三重大学工学研究科建築学専攻)  
長澤 多代(三重大学附属図書館研究開発室)  
Khasawneh, Fahed A(三重大学工学研究科建築学専攻博士後期課程)

ラーニングコモンズは、大学図書館の新しい役割として注目されており、H21年には、名古屋大学中央図書館および大阪大学豊中図書館で改修が行われた。この発表では、二つの大学図書館のラーニングコモンズにおける利用実態調査の結果や、米国のジョージア工科大学やエモリー大学の事例調査、また、三重大学で講義室を改修して設置されたラーニングコモンズの調査結果を分析・考察して、その特徴や課題点、今後の展開を報告する。

## P29 大学経営者層の能力開発は誰がどのように行うか。

原 裕美(名城大学総務部)

教員がメインとなるFDが義務化され、各大学が様々な取組みを展開してきた。そして、職員の能力開発であるSDも同じように活性化してきた。しかし、大学の経営者層に対する能力開発(Board Development)は十分に研究され、議論され、各大学で実施されてきたのだろうか。  
本発表では、海外におけるBoard Developmentとそれに取組むBoard Professionalの役割について紹介する。

## P30 大規模大学における学士力向上に向けた就職支援の充実

犬飼 斉 / 大竹 純平 / 山本 剛毅(名城大学キャリアセンター)

本取組を通じて、学生が社会人としての基礎力を向上させ、主体的に行動できる力が身に付いたと実感できることを目標としている。具体的には、本取組終了後に参加学生に対してアンケート調査を実施し、本取組開始前に比べ、就職力が向上したと実感する学生が8割以上に達することを目標としている。

## P31 主体的学びを促すジェネリック・スキル教育に向けて

満田 清恵 / 久保田 祐歌(愛知教育大学教育創造開発機構)

愛知教育大学教育創造開発機構においては、教養教育改革の一つとして「リベラル・アーツ型教育」の構築を目指し、学生のジェネリック・スキル養成を一つの柱としている。本発表では、本学で実施している授業アンケートの質問項目における、学生の受講意欲や自習時間等に焦点を当て、より主体的な学びへの転換を促す上で、1)2007年度と2011年度アンケートの比較から見られる学習状況の変化、2)授業形態が及ぼす主体的な学びへの影響、3)今後の課題を報告する。

**P32** facebookからはじめる大学間連携

角谷 充彦(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程)

大学間連携という考えが京都コンソーシアムや九州のQ-Linksのように各地で具現化し、地域の高等教育全体の発展に寄与しています。この東海地区でもこの「大学教育改革フォーラムin東海」をはじめとしてさまざまな意見交換の場が増えつつあります。一方、情報交換ツールとして、近年facebookをはじめとしたSNSが脚光を浴びています。

そこで大学教職員の情報交換ツールとしてfacebookに着目し、近い将来この東海地区において大学間連携のツールになりえないか検証したいと考えています。

**P33** 公立大学は必要か？  
～公立大学の歴史的変遷を中心に～

大平 恵(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程)

20世紀、公立大学の多くは国立大学をモデルとし、自らを国立大学の補完として位置づけてきました。しかし、21世紀に入り、民的手法の導入や教育基本法改正による大学の地域貢献が明文化され、「公立大学」として存在する意義が問われています。公立大学の歴史的推移を振り返り、現在おかれている状況について紹介します。そして、当日は、国立・私立・公立の枠を超えて、各大学が存在する意義について意見交換を行いたいと思います。

**P34** 『持続学のすすめ』による実践型人材の育成

行本正雄、伊藤守弘、上野薫(中部大学)

平成21年度採択文部科学省大学教育・学生支援推進事業(テーマA)大学教育推進プログラムの3年間の成果を、文系・理系の教員によるオムニバス講義とポートフォリオシステムによる評価方法を中心に、紹介する。本取組では、5学部におけるあてになる人間の人物像と資質を明確にして『持続学のすすめ』による文理融合型教育課程カリキュラムを構築し、平成24年度からは特別課題教育課程の正式な科目として『持続学のすすめ』がスタートする。

**P35** 東日本大震災による日本の転換をどう教えるか

水野 英雄(愛知教育大学)

東日本大震災の発生やそれに伴う原子力発電所の事故によって未曾有の被害が生じ、復興や放射能汚染など多くの問題が引き起こされました。教育の観点からも、震災後の子どもたちの生活や復興の在り方、ボランティア活動など取り組むべき課題が生じました。震災後の日本は大きな転換期を迎えています。それを大学教育の中でどのように教えていくのかを、具体的な授業での取組や学生のボランティア等の現地での活動などにより紹介する展示を行いました。また、震災後の様子や被災地の生活について理解を深めるために、日本新聞博物館の協力により「東日本大震災報道写真展」巡回展を開催しました。

**P36** 教員養成系大学における金融教育の展開  
金融・経済を教えるための実践的授業

水野 英雄(愛知教育大学)  
鶴岡 遥佳 / 前田 宗誉 / 村井 望(愛知教育大学)

厳しい経済状況が続く中で、金融や経済に関する知識の教育の必要性は高まっています。学校教育の中での金融教育の実践のためには教員になる学生に金融に関する知識を身につけさせることが必要です。教育学部の大学生へのアンケート調査に基づいて、大学教育における金融教育カリキュラムの提言を行います。そのような提言は教員養成改革が検討されている中で社会的意義も大きく、実現されれば日本経済の発展に大いに貢献するものです。発表は日本銀行主催の『第7回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～』において優秀賞を受賞した「先生のための金融教育(小学校編/中高編)」に基づいています。

**P37** リベラルアーツ型カリキュラムにおける  
経済学教育の展開

水野 英雄(愛知教育大学)

愛知教育大学では「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクトに取り組んでいます。リベラル・アーツの知識として欠かすことの出来ない経済学について、学生は高等学校までにほとんど学習していないために戸惑いがあります。生きる力として、「身近な経済問題をわかりやすく理解する能力」を育成するために、経済学の理論とそれを踏まえたアクティブラーニングによる積極的な教育を展開しています。そのような実践的なリベラルアーツ型カリキュラムにおける経済学教育の取組と成果について考えます。

**P38** 物理学講義における系統的演示実験  
提示順序の検討

安田 淳一郎(名城大学理工学部)  
齋藤 芳子 / 小西 哲郎 / 中村 泰之(名古屋大学)  
千代 勝実(山形大学)  
古澤 彰浩 / 三浦 裕一(名古屋大学)

我々は、物理学講義中に行う実験について実験器具の開発およびその効果的な導入法の研究を行っている。現在我々が着目しているのは、意図を持って順序立てられた一連の演示実験、すなわち「系統的演示実験」である。実験を系統的に提示することで、学習者は現象を論理的に理解し、そして予測できるようになることが期待される。本発表では、我々がこれまでに検討した系統的実験の提示順序、およびその実例を紹介する。

**P39** 大学におけるキャリア教育科目の現状と  
課題

安藤 リカ / 大谷 尚  
(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程)

現在、多くの大学で1・2年次必修として開講されているキャリア教育科目では、「自己分析・適職発見」「キャリア(就職)行動計画」「企業役職者の講演」といった要素を軸に授業が構成される例が多い。しかし、そこで提供される知識・情報は、学生たちが今後の社会を生き抜く上での血肉になりうるのだろうか。本ポスターでは、現在のキャリア教育科目の問題を明らかにし、新たな授業内容の提案を試みたい。

**P40** ラーニング・コモンズはこう使われる  
学生の利用状況からラーニング・コモンズ  
の学習支援を考える

岡部 幸祐 / 堀 友美(名古屋大学附属図書館情報サービス課)

ラーニング・コモンズにおける学習支援はどうあるべきなのか。ラーニング・コモンズにおける人的サポートの必要性は言われているが、学生が必要としているサポートとはどういうものなのか。名古屋大学中央図書館ラーニング・コモンズがスタートして約2年が経った。学生はラーニング・コモンズをどう使っているのか。学生の利用状況から、今後のサポートの進め方、ラーニング・コモンズにおける学習支援の在り方を考える。

## 現象と概念をむすぶ 物理学講義実験という挑戦

企画：物理学講義実験研究会

登壇者：飯田 洋治(立命館大学教育開発推進機構 教授)

岡島 茂樹(中部大学工学部 教授)

川勝 博(名城大学総合数理教育センター 教授)

谷口 正明(名城大学総合数理教育センター 准教授)

原科 浩(大同大学教養部 教授)

牧原 義一(三重大学教育学部 教授)

三浦 裕一(名古屋大学大学院 理学研究科 准教授)

三野 広幸(名古屋大学大学院 理学研究科 准教授)

司 会：安田淳一郎(名城大学理工学部)

W  
O  
R  
K  
S  
H  
O  
P

教員が一方向的に話す内容を「聞く授業」よりも「体験する授業」や「考える授業」のほうが、学生の理解が深まるとされる。一方、物理学の基礎的、入門的な授業では、数多くの物理的な概念や法則を学生によく理解してもらう必要がある。この一見すると相反するような両者を統合する工夫が「講義実験」である。

「講義実験」すなわち教員が教壇で実験してみせる「演示実験」や学生が机上で簡便な実験を行う「机上実験」により、学生は物理的な概念や法則を実際の現象と結びつけて理解することができる。講義実験には、学生に考える機会を与えること、学生の興味関心を惹くこと、学生の授業への参加を促すこと、学生の記憶に長くとどめることなど多様な機能が見出されている。

ただし、もともと内容が詰まっている物理学の講義のなかに実験をとり入れるには、効果的な演示実験の開発・準備、そして授業での効果的な実施などが求められる。国内では各大学の教員が個別に講義実験の開発や実施に取り組んでいる場合が多く、知見の洗練は進んでいるものの、知見の共有については発展の余地が十分に残されている。講義実験の「隠れた達人」が見出され、開発してきた実験を見せ合い、互いに触発されて更なる開発を志すというような仕組みが必要であると考えられる。

本ワークショップは、東海地区周辺の大学で講義実験の実践を重ねている9名の方々にお集りいただき、実演を交えながら実験を紹介しあう機会とする。オリジナルな実験にこだわらず、大学の授業で日頃実践されている実験や、特に興味深いとお考えの実験を含めてご紹介頂く予定である。授業の準備や実際の進め方などを含む多様な知見を交換し、議論を通じて知見の洗練と共有を目指したい。

理工系の教員はもとより、体験型、参加型の授業づくりにご関心をお持ちの方々にもご来場いただき、さまざまな視点から議論できればと願っている。

## 改めて考える教養教育改革

座長：宮嶋 秀光(名城大学大学教育開発センター長 / 人間学部)

報告者：安村 仁志(中京大学副学長 / 国際教養学部)

中 裕史(南山大学教務部長 / 外国語学部)

森川 章(名城大学副学長 / 経営学部)

### セッション趣旨

1991年の大学設置基準大綱化後、多くの大学が教養教育改革に取り組んでいる。大学設置基準大綱化後には、教養部を基礎に新学部を設置等、専門教育を重視する傾向にあった。その後は、大半の大学が教養教育の実施組織を設置し、全学共通的教育体制に変化してきている。また、これまで教養教育を担当してこなかった教員も「全学出動体制」で教養教育を支える体制が基本となった。しかし、引き続き、従前の教養担当の教員は今も多くの教養教育の授業を担当している。また、カリキュラムも問題探求型のカリキュラムへの移行や情報科目の重視、実践的な外国語教育(英語)等を柱として整備されるようになった。

本セッションでは、全学共通教育に移行した後、教養教育改革の新たな方向として、学部単位の教養教育を実施する大学とともに、全学共通で教養教育を実施する大学から報告を受け、教養教育の在り方について共通認識を得ることをねらいとする。

### 報告 1

森川 章  
名城大学副学長 / 経営学部

#### 全学共通教育の新たな方向性に向けて

名城大学では2005年度から全学共通教育体制による教養教育を実施してきた。しかし、当該学部学生の状況が把握し難くなったこと等が問題視されるようになった。そこで、今年度検討した結果、各学部で教育課程を再編し、2014年度から学部単位で教養教育を実施し、PDCAサイクルを回すこととなった。本発表では、名城大学教養教育改革の議論を紹介し、全学共通教育体制で課題となった点について、議論したい。

### 報告 2

安村 仁志  
中京大学副学長 / 国際教養学部

#### 大学教育における教養教育 その意義と展開の論点

中京大学は大学設置基準の大綱化をめぐる議論を経て、教養教育の意義を認めつつその教育体系の改革に取り組み、専門教育との融合性を考慮して各学部と教養部が協議するとともに、引き続き教養部が全学の教養教育を担う体制を維持した。本発表ではこうした経緯と教養教育の改革を紹介するとともに、今日における教養教育の意味とその具体的展開、本質を踏まえたさらなる改革の論点を提示してみたい。

### 報告 3

中 裕史  
南山大学教務部長 / 外国語学部

#### 共通教育におけるカリキュラム構築の現状と課題

南山大学では、1996年度に教養課程委員会を全学共通科目委員会に改組して、全学体制による教養教育を実施してきた。その組織としての基本的な枠組みは現在の共通教育委員会においても維持されているが、カリキュラムについては大学を取り巻く諸情勢を踏まえながらすこずつ改正をおこなってきた。本発表では、南山大学共通教育の特色あるカリキュラムの現状と今後について検討を加えてみたい。

## 大学行政管理学会( JUAM )を通じた大学職員の学び、成長

座 長：林 透( 中部・北陸地区理事 / 北陸先端科学技術大学院大学 )

報告者：稲垣 智成( 中部地区 / 南山大学 )

柴田 真由美( 北陸地区 / 金城大学 )

武藤 正美( 常務理事 / 名城大学 )

### セッション趣旨

大学マネジメントにおける大学職員の役割の重要性は、今や誰もが認めるところである。そのことを自覚した大学職員による全国各地での多様なネットワーキングが確実なムーブメントとなって現れている。このムーブメントの行く先には、どのような大学の未来が開けているのだろうか。

大学職員の専門性向上の場として、「学協会」の存在は欠かせない。故・孫福弘先生の遺志を継いで、我が国唯一の大学職員による大学職員のための学協会として、大学行政管理学会( JUAM )は15年以上の歴史を刻んできた。大学行政管理学会中部・北陸地区研究会では、昨年9月に金城大学( 石川県 )を会場校に開催された第15回JUAM定期総会・研究集会の前後を契機に、中部・北陸両地区の交流を積極的に進めている。

本セッションでは、大学行政管理学会中部・北陸地区研究会のメンバー3名から同学会を通じた新鮮な学びや成長のエピソードを紹介し、フロアと情報交換を行いたい。

### 報告 1

稲垣 智成  
中部地区 / 南山大学

#### JUAM地区研究会若手イベント企画からの学び、成長

大学行政管理学会中部・北陸地区研究会では、大学職員として共通に修得すべき能力の開発ならびに大学間の垣根を越えたネットワーク構築を目的として、2010年度より新人・若手向け研究会を開催している。

ついては、この研究会の取り組みについて紹介するとともに、この研究会を通して、参加者および企画者に、どういった学びや成長があったのかを検証する。更には、フロアとの情報交換を通じて、本研究会の更なる発展の一助としたい。

### 報告 2

柴田 真由美  
北陸地区 / 金城大学

#### 第15回JUAM定期総会・研究集会企画実施からの学び、成長

今年度の定期総会・研究集会は初の北陸開催、また地方の小規模大学が会場校という初めてづくしの開催となった。当日は、台風直撃という悪天候での開催となったが、無事開催することができたことは参加者皆様の協力のお陰と心より感謝申し上げます。今回、本学が会場校となった経緯、準備から開催に至るまでに直面した課題・問題に対し、職員が一丸となり取組んだ姿勢から得た学び、成長について話題提供させていただく予定である。

### 報告 3

武藤 正美  
常務理事 / 名城大学

#### 大学行政管理学会( JUAM )を通じたモチベーションの維持・向上

大学行政管理学会中部・北陸地区研究会では、大学を取り巻く様々な課題に対して、理論的かつ実践的に研究することを通して、地域の大学の横断的な職員相互の啓発と研鑽を深めるための活動を行っている。自身もこの研究会には、2001年6月から入会し、自己啓発の場として活用している。本報告では、自身がこの研究会を通じて得た気づきを紹介し、職場内研修だけでは習得することのできない学びについてフロアと意見交換していきたい。

## 図書館における学習支援 ラーニングcommonsの活用

座長：木俣 元一(名古屋大学大学院文学研究科 / 高等教育研究センター)

報告者：加藤 信哉(名古屋大学附属図書館事務部)

指定討論者：松林 正己(中部大学総合学術研究院出版室)

### セッション趣旨

「箱物行政」という言葉がある。箱物とは、博物館や美術館、図書館やホールなど、公共事業として建造される建築物を指す。「箱物行政」とは、こうした建築物の建造に重点を置き、その維持や、実際の活用には目が向けられない行政のあり方を揶揄したものである。

ラーニングcommonsも、「箱物」で終わってしまう恐れがおおいにある。海外で機能しているさまざまなしくみを日本に移そうとすると、目に見える施設や設備に目がいってしまうことが多い。また、それがうまく機能しているコミュニティや社会的基盤のあり方まで移すことはできない。そのため、それを日本独自の状況に適合させるにはいろいろな工夫が必要となるであろう。ラーニングcommonsをどのように活かすのかという問いは、結局のところ図書館や大学をめぐる大きな広がりをもたえているように思われる。

このセッションでは、ラーニングcommonsに詳しい加藤信哉氏(名古屋大学附属図書館)による報告で論点を整理していただいた後、松林正己氏(中部大学総合学術研究院出版室)からのコメントを得て議論を深め、さらに会場の皆さんとの意見交換を軸にしてこの問題を考えていきたい。

### 報告

加藤 信哉  
名古屋大学附属図書館

日本の大学図書館におけるラーニングcommonsの本格的な導入は2007年以降に始まり、その数は少なくとも40を超えたとされる。それらのラーニングcommonsに共通するのは、コンピュータの利用とグループ学習を行える場が基本機能であり、各大学の事情にあったサービスが展開されていることである。

しかしながら「ラーニングのないcommons」と揶揄されるように、ラーニングcommonsが教育や学習を支援し、その中で教育や学習そのものを学生が能動的に展開する場として十分に機能しているとは言い難い状況である。この原因は変貌しつつある大学の教育・研究が図書館に及ぼすインパクトへの根本的で精確な認識が図書館に欠け、アドホックな対応に留まっているためであろう。

本報告では、岐路に立つ大学図書館の機能を再整理し、戦略的な観点から大学図書館のサービスの方向性を明確にし、その上でラーニングcommonsが教育に果たすべき役割を検討したい。





## 学生に質の高い体験をどのように与えるか

パネリスト：大島 まり(東京大学生産技術研究所)

宮川 正裕(中京大学総合政策学部)

岡 多枝子(日本福祉大学社会福祉学部)

司会：中井 俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)

## 趣旨

体験を通して学習するという形態の授業が大学において増えています。2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」においても、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れることが提言されています。学生に適切な体験を与えることで、学習の動機づけを図り、問題解決などのさまざまな能力を涵養することが期待できます。

本パネルディスカッションでは、学生に質の高い体験をどのように与えることができるのかについて議論することを目的とします。学生の主体的な参加をめざす体験型の授業の実施には、講義型の授業とは異なる工夫や努力が求められます。学生にとって質の高い体験とはどのようなものか、学生に質の高い体験をどのような方法で与えることができるのか、体験をどのように学生の学習や発達につなげることができるのか、大学はどのように支援することができるのかなど、さまざまな論点と課題があります。本パネルディスカッションでは、体験型の授業に取り組んでいる3人のパネリストからの実践に基づく報告の後に、体験型の授業の課題を議論したいと考えています。

---

大島 まり

---

### 教養学生に対するUROP( Undergraduate Research Opportunity Program ) による研究活動体験

---

東京大学での学部教育は、前期(1年生・2年生、教養課程)と後期(3年生・4年生、専門)課程に分かれている。前期から後期には進路振り分けがあり、教養課程の成績により進学できる専攻が決まる。そのため、学生は教養の勉強をしっかりとすが、講義などの座学が中心となり、研究に携わる機会が4年生の卒業研究で初めとなる場合が大半である。

そこで、教養キャンパスの近くに位置する東大生産技術研究所(生産研)では、学部の早い段階で研究に触れる機会として、教養の学生を対象にUROPを夏・冬の両学期に開講している。自分の興味ある分野の研究室に配属され、研究テーマの決定、計画および遂行し、最後に研究報告書をまとめ、研究発表会にて発表する。このようにUROPを通して、学生は研究のいろはを学ぶことができる。受講した学生の中には、研究論文が有名な雑誌に採択された例もある。学生は非常に熱心に研究に励んでおり、先生や大学院生との交流を通して双方に良い刺激を与えている。

---

宮川 正裕

---

### 産学連携課題解決型PJによるマネジメント力の育成

---

中京大学総合政策学部では、社会が求める人材を育成することを基本方針として、「自ら考え、問題を見つけ、解決できる、幅広い分野で活躍できる人材」の養成が図られている。当ゼミでは、2年次に経営学理論と実践的マネジメント手法を学び、3年次に産学連携課題解決型プロジェクトを組んで、理論学習で蓄えた知識を実践で身に付ける試みを行っている。

過去3年間取り組んできた産学連携プロジェクトでは、連携企業の経営改善や商品開発に向け、TQM(クオリティ・マネジメント)に基づいた小集団活動でPDSAを回すことで、問題発見・問題解決能力の向上が認められた。大学と企業が協働して取り組むことで、企業側は経営改善成果を、学生側は「質の高い体験」を通じて主体性や実行力、課題発見力や柔軟性といった社会人基礎力やマネジメント力の向上成果を期待し、実績を上げてきている。こうした体験型学習の取り組み成果とその課題について、概要を報告する。

---

岡 多枝子

---

### 教員養成におけるサービラーニングの体験

---

本学社会福祉学部が教育GPを起点として始めた2年生ゼミのサービラーニングには、教職課程学生も参加している。付属高校生主演のビデオ「ふくしの学びと仕事」の企画・撮影で「高校生が半日で目に見えて成長をする」と驚き、「篠島勝手に盛り上げ隊」は島民アンケートで「私ら年寄りも夢も希望もないから協力できない」と言われ立ちすくむ。大学周辺地域調査に出た学生は住民から学生のマナーの悪さを指摘されて冷や汗をかき、特別支援教育に取り組んだ学生は「しょうがい」への社会の偏見と教育システムの壁につきあたる。それら現実社会がつきつける矛盾や不条理に学生はゆらぎ、葛藤し、模索した。教員も共にゆらいだ。何のために活動するのか、何のために学ぶのか。12月、報告会タイトルは「私たちの社会変革 サービスラーニングからソーシャルアクションへ」と変化。3年間継続した活動を卒論や教員採用試験に生かして、4年生は卒業が目前である。

## 【ご案内】

### 交流会のお知らせ

プログラム終了後にE S総合館1階にて行います。会費2,000円です。

受付にてお申し込みいただけますので、ぜひご参加ください。

### 昼食等について

会場でのお弁当販売はありません。生協食堂等(裏面地図参照)をご利用ください。

会場内に飲食禁止エリアがあります。表示をご確認ください。

喫煙は指定場所(裏面地図参照)にてお願いいたします。

### ポスターご発表の方へ

9:30から12:30の間に掲示してください。

掲示用品は事務局にてご用意しております。

ポスターセッションは12:30～14:00(昼食時)です。

ポスターは19:00までに外してお持ち帰りください。

---

## 大学教育改革フォーラムin東海2012

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2012/>

### 主催

大学教育改革フォーラムin東海2012実行委員会

FD・SDコンソーシアム名古屋

名古屋大学高等教育研究センター[FD・SD教育改善支援拠点]

### 実行委員会

大川 隆(南山大学)

齋藤芳子(名古屋大学)\*事務局幹事

橋 一也(名城大学)

夏目達也(名古屋大学)\*委員長

間野益次(中京大学)

### 事務局

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Tel: 052-789-5696 Fax: 052-789-5695

E-mail: [info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

---

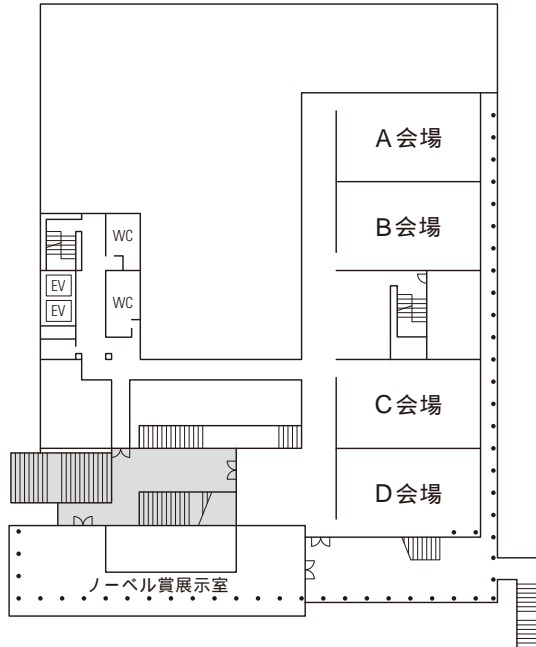
### 大学教育改革フォーラムin東海2012 プログラム

2012年3月3日

制作: 大学教育改革フォーラムin東海2012実行委員会

発行: 名古屋大学高等教育研究センター

ES総合館 2F



▶ A会場

11:10- オールセッション I  
自律的な学びを促す学習環境デザイン

▶ B会場

11:10- オールセッション I  
学習者中心の理数系授業を創るために

14:00- オールセッション II  
改めて考える教養教育改革

▶ C会場

11:10- オールセッション I  
留学生受け入れにおける危機管理

14:00- オールセッション II  
大学行政管理学会 (JUAM) を通した大学職員の学び、成長

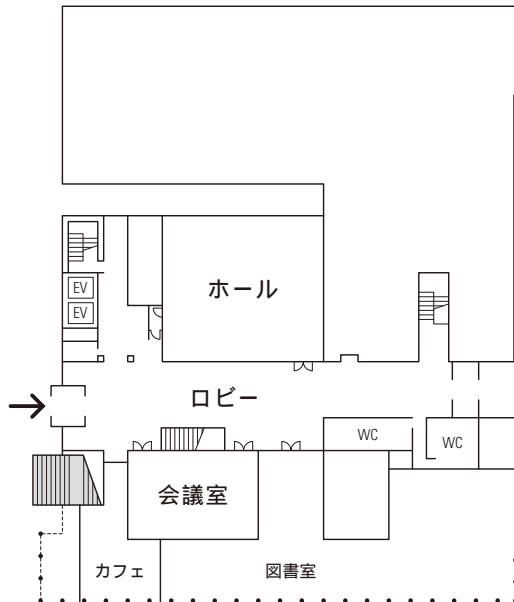
▶ D会場

11:10- オールセッション I  
地域間交流・連携で育む大学職員力

▶ 中央図書館ラーニングcommons (裏表紙参照)

14:00- オールセッション II  
図書館における学習支援・ラーニングcommonsの活用

ES総合館 1F



▶ ホール

10:10- 基調講演  
震災後の日本社会と大学教育

15:30- パネルディスカッション  
学生に質の高い体験をどのように与えるか

▶ ロビー & 会議室

12:30- ポスターセッション

12:30- ミニワークショップ  
現象と概念をむすぶ 物理学講義実験という挑戦

事務局

▶ 1F会議室



食堂・カフェ

(生協)北部食堂	11:00-14:00
(生協)ダイニングフォレスト	11:30-13:30
STARBUCKS名古屋大学附属図書館店	9:00-16:30
シエ・ジロー(ES総合館)	11:30-20:00(ランチタイム11:30-15:00L.O.)

購買

(生協)北部購買	10:00-14:30
(生協)理系ショップ	10:00-16:00
ファミリーマート名古屋大学IB館店	7:00-23:00

主催：大学教育改革フォーラムin東海2012実行委員会  
 FD・SDコンソーシアム名古屋  
 名古屋大学高等教育研究センター〔FD・SD教育改善支援拠点〕

## ◎大学教員準備講座

大学教員準備講座とは、将来大学教員の職に就くことを目指している大学院生やポストドクのための授業である。昨年度までの課外で実施してきた大学教員準備プログラムの経験を踏まえて、大学院教育発達科学研究科の正規の授業として「高等教育学研究Ⅰ－大学教員準備講座」を開講した。

### 担当者

夏目達也、近田政博、中井俊樹、齋藤芳子（名古屋大学高等教育研究センター）

### 開講学期

前期、開講時限：集中、単位数：2

### 講義概要

大学教員になるために必要な知識、スキル等の獲得をめざし、多面的に大学教員の職務を検討します。受講者の今後のキャリア設計、キャリア開発に資するよう、グループワーク等を適宜織り込んで、実践的に進めます。

### 到達目標

- ・大学の成り立ちや大学教員の職務について理解する
- ・大学という組織で働くために必要な知識、スキルを身につける
- ・異なる学問分野の人と交流する
- ・授業で得た知識、スキルをもとに、今後の学修やキャリア設計を進めることができる

### 教科書

夏目達也、近田政博、中井俊樹、齋藤芳子『大学教員準備講座』玉川大学出版部(2010)

### 成績評価方法

受講態度・小課題 60%、レポート 40%

### 授業に対する意見（授業終了時のアンケートより）

- ・4名の先生に教えていただいて幅広い各分野の知識を得ることができてとてもよかったです。大学の教員の全体像を窺うことができました。
- ・今まで自分の専攻しか注目していなかったことに対して、視野を広げられるようになりました。
- ・教科書（大学教員準備講座）に述べられている通りに当日の授業内容の目的、時間配分、

進め方について開始時に明確にさせていただいたので、自分の中でも集中力のバランスを取ることができました。少人数で自由に質問でき、丁寧な回答をいただけたのも大変勉強になりました。

- ・自分が知りたいと思ったことがタイムリーに知ることができました。これをキッカケに学びを深めたいと思います。スライド説明や、ワークが多くて、聴くだけではない面白さがあった。
- ・4人の先生方がそれぞれ個性を生かしたスタイルの授業をしてくださったので、毎日刺激的で集中して受講できました。3日目の福井先生の講義は、あまり聞くことのない理系の大きなプロジェクトのマネジメントについて詳細なお話を伺うことができ、とても新鮮でした。また最終日の夏目先生の講義では、授業のスピード感の大切さ、硬軟をおりまぜて進めることの効果を体感でき、よい勉強ができました。
- ・先生たちご自身の大学教員としての感想・経験をもう少しお聞きしたかったです。
- ・主に日本で大学の教員になる場合の話でしたので、国際的な大学教員のことももう少しお聞きしたかったです。
- ・「倫理」の定義が自分の中ではあいまいだったので、それが明確になるよう考えることの重要性が学べて良かったです。（もう少し比重があると尚よかったなと思いました。）
- ・基本的に『大学教員準備講座』に書かれている内容が多く、事前に読んで来ると、講義自体のお得感が減ってしまい少し残念に思いました。
- ・10時～17時という長時間をそうとは意識しないほど、4日間とも興味深くわかりやすい内容で大変刺激になり満足しています。ありがとうございました。研究者・教員を目指す1人として参考にしたい点を忘れずに頑張っていきます。
- ・自分が知りたいと思ったことをタイムリーに知ることができました。これをキッカケに学びを深めたいと思います。
- ・研究拠点大学の教員の置かれている状況がよくわかりました。一部大学が大衆化する中で、大学教員に求められることが多様化していることもよく理解でき、これまでの経験や知識を相対化できたような気がします。

## 【資料】ポスター

### 大学院集中講義「大学教員準備講座」

高等教育学研究Ⅰ(前期2単位)@教育発達科学研究科

2011年8月2日[火]～5日[金]

10時～17時(休憩あり)

大学教員になるために必要な基礎的知識と技能の獲得をめざし、多面的に大学教員の職務を検討します。受講生の今後のキャリア設計やキャリア開発に資するよう、グループワーク等を適宜織り込んで実践的に進めていきます。所属研究科によらず、関心のある大学院学生の登録をお待ちしています。

各自が所属する研究科の教務掛で履修登録をしてください

開講時までに教科書〔夏目達也、近田政博、中井俊樹、齋藤芳子(2010)『大学教員準備講座』玉川大学出版部、2,400円税別〕を準備してください

講義初日は午前10時に講義室集合です

お問合せは高等教育研究センターまで〔内線5696 電子メール info@csh.nagoya-u.ac.jp〕

**到達目標** 大学の成り立ちや大学教員の職務について理解する。大学という組織で働くために必要な知識、スキルを身につける。異なる学問分野の人と交流する。授業で得た知識、スキルをもとに、自身の今後の学修やキャリア設計を進めることができる。**受講の前に** 教科書の該当の章を事前に読むこと。**成績評価方法** 受講態度および授業中の小課題=60% レポート(8月19日締切予定)=40% **担当** 夏目達也 近田政博 中井俊樹 齋藤芳子

- 第1講 大学教員という職業(大学教員職の歴史、大学教員職の特徴)
- 第2講 授業を設計する(授業のシラバス、シラバス作成法)
- 第3講 教授法の基礎(授業づくりの基本の型、学生参加型授業)
- 第4講 学習成果を評価する(教育評価の論点、評価の具体的方法)
- 第5講 書く力をつけさせる1(事前準備、授業中の働きかけ)
- 第6講 書く力をつけさせる2(採点、フィードバック)
- 第7講 大学教育におけるチームワーク(大学内の組織、学内リソースの活用法)
- 第8講 国際化のなかの大学教員(国際化の現状と意味、教育の国際化への対応、研究の国際化への対応)
- 第9講 研究のマネジメント(大学教員の研究活動の特徴、研究プロジェクト管理の基本)
- 第10講 社会サービスに取り組む1(社会サービスの概史、社会サービスの類型)
- 第11講 社会サービスに取り組む2(社会サービスにおける現代の課題)
- 第12講 大学教員の倫理(倫理とは何か、教育・研究の倫理実践、大学教員の自由と責任)
- 第13講 学生のキャリア形成を支援する(就職支援からキャリア形成支援への転換、主体的進路決定の支援)
- 第14講 多様な高等教育機関(教育・研究条件の多様性、多様性への対応)
- 第15講 大学教員のライフコース(生活設計、職階で異なる仕事)

# 大学教員準備講座 2011



## ◎セミナー・ワークショップ

○ 2011年4月19日 第96回招聘セミナー

「教養教育を中心とした学部は創れないのか—科学教養を21世紀の教養教育に—」



講師：黒田 光太郎（名城大学 教授）

日時：2011年4月19日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：大学大綱化以降、教養部が解体され、教養教育の壊滅的状況の見直しが必要だと認識されている。しかし、その動きは全国的に鈍い。報告者は、「教養教育をベースとした新学部の創設に協力して欲しい。また新学部は全学教育の再編の中心にもしたい。」という要請に応じて、科学教養をベースにした新学部構想を進めたが、その構想は実現できなかった。新学部構想の具体的内容、創設挫折後の総括などから、教養教育の重要性と困難性を検討したい。このことは21世紀における教養教育とは何かを考える手がかりになるであろう。

講演要旨：名城大学で進められた科学教養をベースとするリベラルアーツ系新学部構想の発足から頓挫に至るまでの経緯を振り返り、それを手がかりに、21世紀における教養教育のあり方について検討した。この構想の実現に当事者として参画した立場からの発言である。

科学教養の涵養を目指す「科学コミュニケーション学部（仮称）」設立に向けて、同大では2008年から準備が始まった。目標とする科学教養は、旧来型の人文科学系中心の教養教育ではなく、自然科学の素養をベースにしている。IT化・情報化の進んだ現代社会で、自然科学の素養が必要とされていることをふまえた。教養教育の見直し、全学教育の再編を企図した当時の名城大学学長要請に基づいて着手された。

教育理念は、「自然と人間と対話する科学の教養を身につけて広く社会に貢献する21世紀型市民を育成する」ことである。自然と人間(社会)を包括する科学知、

言語コミュニケーションとしての英語力、非言語コミュニケーション力としてのビジュアル表現力、の養成を柱とした。1・2年次の全学共通教育部門ならびに学部統合部門、3・4年次の各専門科目部門（5部門）により構成される。

2007年11月に設立された「新学部等開設準備室」（室長：教育担当副学長）が基本設計を担当し、2010年4月の開設に向けて、学長らは2009年1月から3月にかけて各学部教授会に対して説明を行った。一方、この時期に教授会声明という形で、3学部から反対意思が表明された。5月には文科省への事前相談の結果を受けて、開設を2011年4月に延期し、設置認可による設置に変更して、開設準備の審議を重ねた。10月には8回にわたり学長による新学部説明会が実施され、理解活動につとめたが、11月に開催された教学部門の意志決定機関である大学協議会で承認を得るには至らなかった。

2010年7月の理事会で行われた新学部経過報告では、不承認の理由として、以下の2点があげられている。a) 企画・立案・設計などの各段階で大学協議会における審議・承認を経なかった、という手続き的な問題、b) リベラルアーツに対する解釈の違い、新学部のコンセプトやカリキュラムに対する理解や共感の不足、など構想内容に関わる問題、である。とくに問題とされたのは、学内人材の活用を念頭に置いた5部門構成などである。

不承認の理由とされた二点は、名城大学が持つ歴史・伝統とも深く関わっている。同大では、学長・法人サイドによるトップダウンではなく大学協議会の決定が重視される学内情勢があった。教養部が元々なく、教養教育に対する認識や理解が共有されていないという事情もあった。後者の点に関しては、同大では、全学共通教育体制発足6年を経過した現在でも未だ2学部が参入せず、全学生の約半数が参与できていない。新学部構想が全学教育再編の要と位置づけられたこともあり、全学共通教育への十分な理解が得られていないことは逆風となった。構想内容に対する疑義に応える形で、5部門を2部門に縮小し、学部コンセプトを明確にした新学部「科学教養部」構想を準備したが、学内審議に至らなかった。

質疑応答の中で、構想について以下の点を補足した。①科学教養に関する幅広い知識を教育することは、有為な人材育成につながる。②科学教養が進路選択に幅を広げる点を重視し、十分な科学教養の習得を促すカリキュラムを構想した。③学部教育重視で大学院を設置しないこととした。④英語教育を強化し他大学・他研究科への大学院進学に対応できるようにした。⑤中部地区における理科教師養成拠点の一つとすることを目指した。

○ 2011年5月10日 第97回招聘セミナー

「副学長として大学改革に取り組む」

講師：清水 一彦（筑波大学 理事・副学長）

日時：2011年5月10日 18:30～20:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 カンファレンスホール

概要：筑波大学は、まもなく創立40周年を迎えますが、山田信博学長の「新構想大学」から「未来構想大学」への移行宣言を承けて、現在、大規模な教育改革に取り組んでいます。これまでの特色ある教育の展開とともに、教育研究組織体制の改編をはじめ、授業運営体制の改革教養教育改革、学位プログラム化、さらには産業界等の連携教育など、グローバル化を視野に入れた新たな改革の現状を紹介したいと考えています。

○ 2011年6月2日 第57回客員教授セミナー

「大学教育の改革—政策・研究の現段階—」



講師：金子 元久（国立大学 財務・経営センター）

日時：2011年6月2日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 教育学部棟2階 大会議室

概要：高等教育のユニバーサル化、経済のグローバル化の中で、大学教育の質的改革が国際的に重要な課題になっています。それに応じて、大学教育改革にむけて様々な政策がとられ、大学教育についての研究も行われてきました。これまでどのような動きがあったのか、それはどのような成果を上げ、また今どのような課題に直面しているのか。先行して大学教育改革が問題となったアメリカの事例を参照しつつ、日本の現段階について考えます。

講演要旨：経済社会のグローバル化、大学教育のユニバーサル化、さらにその中の大学入学者の意欲や学力の変化が、大学教育の質的革新を不可避の課題としている。

大学は国際的に量的拡大の時代から、質的な転換の時代にはいつているのである。

それを端的にあらわすのは政策の動きである。米国においては、大学教育の質は大学間の自主的団体である適格認定（アクレディテーション）団体によって担われものとされてきた。しかし 1990 年代にはいつて、大学教育のユニバーサル化の一方で、中退率が高まり、また授業料も上昇し続けた。その中で大学教育への投資が、どのような形で成果をあげているのかを具体的に示すことが求められるようになったのである。それに対応して、2000 年代にはいつて学生の学習行動についての全国的な調査が定期的に行われ、また学生の学習到達度を計測する標準テストなども開発された。

日本においては、1991 年の大学設置基準改正によって、大学設置基準が大綱化され、個別大学による自己評価が義務化された。またかなりの数の大学に「大学教育センター」などの名称をもつ学内教育改革機関が作られた。さらに 2000 年代にはいつて、大学教育 GP などの施策もとられた。しかしこれらは、それぞれが孤立した活動をおこなっており、幅の広い改革への動きを生みだしているとはいえない。

また研究の視点からみれば、従来は大学教育についての研究はその歴史あるいは理念にかかわるものが主体であった。しかしアメリカでは上記の流れの中で、学生の学習の規定要因の実証的な分析が広く行われることになった。上記の全国調査などのデータがその基盤となっている。日本においては、最近になって大規模の学生調査が行われるようになったが、まだその分析には残された課題が多い。

最も大きな日米間の重要な違いは、米国には政府と大学との間に様々な中間組織があり、それが上記のような動きを推進するうえで重要な役割を果たしている点である。伝統的に米国では各種の財団が高等教育の発展に大きな役割を果たしてきたが、大学教育の改革についても様々な試みを支援し、それが重要な影響を与えている。さらに各種の職能団体や、大学間のコンソーシアムなどが、上記の調査などの主体となる一方で、大学教員の自主的な大学教育改革運動を支えている。

日本においてもこうした中間組織が存在するが、それらの活動はまだ微弱といわねばならない。政策的にこうした中間組織を強化し、それによって各大学における教育改革活動を支援、強化していくことが、現在の課題といえるのではないだろうか。

○ 2011年6月22日 第98回招聘セミナー  
「動詞で語る『大学職員の専門性とその形成』」



講師：井上 真琴（同志社大学 企画部企画課長）

日時：2011年6月22日 18:30～20:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 カンファレンスホール

概要：中教審「学士課程答申」等を機に、大学職員の専門性と能力開発が声高に語られるようになった。しかし、その専門性の正体はいまだ明確な輪郭を持たず、専門性が形成される具体的なプロセスも不透明なままである。セミナーでは、大規模私立大学職員である自身の業務実践(特に図書系・教学系)を振り返り、また大学コンソーシアム京都のSD事業開発に携わった経験を踏まえ、職能分析と省察的実践の視点から大学職員の専門性について参加者と意見を交わしたい。

講演要旨：大学の職員が専門性を獲得するプロセスについて、自分自身の経歴を踏まえて考えたい。

大学職員が専門性を獲得するためには、どのような環境にあっても教育にコミットする意識を高めておくことが、まず大切である。次に、自身の業務内容の徹底した質的分析が必要である。始めは業務を思うように遂行できなくても、そのプロセスをていねいに省察することにより、次第に適切に遂行できるようになるし、専門性を身につけることに繋がるだろう。例えば、大学図書館界では、研修プログラムが他の領域に類を見ないほど整備されているが、研修会等を通じて知識が増えても、習った知識を実際に使うことができなければ専門性が身についたとは言えない。そこでは、知識を“学びほぐす”能力が求められるだろう。能力開発よりコンピテンシー開発が重要であって、獲得した知識・能力を何らかの成果に結び付けなければ、コンピテンシーがあるとは言えない。

大学職員特有の専門性は、一般の企業人のそれとは異なる、大学というものの組織文化を理解した上で、その中でいかに物事を実現していくか考えることが重要である。大学職員の専門性は、実践面において教員を凌駕できるようなコアの専門性の他に、一般的な「実現マネジメント」能力、つまり、組織の目的と目標

のために実際にヒト・モノ・カネを動かす能力がもう一つの要素となる。このマネジメントにおいては、大学教員の組織文化を意識することが不可欠である。そのために、職員は教員と共通の言語を持ってお互いの役割を理解していくことが求められる。ピーター・ドラッカーが「組織の目的は専門知識を共通の課題に向けて統合すること」だと述べているが、教員の専門知識、職員の専門知識を融合させるマネジメントこそが大学職員の専門性であろう。

鷺田清一大阪大学総長は、平成 22 年度卒業式・学位授与式の式辞の中で「一つのことしかできないというのは、ほんとうのプロフェッショナルではない。たんなるスペシャリストに過ぎない」と述べている。この点は大学職員の専門性のあり方ともかかわる。自分の専門領域の言語のみで他者を抑え込もうとするのではなく、他の専門家に対する理解を深めること、同時に自分の専門的知見について関心を持ってもらえるように、その内容を正しく伝えることが、これからの大学職員には求められている。

○ 2011 年 7 月 15 日 第 99 回招聘セミナー  
「授業支援システムを活用した授業改善コミュニティの創造」



- 講師：山川 修（福井県立大学 学術教養センター教授）  
日時：2011 年 7 月 15 日 16:30～18:30  
場所：東山キャンパス 文系総合館 3 階 306 号室  
概要：福井県内の 7 つの高等教育機関があつまり、学習コミュニティをキーワードに大学連携プロジェクト（F レックス）を進めている。F レックスでは授業支援のための LMS、学習者支援のための e ポートフォリオ（ePF）、コミュニティ支援のための SNS をシームレスに接続し、授業内外での学習に利用している。本講演では、F レックスで LMS、SNS、ePF をどのように活用しているか、また活用ための教員や学生のコミュニティをいかに形成したかに関して報告を行う。

講演要旨：本講演では、まず、Fレックスの概要について述べた。続いて、Fレックスの形成基盤・運営指針となるコミュニティ形成の原則を整理した上で、コミュニティの活性度を評価していく方法を確立するための現在の取り組みを示した。

Fレックスとは、福井県内の6つの高等教育研究機関が連携・参加する Fukui Learning Community Consortium (F-LECCS) のプロジェクト名称である。Fレックスでは、学習コミュニティをキーワードに、大学間連携を進めている。

対面の活動には、教員による研究会・シンポジウム・合宿研修会、学生主体のRT会、LT会などがある。ネット上の活動の中心は、授業を支援するLMS、コミュニティ形成を支援するSNS、学習者を支援するeポートフォリオである。これらはシングルサインオン(SSO)を利用してシームレスに利用可能である。また、SNSは完全実名制にするなど、対面の活動との連携も図っている。これらのシステムには、現在約9,000名が登録しており、月1~2万のログインが確認されている。また、TV会議・Web会議システムなど遠隔会議の支援、授業収録・配信システム、公開講座・単位互換情報システムの運用・管理なども行っている。また、Fレックス外部へは、ニューズレターの発行、Maharaオープンフォーラムの開催、MaharaユーザコミュニティMLリストの運用など、さまざまな形で情報発信を行っている。

Fレックス全体をコミュニティとして継続・発展させるため、E.ウエンガーらの著した『コミュニティ・オブ・プラクティス』の中の「育成の7原則」を参考に、「活動」「運用」「参加」の3つのメタ原則を明確化している。「活動」では、複雑系科学におけるedge of chaos理論を援用、「公と私」「対面とネットワーク」など対立する2つの運動を対置し、発散と収束の力による自己組織化を目指す。「運用」では、生物系科学における進化の視点から、統一性によって方向性を保ちつつ、多様性によって環境の変化に対応していく組織力を作る。また、コミュニティ活性化の要となる積極的な参加を促すため、価値の問題に焦点を当て、個人の価値実現のための実践コミュニティとしてのあり方を意識したシステム形成・運用を心がけている。

このように、コミュニティ形成のメカニズムを明らかにした上で、定量化した情報の解析から現在の状態を把握し、成長の方向性を評価することを目指して、いくつかの取り組みを行っている。ソーシャルグラフや隣接行列によるネットワークの可視化、クラスター係数や次数相関を用いた指標による状態の把握、テキストマイニング等も駆使したソーシャル・キャピタル定義、そこから学習へのコミュニティの影響の検討などである。

○ 2011年7月26日 第100回招聘セミナー

「フランスにおける高等教育グローバル化と大学経営改革」



講師：サイード・ペバンディ（パリ第8大学 准教授）

日時：2011年7月26日 17:00～19:00

場所：東山キャンパス 文系総合館3階 17:00～19:00

概要：フランスでは、1968年に大規模な学生運動が展開された。これを受けて、政府は大学組織を大幅に見直す改革を断行した。それ以降、大学のガバナンスや自治をめぐる問題は、つねに高等教育政策の中核的な位置を占めてきた。フランスの大学は、歴史的に国による監督を受けてきたが、その管理・運営の基盤は十分とは言えず、むしろ弱いというのが実情である。しかし、近年、この点の改善をめざして連続的に改革が行われており、状況は大きく変化している。2007年には「大学の自由と責任法」（LRU法）が制定され、これに基づいて大学改革が進められている。そこでは、「大学を魅力的にする」「大学の研究水準を国際的なものにする」「麻痺状況にあるガバナンスの現状を改善する」という目的に沿って、大学の自治を拡大する方向が追求されている。同法は、大学の管理運営方式に大きな変化をもたらしている。とくに、学長および各大学の最高議決機関の役割と権限を強化した。国は大学の評価等に自らの役割を限定し、大学経営に直接関与することを控えている。このような変更によって、各大学のガバナンス能力だけでなく、大学固有の文化についても、いくつかの問題が提起されている。

講演要旨：フランスの大学は、ガバナンスや国との関係のあり方に関して、1968年以降何回かの大きな改革を経験している。

組織的に脆弱で国に依存するという歴史的背景をもつフランスの大学にとって、それは自治獲得の過程であったとみることができる。

1968年のフォール法は、学術的文化的性格を有する公共施設という新たな法的地位を大学に与えた。この法律により、教員、研究者、職員、学外者で構成する管理評議会と研究評議会を、各大学は設置することになった。

1984年制定のサヴァリ法は、上記の2つの評議会に加えて教育・大学生生活評議



会の設置を規定するとともに、学長に対して従来よりも若干大きな権限を付与した。学長は、これら3つの評議会の合議により選出され、同時にこれらの評議会で議長を務めることになった。

2007年制定の「大学の自由と責任法」は、法・管理・財政に関する責任を大学に担わせることにより、裁量権の拡大を図った。大学は人的・財政的資源、不動産を管理することになり、4年間契約への署名の義務を負うことになった。この契約は、教育省と連携して改革を進めるための手段とされ、契約内容に沿って国からの補助金が大学に交付されることになった。国の意図は、この野心的な改革を通して、大学の魅力を高め、大学の研究活動を国際水準に高めること、大学の管理・運営を大学の責任で改善することにあった。

2007年法により、大学と国・中央省庁との関係が再定義され、資源の最適化と同時に、知識経済社会におけるフランスの地位向上が企図された。大学運営を能率的なものにしたり、新たなミッションや大学間の国際競争が提起する諸課題に直面するうえで、大学の執行部の強化や経営の改善が不可欠であると、国は考えている。

以上の大学改革は、1990年代末からの長期間にわたる改革の過程に位置づいている。「欧州高等教育圏」建設をめざして、1999年に29カ国がボローニャで署名したが、そこではよりハイアラーキカルなガバナンスを大学に導入することが盛り込まれていた。欧州高等教育圏をより調和のとれたもの、より競争力のあるもの（たとえば、研究拠点の創設）にすることを企図していた。そのときから、フランスの大学は、大学間の国際競争と新たなガバナンスという課題に直面することになった。

「西暦3000年の大学」という計画の下で、大学内および大学間の再編成を進めるとともに、教育と研究の改善を促進することになった。2008年に開始された「研究・教育拠点」（PRES）とキャンパス改善計画も、同様の目的をもっている。

このような環境の下、フランス大学はマネジメント変更が必要となっており、学長とその補佐、および管理評議会は、管理のあり方をいかに改革するかについて検討することが求められている。変化の文脈に沿ってガバナンスや成果を改善することは、大学政策の核心をなすものである。大学の裁量権拡大の政策によって、各大学はマネジメントに関する新たな課題に直面しており、その課題に対応するにはもはや旧来の手法は使えなくなっているのである。

○ 2011年8月9日 第58回客員教授セミナー  
「大学教育のプロフェッショナル化」



講師：加藤 かおり（新潟大学 大学教育職能開発センター 准教授）

日時：2011年8月9日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：わが国の大学教育職は、高度な専門職業とされているにもかかわらず、現在もなお、何をもって専門職業といえるのか確固たる証もなく曖昧模糊としている。しかしながら、高等教育を巡る社会的文脈の変遷に伴い、大学教育職もまたそのあり方を問われようとしている。本セミナーでは、同様の高等教育のグローバル化を背景に大学教育のプロフェッショナル化を進めている英国をはじめ欧州の事例を紹介しつつ、その意義や課題を考えたい。

講演要旨：本セミナーは、大学教員という専門職業の活動の1つである教育(teaching)についてのプロフェッショナル化の意味や動向について話題提供を行い、わが国における課題を議論することを目的とした。話題提供の内容は、具体的に、大学教育のプロフェッショナル化の背景、要件、諸外国の取り組みについてであった。

大学教員は、中教審答申等にもあるように「高度な専門職業」とされている。しかしながら、その主な活動の1つである教育については、その専門性も明確ではなく専門的訓練もないなど実体がない。加えて昨今「第3の教育」としての高等教育の位置づけの変化が教育者としての大学教員の役割に対する期待を増幅させるとともに教育機能の多様化が教育スタッフの役割や枠組みを拡大し大学教育職という意味の不安定性をもたらしている。

一方、①教育の質の保証や向上の観点から、教員の最小限の教育力を保証することが国際的にも教育機関の責務となっていることや、同時にアカデミックな学習の維持や卓越した学習のための質の高いティーチングの開発が課題となっていることや、②その質保証の責任母体である教育担当部局の再編成の観点から、以前の講座制がもっていた仲間や後継者養成の機能に代わるプロフェッショナル集団育成の仕組みが必要となっているなど、専門職としての能力や組織の課題もブ

ロフェッショナル化の背景となっている。プロフェッショナル化には、専門的知識スキルや共通の価値や倫理観があること、それらを保証し発展するための訓練等の仕組みがあることが最小の要件である。これら要件について諸外国の取り組みをみると、例えばイギリスは、ティーチングの知識スキル、価値観について全英レベルの共通認識のための目安である「教育および学習支援のためのプロフェッショナルの基準枠組み(UKPSF)」を2006年に策定し、この基準枠組みに基づいた「教育プロフェッショナルの認定」を高等教育アカデミーの調整のもとに行っている。認定の方法には、①UKPSFを指標にエビデンスを用意して個人申請する方法、②UKPSFを用いて認証された所属機関提供の教育プログラムに参加し修了証明をもって申請する方法、③全英ベストティーチャー賞である全英フェロウシップの受賞をもって申請する方法の3つがある。この際、認定の基本方針は、あくまで教員自身が専門職業人として自ら能力の証明を行うというものである。機関内の認定と国としての認定を連動させた方法で国家としての基本的な教育力の保証を担保していることがイギリスの方法の特徴といえる。この他、機関内での認定の方法として教育プログラム修了証明を用いている国にノルウェーやスウェーデンなどがあり、ティーチングポートフォリオを用いた継続的な能力証明の方法を用いている国にカナダやアメリカ、オランダなどの国がある。

## ○ 2011年10月19日 第101回招聘セミナー

### 「学びのかたちを皆でつくる—水戸芸術館“高校生ウィーク”の実践を中心に—」

講師：森山 純子（水戸芸術館）

日時：2011年10月19日 17:30～19:00

会場：東山キャンパス 文学部棟 128 講義室

概要：東日本大震災で被災した水戸芸術館は7月に展覧会「CAFÉ in Mito かかわりの色いろ」で活動を再開。収蔵品を持たない美術館の財産は21年間で築いた作家や地域との「つながり」であり、展覧会はその人的財産が形となった。年間を通じて行う教育プログラムは「つながり」をつくる最も地道な活動であるが、人が心を揺るがす場に居合わせ、関係性を重ねていける点では最もエキサイティングな場でもある。今回はその中から毎年1カ月間行う「高校生ウィーク」において、人々が協働で育ててきた活動を紹介する。

○ 2011 年 10 月 21 日 第 102 回招聘セミナー

「政策におけるエビデンスの活用—ポストドクターに関する調査研究の事例から—」



講 師：岩崎 久美子（国立教育政策研究所 総括研究官）

日 時：2011 年 10 月 21 日 16:00～18:00

会 場：東山キャンパス 文系総合館 7 階 オープンホール

概 要：ポストドクター（PD）に関する調査研究は、どのように政策に活用され、かつ社会的なインパクトを与えたのだろうか。政策の根拠となる研究（エビデンス）には、つくる（研究成果の産出）、つたえる（研究成果の伝達）、つかう（政策での活用）の 3 つの段階がある。国立教育政策研究所のプロジェクトとして行われた PD の調査研究を事例に、研究成果としてのエビデンスの政策活用プロセスとそのアウトカムについて検討する。

講演要旨：1990 年代後半から、予算獲得、政策立案、説明責任、政策評価の根拠として、研究成果の活用をエビデンスという言葉で検討する動きが英国や米国で見られている。ここでは、平成 18-19 年度国立教育政策研究所と日本物理学会との共同研究で行われたポストドクター（PD）に関する調査研究（PD 調査）を事例に、エビデンスの産出、普及、活用について検討する。

1. エビデンスの産出…PD 調査は、教育財政、労働心理、素粒子物理などの研究者や臨床心理士といった学際的な集団から構成され、1) 面接調査 (n=51)、2) 他分野進出事例調査 (n=9)、日本物理学会会員ウェブ調査 (n=1,667) の 3 つの調査に基づく多角的アプローチに依拠した。結果、需給予測による PD への将来の見通しの提示、年齢別のキャリア支援のニーズの特定を提言した。

2. エビデンスの普及…研究成果の普及には、大きく 3 つの方法をとった。第一に、紙媒体として、報告書 (3 冊)、パンフレット、書籍（『ポストドクター問題』）を刊行した。学会誌や新聞社 2 社から書評が出されたこともあり、書籍が社会的には一番注目された。第二に、政策立案者への働きかけを行った。官庁該当部署へのレクチャーや、外部評価委員会などで成果と提言を伝えた。第三に、社会的影響力のある人物を活用した。日本物理学会会長（当時）による共同研究

への参画、さらに、2008年に素粒子・原子核領域からのノーベル賞受賞者（3名）が出て、その中のひとりによる書籍（『ポストドクター問題』）の帯文への協力は有効であった。

3. エビデンスの活用…研究成果は、議員や内閣府からの資料請求や、教育以外の学会、企業人事担当者、新聞社やシンクタンクから内容照会があった。その成果は、統計資料としての活用、国会質問での利用や、書籍による社会的啓発を経て、高等教育人材政策の議論へ影響し、政策研究へのさらなる発展が見られた。このように、PD調査でのエビデンスの産出、普及、活用を振り返ると、政策科学を志向した研究の活用は複雑で、必ずしも政策に直線的に活用されるわけではない。ウェイス（Weiss, C.H.）が研究活用モデルを分類しているように、研究が政治的立場の支持や口実として利用される場合も多い。実際には、問題解決を目指す研究成果の政策活用のためには、多様なアクター、そして研究と政策をつなぐ政策ブローカーなどの知識媒介者が必要なのである。

#### ○ 2011年11月2日 第103回招聘セミナー

#### 「失敗事例・成功事例を通じた教務系職員育成のあり方」



講師：村瀬 隆彦（佐賀大学 学務部長）

日時：2011年11月2日 18:30～20:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：「学士課程答申」の指摘を待つまでもなく、大学職員には複数領域での幅広い知見と特定分野での高い専門性を併せ持つことが求められている。本セミナーでは、教務系職員に焦点を当て、教務の現場で日常的に発生する種々の課題への対応（失敗事例・成功事例）の経験を共有することを通して、職員育成のあり方を考察してみたい。教育改革の最前線に立つ教務系職員の職能開発の一助になれば

幸甚である。

講演要旨：はじめに…大学教育の質の保証が求められ、大学教育の改革が喫緊の課題とされる中、それを支える教務系の人材育成が不十分ではないかと危惧されている。国立大学においては、元々学生に関わる業務を軽視してきたことが、その理由の一つであると考えられる。また、教務関係の的確なテキストが少ないことが人材育成の支障の大きな理由の一つであろう。本日は、教務系職員の職能開発に資するテキスト作成に関して、教務の現場における失敗事例・成功事例を振り返ることを提唱したい。そこからは学ぶべき多くのことが見えてくる。それは、教務系職員向けのSD教材の宝庫と言えるだろう。

### 1 KKD（カンと経験と度胸）

教務を含む学生系の業務は、過去においては、「カンと経験と度胸で対応すべし」と言われていた。（これを私は、「KKD」と呼ぶ。）しかし、新たな課題に追われる今日では、KKDでは業務に対応できない。

一方で、教育に関する法規を読んでいるだけでは教務系職員は育たない。一定の経験を土台として関連法規を学ぶとともに、感性（センス）を磨き、論理的な態度と判断力を身に付けることが必要であろう。つまり、KKD+αが必要であり、新たにKKL（経験K、考えることK、感性K、論理性Logical）を提唱したい。

そのためにも、過去の幾多の事例や現在も現場で起こっている幾多の事例に学ぶことが必要であると考えます。

### 2 失敗事例・成功事例の紹介

最初に、これまでに体験した失敗事例を紹介したい。①教育職員免許法と齟齬のある大学内規を運用していたために起こった教育職員免許状資格認定に係る過誤、②オムニバス方式授業科目の成績統合システムにミスがあったために起こった成績認定に係る過誤、③教務情報システム運用に問題があったために、在学期間を超過した学生に係る過誤、④学生の死亡除籍対応に係る失敗例

次に、成功事例を紹介する。①推薦入試の日時とラグビー全国大会決勝の日時が重なったために実施した特例入試、②職員が企画・立案に参加した、学生支援に関する新たな取組、③教務系職員によるSD・FDプログラムの開発

### 3 失敗事例・成功事例から見えてくるもの

失敗事例・成功事例を俯瞰し、検証してみると次のような共通の課題が見えてくる。

1つ目は、当然のことではあるが、教育関連法規をある程度理解することが必要不可欠であるという点。しかも、単なる逐条解釈ではない実践的な理解が必要である。失敗事例は、法規を学ぶ切掛けになるだろう。2つ目は、教務の現場では、「学生の視点」「社会の視点」を持っていないと思わぬ事態を招きかねないという点。具体の成功・失敗事例から学びたい。3つ目は、情報システム過信の

ために起こるトラブル。これは、失敗事例が警鐘を鳴らしている。システムをチェックする思考を持ちたい。4つ目は、教職協働の必要性。「職員のパワー（1）」＋「教員のパワー（1）」＝2未満という大学が多いのではないか。1＋1＝3以上というような大学でなければならない。これは、教職協働の成功事例から学びたい。5つ目は、前例踏襲の打破という点。前例踏襲型の対応では立ち行かなくなってきた。前例踏襲による失敗事例、その反対の成功事例を知ってほしい。6つ目は、教務の嗅覚が必要という点。業務遂行のためには、センス（「気」）が必要である。教務の嗅覚を身に付けることは、他のセクションでも役立つセンスにも繋がる。これは、経験を積むことが第一ではあるが、失敗・成功事例を擬似体験してほしい。7つ目は、危機管理を想定するという点。教務に関するトラブルは、大学に大きな打撃を与える場合がある。これは、失敗事例から学びたい。未然の事故防止及び事故後の的確な対応が、自らも大学をも救う。

#### 4 失敗事例・成功事例を通じた職員育成

以上のおおりの失敗事例・成功事例を検証すると、そこから学ぶべきことが多いことに改めて気付かされる。過去の事例に学ぶべきであることは、教務の分野に限ったことではない。しかし、会計や庶務の分野には学ぶべき多くの法規や手引き（マニュアル類）が存在するのに対して、教務の分野ではそのようなテキスト類が少ないのが現状である。この点に関して、昨年度、名古屋SD研究会が作成した「教務のQ&A」は、教務の実践的な場面に基づいて教務の知識や考え方が述べられており、一つの指針となったと考えている。

教務の現場では、思いもよらない事態、法規には解決策が書かれていないトラブル、正解のない課題が少なくない。また、最初に述べたように、大学教育の改革は喫緊の課題であり、それを支えるための教務に精通した人材が求められている。

教務系職員の育成には一定の経験と研鑽が必要ではあるが、失敗事例・成功事例を学び、過去の経験を擬似体験した上で自ら考えさせることが、人材育成の早道ではないだろうか。そのために、先達の貴重な体験や日々教務の現場で生じている出来事を事例集としたテキストの作成を提案したい。そのテキストは、従来の業務マニュアル（〇月にはこれを準備し、〇月の教務委員会には△△を諮る等を纏めたもの）とは異なり、自ら考える切っ掛けを与えるものであること、また、そのような事例を集めたり、記したりすることは、教育の研究者ではなく事務職員自らの役割であることを付け加えておきたい。

○ 2011年12月2日 第104回招聘セミナー  
「立命館大学で教学改革に挑む—FDの次のステップ—」



講師：沖 裕貴（立命館大学 教育開発推進機構 教授／機構長補佐）

日時：2011年12月2日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：立命館大学で取り組んでいる教学改革を、マクロ・ミドルレベルの「各学部・学科のDPの達成のための活動」からミドルレベルの「日常的な教育改善活動」、さらにはマイクロレベルの「教員団の職能開発」に分けて紹介するとともに、FDの次のステップとして、大学経営や教学改革、授業改善、学生支援に対する学生自身の参画の可能性について、立命館大や他大学の事例をもとに検討したい。

講演要旨：日本のFDの定義は、「教員の教授内容・方法の改善への取組」と規定された大学設置基準の大綱化（1991）以来大きく変化してきた。2008年の設置基準の改正に引き続く中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（以下、学士課程答申）では、単なる研修会の開催・実施から大きく踏み出し、FDの実質化とも言える「日常的な教育改善活動」や自らの教育活動を省察できる「教員団の職能開発」の必要性に言及した。さらにそこには3つのポリシー（DP: Diploma Policy、CP: Curriculum Policy、AP: Admission Policy）の策定・公開と、DPの達成のための日常的、組織的な活動およびその効果検証こそがFDの本質だとする論調も浮かび上がっている。

本講演では、これらのFDの新しい含意への対応として、立命館大学で取り組んでいる教学改革を紹介するとともに、FDの次のステップとして大学経営や教学改革、授業改善、学生支援に対する「学生参画」を取り上げる。

本学の教学改革は、学士課程答申を遡ること1年半、2007年に制定された本学のFDの定義に基づいて実施されている。本学のFDとは「①<What for>建学の精神と教学理念，学部・研究科の教育の目標の実現するための、②<What>すべての日常的な教育改善活動で、③<Who>教員が職員と共同し、学生の参画を得て実施し、④<How>PDCAサイクルで検証するもの」と定義されている。



①②および④は学士課程答申に見られる「DPの達成のための日常的、組織的な活動とその効果検証」に符合し、③はFDの新たな展開を示唆する「学生参画」を意味する。これらを実現する具体的な活動は、DP・CP・APの一貫性構築の取組や「学びの実態調査」の開発・実施・分析、教育改革総合指標（TERI）の取組に見られるほか、組織の成熟度評価の試行や「教員団の職能開発」に対応する実践的FDプログラムの開発・実施など多岐にわたる。さらに学生自治会（全学協議会、五者懇談会等）や学生FDスタッフとの連携・協力、授業や学生生活を支援するピア・サポーター制度などを包含した「学生参画」による教学改革も、本学では1960年代より伝統として引き継がれ、発展している。

欧州高等教育質保証協会（ENQA）の「欧州高等教育圏における質保証の基準とガイドライン」には大学のガバナンスに対するステークホルダーとしての学生の関与がうたわれ、アメリカでは学生が教員の授業をコンサルティングするSCOT（Student Consultation on Teaching）の取組が報告されている。本学のFDの定義がFDの実質化に寄与するのみならず、FDの次のステップを示唆するものであるならば大変嬉しく思う。

#### ○ 2012年1月18日 第105回招聘セミナー 「あらためて考えてみる大学で働くということ」



講師：蜂屋 大八（茨城大学 キャリア教育部 准教授）

日時：2012年1月18日 18:30～20:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：大学事務職員として毎日をあくせく働いている中、ここでちょこっと足をとめて、「大学で働くということ」について、みんなで考えてみませんか。

大学とは？事務職員とは？教員との違いは？我々の可能性は？学生との接し方は？そして、魅力ある大学創りのため、事務職員だからこそできることってなんだろう。このぼんやりとした問いに対する答えが、参加者の心の中にポッと灯る

会にしたいと思っています。

講演要旨：講師は、山形大学で事務職員として20年勤続した後、現在は茨城大学で教育職に就いている。事務職から教育職への転身というキャリアの事例は、まだそれほど多くない。この経歴をふまえて、大学事務職員とは、教員とは、そして「大学で働くということ」とは、というある種根源的な主題について、参加者とともに考えてみた。

時代の変化とともに、大学に求められる機能も変遷していく。同時に、大学で働く事務職員像も変容することは当然であるし、また変わらなければならない。教員と事務職員では、形成する組織の型が異なる。同僚的組織といわれる教員と官僚的組織で成り立つ事務職員では、同じ大学で働いているにも関わらず、立脚点が一致していない。そのため、相互理解にたどり着くには多分に困難が伴う。それには、これまでの歴史も大きく作用しており、それぞれの性質に相違があるだけであり、どちらかが一方的に上位である、又は優れている、という意味ではない。それぞれに優位性を持っているということを認識し、その優位性を活かして、ともに働いていくことが重要である。協働していくためには、相互に信頼関係を築かなければならない。

大学教職員がともにめざすものは「チーム教育」であり、そのために「大学人」であることが重要である。大学事務職員のプロ、真の大学事務職員像を目指さなければならない。大学事務職員としての「誇り」と「気概」を持ち、教員の信頼を獲得することが必要である。山形大学の職員としての実践事例として、教育改革（GPの獲得、各種教育プロジェクトの推進等）の取組がある。この実績をふまえて、最も強調したいことは、「行動すること」である。知識ばかりを蓄え口先だけの人間になってはいけない。地に足をつけて、大学で働くことに向かい合わなければならない。

講演後の質疑応答では、事務職員という立場でなぜそれを為し得たのか、なぜ事務職員から教員に転身したのか、転身して何が変わったかなどの率直な質問が参加者から多数出された。質問に対する回答として、自身の経験を通して、教員と事務職員の間をつなぐ、中間職・専門職の設けることが必要になっていること、「誇り」と「気概」を持ち、事務職員、教員というカテゴリを越えて奮闘することが必要であること、が指摘された。

大学改革に対する思いと実績に基づく講師の熱いメッセージを受けて、活発に質疑応答が行われた。

○ 2012年2月9日 第59回客員教授セミナー

「Internationalisation of Higher Education in Japan and the UK—similarities and contrasts(大学国際化の日英比較—類似点と差異)」



講師：トリシア・C=ジョーンズ（ポーツマス大学 言語・文化地域学部 主任講師）

日時：2012年2月9日 14:00～16:00

場所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概要：このセミナーでは英国と日本で学ぶ外国人留学生の類似点と差異を紹介します。

日英両国における外国人留学生が、受け入れ国への社会文化や教育文化にどのように適応しているかに注目します。調査の結果から、留学生支援において日英の大学は類似点が多いと同時に、日本の大学の方がインターネットよりも対面型の支援をより重視する傾向があることがわかりました。

講演要旨：イギリスの大学でも、さまざまな国からやってきた留学生が文化適応に苦勞する事例は少なくありません。学習習慣や人間関係のあり方について、彼らは母国と留学先の文化ギャップに戸惑うようです。たとえば東アジア出身の留学生なら、授業中は教員の説明をもっぱら正確にノートに書き留めることが習慣化していることが多いです。この場合、授業中に教員に質問するのを自発的に遠慮する可能性が高いかもしれません。彼らはむやみに発言することによって授業を妨害してはいけないと考えるからです。

こうした文化的な要因は他にもいろいろあります。たとえば、母国が個人主義的な志向の強い社会か、あるいは集団主義を重んじる社会か。男性的な志向の強い社会か、あるいは女性的な志向の強い社会か。文字文化を重んじる社会か、あるいは口頭での議論を重んじる社会かなど。留学生の文化適応をスムーズにするために、こうした文化的差異や適応方法について紹介するオリエンテーションを実施したり、受け入れ国の地域文化に触れる機会を提供するなどの工夫が受け入れ大学に求められます。

留学生向けのオリエンテーションプログラムに関する日英中の大学調査（2010年）によると、留学生アドバイザーと接する機会、生活情報や交流プログラムの提供、学習相談の機会などにおいて、日本の大学は英中に比べて留学生から高い

評価を得ていることがわかりました。そして、イギリスの大学では情報をオンラインで入手する方式が一般的なのに対して、日本の大学では重要な情報はできるだけ紙媒体で配布する習慣がより強いという点です。このことは技術の問題というよりも、文化や価値の違いなのかもしれません。

留学生の受け入れを成功させるためには、まず受け入れ大学側は留学生がどのような文化背景のもとで育ってきたのかに関心をもつ必要があります。そして、受け入れ大学の教職員自身もつ文化的バイアスを自覚し、それを留学生に押し付けるのではなく、互いの多様性を尊重する姿勢が求められます。

受け入れる留学生を増やすことは、大学の国際化の第一歩にすぎません。第二段階としては、カリキュラムの内容にも留学生の経験を反映させたり、国際的な問題を扱うことが必要になるでしょう。いわば「カリキュラムの国際化」が求められます。そして、第三段階として目指すべきは、「教職員の国際化」です。これほどこの国の大学でも困難が伴う課題ですが、教員集団の文化的多様性は大学の組織文化にも大きな変化をもたらす可能性をもっています。

○2012年2月23日 第60回客員教授セミナー

「大学生の学力形成支援」



講 師：山内 乾史（神戸大学 大学教育推進機構／大学院国際協力研究科 教授）

日 時：2012年2月22日 16:00～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館7階 オープンホール

概 要：現在、各大学においては、教育から学習へ、授業改善から学習支援へと教育改革の大きな流れに変化が見られます。その一方で、AP、CP、DPの作成など、授業の実質化、単位の実質化、よりシステマティックな教育への流れ、言い換えれば学校化への流れも見られます。しかし、いずれにせよ、現在、本務校で学んでいる学生の学習履歴、学習状況と学力を把握することから議論はスタートすることになるわけであり、教えるべき授業内容がそれに先行してあるわけではないと考えます。本講演では神戸大学生の学習履歴、学習状況はどのような実態なのか、それに対して大学がどのような改革を志しているのかについて、お話しさせていただき、意見交換をさせていただきたく存じます

講演要旨：現在、各大学においては、教育から学習へ、授業改善から学習支援へと教育改革の大きな流れに変化が見られます。その一方で、AP、CP、DPの作成など、授業の実質化、単位の実質化、よりシステマティックな教育への流れ、言い換えれば学校化への流れも見られます。しかし、いずれにせよ、現在、本務校で学んでいる学生の学習履歴、学習状況と学力を把握することから議論はスタートすることになるわけであり、教えるべき授業内容がそれに先行してあるわけではないと考えます。

本セミナーでは神戸大学生の学習履歴、学習状況はどのような実態なのか、それに対して大学がどのような改革を志しているのかについて、お話しさせていただきました。第一に大学改革の力点が授業改善から学習支援へ、学習の実質化へと大きく変化があったことについて神戸大学の教育・学習リソースの現状について名大を含む旧帝大、旧官大と比較しながら検討し、その限られたリソースの中でどのような工夫をしているのか、どのような課題と限界があるのかについて論じました。また学生の高校時代における履修経歴の多様化について神戸大学の調

査をもとにお話ししました。第二に、大学生全般の学力状況について、JGSS のデータをもとにお話ししました。履修経歴の多様化（水平的多様化）と学力低下・拡散化（垂直的多様化）がいずれの大学でも程度の差こそあれ、認められ、それを入学後早期に整えることがことに共通教育と学部の初年次教育において課題であることを指摘しました。第三に私自身が籍を置いている神戸大学の全学の教育を司る大学教育推進機構の役割について組織論の観点からお話ししました。大学教育推進機構はかつての大学教育研究センターとはまったく異なるコンセプトに基づく組織ですが、どこがどう異なるのか、なぜそのような組織が必要とされたのかについて詳細にお話ししました。第四に神戸大学の、特に共通教育を中心とする課題についてお話ししました。

## ◎教職員海外派遣事業

### 1. 海外研修の目的

- ・先進的にFD・SDを行っている海外の実践を学び日本への示唆を得る。
- ・日本でのFD・SDの取り組みを異なる視点から捉え直す機会をもつ。

### 2. 海外研修先

参加学会：2011POD Network Conference

期 間：2011年10月26日（火）～2011年10月30日（日）の5日間

開 催 地：アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ

会 場：ヒルトン・アトランタ

P O D：Professional and Organizational Development Network in Higher Education

《POD大会に教職員で参加する意義》

- ・PODは、FDや教授法、SD、大学組織の開発を目的とした学会であり、教員、職員が共に多角的な視点から学ぶことができる。
- ・PODの主なメンバーは、全米各大学のFD担当部署（大学教育センター等）所属教職員であり、その実践報告を聞くことにより教員メンバーは、FDの多様なあり方を学ぶことができる。
- ・FDへの取り組みだけでなく、日本ではそれほど推進されていないSDの実践事例から学ぶことができる。

### 3. 研修参加者

中井 俊樹（名古屋大学高等教育研究センター准教授）

船戸 祥史（名古屋大学学務部学務企画課課外活動掛事務職員）

## 2011年POD年次大会において学んだこと

名古屋大学高等教育研究センター

中井 俊樹

本稿では、2011年POD年次大会で学んだことを簡潔にまとめる。参加したセッションにおけるプレゼンテーションやディスカッション、カンファレンスのさまざまな場での情報交換、各種の刺激によって自身で調べたことなどをトピック別に記述する。

### 草の根リーダーシップ

大学におけるリーダーシップを考える際に、Kezar と Lester が提唱する草の根リーダーシップ (Grassroots Leadership) は有効な枠組みと言える。学長や副学長などを対象としたリーダーシップではなく、役職や権限のない教員のリーダーシップを重視した概念である。役職者のリーダーシップの研究 (Kouzes, & Posner, 2003) や学生のリーダーシップは研究 (Komives, Lucas & McMahon, 2007) はあったが、教員の草の根リーダーシップについては研究が少なかった。草の根リーダーシップという用語は、Selznick (1949) においてダム開発をめぐる不特定多数の関係者が参画した事例において使用されている。分散型リーダーシップや実践コミュニティの概念とも共通点があると言えよう。また、議論の中では、キャンパスにおいて草の根リーダーシップは根本的に教育的であると指摘された。

Kezar&Lester (2011) Enhancing Campus Capacity for Leadership: An Examination of Grassroots Leaders in Higher Education

Kezar (2009) Rethinking Leadership Practices in a Complex, Multicultural, and Global Environment: New Concepts and Models for Higher Education Adrianna.

Selznick, P. (1949) TVA and the grass roots: A study of politics and organization, Los Angeles, CA: University of California.

Kouzes, J. M., & Posner, B. Z. (2003). Academic Administrator's Guide to Exemplary Leadership. San Francisco: Jossey-Bass

Komives, S. R., Lucas, N., McMahon, T. R. (2007). Exploring leadership for college students who want to make a difference, (2nd Ed.). San Francisco, CA: Jossey-Bass.

### 全米教育協会のリーダーシップ研修

全米教育協会 (NEA) は、1857年に公立学校関係者によって設立された教員組合の組織である。そのビジョンは“a great public school for every student”である。現在の会員数は320万人に達する。

全米教育協会の中に高等教育リーダーアカデミーがあり、リーダーシップ開発のプログラムを提供している。詳しくは下記のウェブに記されているが、9か月にわたって4分野



のコースワークと3回のセッションからなる研修プログラムを提供している。役職関係なく参加することができ、費用も全米教育協会が負担する。使用される教材の一部（John Bryson, Daniel Goleman, Kouzes and Posner）をみる限り、一般的なリーダーシップスキルの習得に重点が置かれているようである。事例分析やコーチングやメンタリングも重視されている。内容において教員組合のリーダー育成という側面が見られる。

National Education Association Higher Education Emerging Leaders Academy

<http://www.nea.org/home/37067.htm>

ELA Brochure

<http://www.nea.org/assets/docs/HE/ELABrochure.pdf>

### リーダーシップのワークショップの例

ワークショップでは、「すぐれたリーダーはどのような特性をもっているのか」、「すぐれたリーダーシッププログラムはどのような特徴があるか」、「高等教育におけるリーダーシップの特徴は」などを議論させながら、進行する方法がとられていた。また、リーダーシップをイメージすることができるような写真を使って、リーダーシップのさまざまな側面を議論する方法があった。

ワークショップの参加者については、役職では分けず、しかし、ある程度の学問分野別に分けて実施する大学（バージニア大学）があった。また、ワークショップで扱うテーマとしては、以下のものがあげられている。

self-awareness, managing organizational change, financial and strategic decision-making, assessing the dynamics of successful leaders, conflict resolution and negotiation, teamwork, media relations, and establishing life balance in a dynamic and growing career

バージニア大学

<http://www.medicine.virginia.edu/administration/faculty/faculty-dev/lam>

### 高等教育におけるリーダーシップの特徴

議論の中で、下記の点が高等教育におけるリーダーシップの特徴としてあげられた。

- ・多くの構成員に共有されている
- ・教員は多様な役割を果たしている。
- ・トレーニングの機会がほとんどない。
- ・教員の自立性が高い。
- ・教員のロイヤリティは学問分野にある。

### リーダーシップのフレームワーク

コルブの経験学習のモデルを用いて、リーダーシップを考える手法が使われていた。

## リーダーシップに関するリサーチクエスチョンの例

Donna Ziegenfuss (University of Utah) and Patricia Lawler (Widener University) のリーダーシップに関するリサーチクエスチョンは、リーダーの定義、リーダーの特徴、リーダーになった理由、リーダーの課題、リーダーに対するサポートのあり方である。

- (1) How do faculty define or describe a faculty leader?
- (2) What do faculty see as the most important characteristics and skill sets of a successful leader?
- (3) How did faculty get interested in leadership activities and how did they learn to be a leader?
- (4) What are the challenges faculty face today if they want to take on an institutional leadership role?
- (5) In what ways do faculty suggest we help new faculty take on leadership roles?

## リーダーシップと世代

世代によってリーダーシップに対する考え方は異なるという議論があった。若い世代は、サービス志向があるので、それとリーダーシップを組み合わせるのが有効という意見があった。

## リーダーシップに関わる組織やサイト

Academic Leadership: The Online Journal  
Academic Leadership: Turning vision into Reality  
Academy for Academic Leadership (AAL)  
American Academic Leadership Institute  
Center for Creative Leadership  
CIC Leadership Development  
ACE Center for Effective Leadership  
HERS  
The National Academy for Academic Leadership

## 代表的なリーダーシッププログラム

Madison Area Technical College Leadership Academy  
Michigan State University F&OD Workshops for Faculty on Leadership & Worklife  
New Mexico State Advancing Leaders Program  
University of Massachusetts Amherst Career Advancement  
University of North Carolina Center for Teaching Excellence Leadership Program

## 学生の研究体験

近年、欧米の大学では学士課程教育における学生の研究体験を促進する方策がとられている。米国において学生の研究体験を促進しているCUR (Council On Undergraduate

Research、学生研究体験協議会)は、学生の研究体験を「学士課程学生によって実施され、専門分野に対して独自で知的もしくは創造的な貢献をする探究や調査」と定義している。

学生の研究体験の形態は多様である。研究体験を初年次から段階的にカリキュラムに配置している大学もあり、一部の優秀な学生を対象にカリキュラム外のサマープログラムとして提供している大学もある。また、学士課程の学生が研究発表する場を設けたり、学士課程の学生を対象にした論文誌を発行したりする学会や大学もある。

学生の研究体験は、1969年に開始されたマサチューセッツ工科大学のプログラムが起源だと言われている。同プログラムは、教員の支援のもとで学士課程学生を研究プロジェクトに参加させる活動であった。

1987年に設立されたNCUR (National Conferences on Undergraduate Research)は、学士課程の学生が研究発表する場を設けている。3000人の学生が集まる大きな大会である。

CUR

<http://www.cur.org/>

NCUR

<http://www.ncur.org/>

NCURの前年度のプログラム

<http://www.ithaca.edu/ncur2011/docs/program/>

## 研究体験留学

中国とアメリカの研究体験交流が報告された。これまで研究は男性、留学は女性の希望が多かったが、この2つを混在させるおもしろい取り組みである。留学プログラム、大学間交流などを生かした優れた実践と言える。

An Innovative and Reciprocal Undergraduate Summer Science Exchange Program Between the US and China, CUR Quarterly sep 2007.

## 探究と研究

探究 (Inquiry) は、本人にとって新しいこと、研究 (Research) は、社会にとって新しいことという議論があった。

## 多層化アプローチ

カリキュラムにどのように落とし込むのか、という議論で、layer approach という概念が指摘された。Layered Curriculum という用語もある。1年生から4年生までの段階別にきちんと配列するという考え方のようだ。

ただ、そもそも多層化アプローチは大学教員にとっては難しいという研究重点大学からの意見があった。

## Photovoice

授業の中で photovoice という手法を取り入れた事例があった。Photovoice とは Wang らによって提唱された参加型アクションリサーチアプローチである。一定のテーマで写真を撮影し、その写真にコメント（ボイス）をつけ、グループ討議することによって課題を共有化するものである。同様に、Picturevoice や Paintvoice もある。

授業の中では人種の問題を扱い、白人以外の学生に写真による調査を行った。有効な方法であることが指摘された。

Wang, C., & Burris, M. A. (1994). Empowerment through Photo Novella: Portraits of Participation. *Health Education & Behavior*, 21 (2), 171-186.

## 携帯電話を使った意見収集

大会中の夕食時において、各テーブルの議論を集約して携帯電話で指定されたサイトに投稿することが求められた。投稿した意見は即座に、スクリーンのスライドに反映された。最終的には、なんらかのソフトによって、全体の議論がキーワードによって、そしてその重要度によって図示された。多人数授業における活用を考えさせられる活動であった。

## 学習スペース

学習スペースが教員の教え方 (teaching behavior) にどのような影響をあたえるかという研究があった。講義型の教室とグループ作業に適した教室でどのように教員の教え方に違いがあるかである。グループ作業に適した教室では、教員の動きが増える、コントロールが増える、質問よりもディスカッションが増えるなどの結果が得られた。ただ調査の方法は授業の属性によるので、一般化は難しいと感じた。

## FDの再定義

これまでの多くのFDは教育の初期キャリアの教授スキルに特化していた。今後はその領域を拡大し、キャリア前期、中期、後期における教育、研究、キャリアマネジメント、リーダーシップに関わる必要がある。それぞれの資質向上の能力が、下記論文の表で示されている。

Shelda Debowski (2011) Emergent Shifts in Faculty Development: A Reflective Review, To Improve the Academy: Resources for Faculty, Instructional, and Organizational Development, Volume 30.

## 国際教育交流カウンシルのFDプログラム

国際教育交流カウンシル (Council on International Educational Exchange) は、1947年に設立されたアメリカの非政府組織である。国際教育交流カウンシルは、国際FDセミナー (International Faculty Development Seminars) を実施している。

目的は、教授スキルの習得というよりも国際性の習得に重点が注がれている。約 10 日間の現地での研修で約 4000 ドルの費用である。アフリカ、ラテンアメリカ、中東などにおける研修もある。

Council on International Educational Exchange,

<http://www.ciee.org/>

#### **教授学習センターの運営課題**

教授学習センターの運営原理が議論された。ミシガン大学のクック氏から、サービス主義、対応即時主義、質保証と説明責任、機関の課題解決、便宜主義、持続性が挙げられた。運営上の課題としては、バーンアウト、優秀なスタッフの雇用、学内での競争、スタッフの研修、パーソナルマネージメンが挙げられた。

Constance Cook (Editor), Matthew Kaplan (Editor), 2011, *Advancing the Culture of Teaching on Campus: How a Teaching Center Can Make a Difference.*

#### **教授学習センターの資金調達**

教授学習センターの資金不足は多くの大学において大きな問題になっている。いくつかの大学の教授学習センターでは資金調達 (fundraising) を行っている。ニューメキシコ州立大学では、資金調達の総合的なモデルを開発した。その手法は以下の論文にまとめられている。

Mark A. Hohnstreiter, Tara Gray (2011) *Go for the Gold: Fundraising for Teaching Centers, To Improve the Academy: Resources for Faculty, Instructional, and Organizational Development, Volume 30.*

## 2011 Annual POD Conference 参加報告書

名古屋大学学務部学務企画課  
船戸 祥史

平成 23 年 10 月 26 日～平成 23 年 10 月 30 日に、アメリカ合衆国ジョージア州アトランタにおいて開催された Professional and Organizational Development Network in Higher Education（高等教育専門組織開発ネットワーク；以下 POD と省略して表現する）年次大会に参加する機会を得た。

POD には、例年、多くの国々の大学から教職員が参加している。そのため、FD や SD に関する各大学の取り組みについて報告を受けたり、意見交換したりすることができる。また、取り上げられるトピックは、FD や SD に関することだけではなく、大学行政や大学を取り巻く社会状況や国際関係など、多岐にわたる。今年度の POD に参加した日本の大学教職員の所属機関としては、東北大学、大阪大学、広島大学、日本教育大学院大学、帝京大学、同志社大学などがあった。

大会のプログラムの構成は、主に講演とセッションである。講演は、大学の学長や名誉教授が担当し、時間は 90 分程度である。セッションは、全て 75 分間であり、参加者は約 20 名程度である。まず、セッションを担当する POD メンバーがプレゼンテーションを行い、その後、グループワークや討論、議論、報告などを行う形式である。

以降に、私が参加したセッション (75-minutes Interactive and Roundtable Sessions) のうち、特に印象に残ったものをいくつか紹介する。

### 非常勤教員への研修について

(原題：Creative Collaboration : Supporting a Growing Population of Adjuncts)

近年増加傾向にある非常勤教員に対する FD などの高等教育に関する知識や、教授法などの研修制度の在り方についてのセッションであった。

本セッションでは、現状において、アメリカで非常勤教員に対する研修の導入が進んでいない理由が指摘された。また、解決策についても議論された。下記に簡単に紹介する。

#### 時間的な理由／物理的な理由

多くの大学は、複数の大学の教員や大学院生を非常勤教員として雇用している。彼らは、各大学における教育・研究活動や大学行事、各種の委員会などを本務としている。そのため、研修を実施する日程を調整するのが大変困難である。

#### 人的な理由／組織的な理由

アメリカには、学生数が数千人の小規模大学がたくさんある。そのような小規模大学においては、本学の高等教育研究センターのような、高等教育に関する専門の部署があ

るわけではない。仮にそのような組織があったとしても、非常勤教員に対する研修を行うことができる教職員の人材が不足している。

### 経済的理由

多くの大学には、非常勤教員に対する研修にまで投資をする経済的余裕が無い。少なくとも短期的には、各大学にとっては非常勤教員に投資するよりも、講義のコマ数の多い常勤教員に対する投資によって授業評価や教育の質を向上させた方が、補助金や学生確保等について費用対効果の観点から有効である。

### 解決策

- ・非常勤教員に対する研修については、必ずしも同一の時間、同一の場所で受講するような、座学だけにこだわる必要はない。e ラーニング教材やDVD教材なども活用すべきである。
- ・各大学で独自に研修を実施するのではなく、周辺大学と協力して研修を行うことを検討すべきである。1大学だけで、研修を完結させることにすると、各大学の負担が大きくなる。複数大学で研修内容などの情報を共有して、負担を分散化すべきである。

日本の大学におけるFDなどの教員への研修制度は、主な対象者を常勤教員と想定して、ようやく浸透してきたところである。本学を含む多くの日本の大学では、非常勤教員に対する全学的な研修は導入されていない。また、アメリカにおいても、全ての大学で導入されているわけではない。

常勤の大学教員になるまでに、非常勤教員を経験する人も多い。では、そのような非常勤教員はいつどこでスキルや知識を得るべきなのか。所属する大学なのか、それとも勤務する大学なのか。現状としては、常勤に採用された大学で、始めて受講する場合も多い。

以下に、現状の問題点を指摘する。

- ①研修を何も受けていない非常勤教員は、「何を」「何のために」「どのように」教えるべきなのかについて、必ずしもスキルが十分ではない。
- ②非常勤教員を雇用している大学は、常勤教員の授業と同水準の教育の質を保証することが難しい。
- ③常勤教員になって初めて研修を受けるのは非効率である。初めて非常勤教員になったとき、または、なる前に研修を受けたほうが、当該教員にとっても学生にとっても有意義である。
- ④そもそも研修を実施しても、非常勤教員の実際の参加率は決して高くはない。理由は、非常勤教員に参加するメリット（インセンティブ）が無いからである。DVD教材などで代替しようとする大学もあるが、非常勤教員が消極的な態度をみせることも少なくない。特にアメリカでは、研修への参加が、学位取得やテニユアなどのポスト、給与などと直接結びつかないと参加しない。

なお、事務職員の立場からすると、シラバスの書き方や履修登録、成績処理の方法について、全教員に、一斉に周知できる場があるとよいと思っている。現状は、教員に冊子を郵送して通読を要請する方法であるが、不十分である。事務的な制度を、FDなどの研修とあわせて行えるとよいかもしれない。

## シラバスについて

(原題：Are you kidding me? It's just a syllabus.)

このセッションでは、シラバスの目的や内容など、シラバスマネジメントについて議論された。プレゼンターは、「intellidemia」というシラバス関連企業の最高経営責任者 Judd Rattner 氏であった。具体的には、下記のような議論があった。

### シラバスの構成

シラバスには、担当教員名、授業目的、注意事項、授業内容、成績評価方法、教科書・参考書などを記述するのが一般的である。

シラバスにどのような項目を含めるかについては、画一的ではない。

各回の授業内容や成績評価については、どの程度具体的に書かれるべきか検討を要する。しかし、少なくとも授業内容や成績評価方法については、学生からのクレーム対応などのリスク管理の観点などからも、厳密に記述すべきであるとの意見が多かった。

### シラバスの公開

シラバスのどの項目をどの範囲まで公開するのかという議論であった。シラバスは外部に公開することもあるし、内部の学生や教職員にしか公開しない場合もある。

外部に公開する場合は、成績評価の具体的な方法や、毎回の授業で使用するわけではない参考書については、公開する必要がないのではないかとの意見が出た。また、外部への公開は、意図しない政治利用を招くリスクがあるという指摘もあった。

### シラバスの承認

アメリカではチェアと呼ばれる、各学科の代表者が承認手続きを行っている。日本では、ある教員が他の教員が作成したシラバスの承認作業を行っていることはあまり無い。承認作業は煩雑で手間と時間がかかるからやめた方がいいという意見もあった。

また、特定の1人の人物だけで承認手続きを行うのは望ましくないという意見もあった。その場合には、次のようにしたらよいのではないかという提案があった。

- ・学内や学科の委員会で承認手続きを行う。
- ・複数大学から代表者を出し合った委員会を設置し、複数の大学で対応して、相互にシラバスを点検し、承認手続きを行う。

### シラバスは誰のものか？

シラバスは、教員のものか、学部のものか、大学のものかという著作権の議論であっ



た。教員個人に帰属すると考えると、教員が辞めたり逝去したりした後に、大学や学部  
に不都合があるかもしれないとの指摘がされた。大学は教員個人が異動してもシラバス  
を公開し続ける場合がある。教員が異動するたびに、大学がシラバスを削除する義務を  
負うことになると、大学の負担が大きいので、学部や大学などの組織レベルで保有し続  
けるのがいいのではないかという提案があった。

シラバスの概念については、日本とアメリカでは違いがある。日米の違いを十分頭に入  
れて、本セッションに参加する必要があったが、必ずしも十分ではなかったため、日本代  
表の私は狼狽してしまった。

日本のシラバスは、アメリカでは、カリキュラムガイドなどと呼ばれているものである。  
日本では、1科目あたり、A4サイズで2分の1ページ程度が割り当てられ、それらを冊  
子にまとめている。これは、アメリカでいうところのシラバスではない。アメリカのシラ  
バスは、数十ページあり、初回のイントロダクションの授業で学生に配布されるものであ  
る。毎回の講義の内容や参考文献が詳細に記述され、成績評価の方法も具体的に書かれて  
いる。

また、本セッションでは、TA制度についても言及された。アメリカにおけるTA制度  
は、大人数講義に用いられるための制度であり、少人数教育のセミナーなどに利用される  
ものではない。セッション終了後に、セッション参加者と個人的に話をした。私が、名古  
屋大学では、定員12名の基礎セミナーにTAをつけていると紹介したところ、「アメリカ  
では考えられない。馬鹿げていて、無駄である。」と言われた。

TA制度やシラバスについては、カルチャーショックを受けた。今後も勉強したいと思う。

## LGBTQの構成員のためのキャンパス創りについて

(原題：Creating Inclusive Campus for LGBTQ Students, Faculty, and Staff)

LGBTQに関するセッションであった。LGBTQとは、「Lesbian」、「Gay」、  
「Bisexual」、「Transgender」、「Queer」の頭文字をとった略語である。セッションは、  
キャンパス内で起こりうる様々な場面を想定したケーススタディの形式で行われた。具体  
的には、授業における専門用語の解説や学生の氏名の発音、教員が自分の家族の話をする  
ときなどである。

具体例を1つ挙げる。「異性愛者の教員が自分の配偶者の話をするときに、異性愛者で  
あることが一般的であるかのような話し方をしたとして、LGBTQの学生から批判を受  
けた。当該教員は、学生からの授業評価が下がり、困っている。」

大学の教職員は、常にLGBTQの学生の存在を念頭に入れて注意深い言動が求められ  
るとする意見がある一方で、具体的な夫婦間の性生活の話をしたわけではないので問題は  
無いという意見もあった。

日本では、取り上げられる機会が少ないトピックであるが、日本の大学にもLGBTQ

の学生や教職員は潜在的に存在しているはずである。大学においては、人種や性別といった、特定の属性についての差別だけを取り上げる組織ではなく、包括的に差別問題を取り上げて、平等実現を図る組織が必要なかもしれない。

誰がLGBTQなのかはあまり表には出てこないもので、実際には彼らが、どのような悩みや苦痛を持っているのか不明瞭であるが、出来る限り知ろうとする努力も必要である。そのためには、教職員がLGBTQについて、もっと勉強する必要がある。

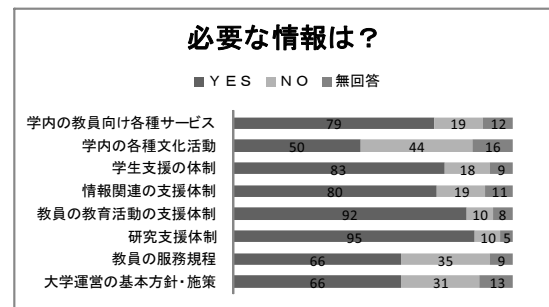
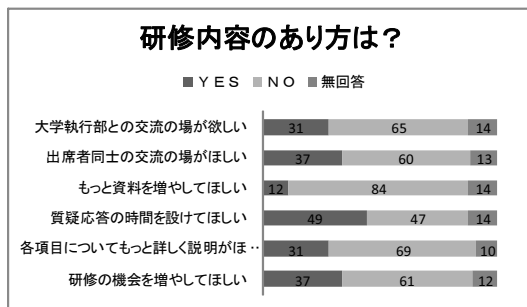
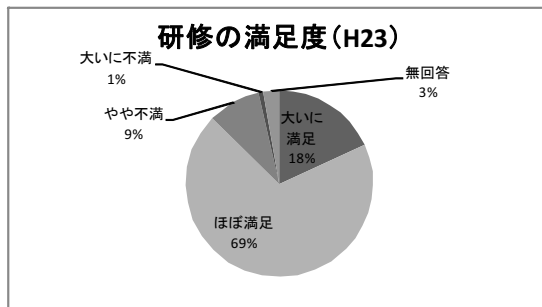
私は現在、学務企画課課外活動掛に所属している。学生の部活動・サークル活動に関する業務に従事しており、FDやSDに直接関係のある業務に携わっているわけではない。しかし、今回の研修で得た経験は、今後の大学職員としての業務にも活かすことが多いのではないかと考えている。

5日間という短い研修ではあったが、様々な国の方々とコミュニケーションをとり、多くの知見を得ることができたのは、私にとっての大きな財産となった。現地では、英語のコミュニケーションを余儀なくされ、聞いたことがない高等教育や大学行政に関する専門用語に囲まれた。使用頻度の高い単語でも、通常とは違う意味で用いられている場合も散見され、当惑した。また、日常会話ではなく、学会や研修において、英語で討論したり講演を聴いたりするのは、大変な疲労感がある。自分の無力を再認識したので、今後の課題としたい。

# ◎名古屋大学における研修

## 1. 教員のための全学的研修

○2011年4月5日 「平成23年度名古屋大学新任教員研修プログラム」



### 自由記述

- ・特に国際化についての研修の機会を増やして欲しい。
- ・具体的な事務、教務等の研修も別途あるとよい。
- ・短時間の詰め込みであるにもかかわらず、資料が整理されておらず必要な時の見直しがしにくい。
- ・内容と時間のバランスが悪い。質問とかできるとよい。研修外でもよいので。
- ・長い。
- ・少し長いと思います。年2回に分けてはどうでしょう。
- ・会場が狭く、交流の場とならず残念でした。
- ・大変参考になりました。交流の時間は少なかったですが、名札等があればより話しやすかったのではないかと感じました。
- ・研修の内容を録画し、ウェブで見られるようにする予定はありますか？海外長期出張のため、せっかくの研修ですが、参加することができません…。
- ・ありがとうございました。
- ・知財のサービスについての説明を加えていただければよいと思います。
- ・初めの挨拶は1人で十分。地図、スペルにまちがいあり。名大のHPのトップページは要改善。

- ・ G30 と FD についての話が聞けてわかり易かった。
- ・ 机の配置が、スクリーンを見るのに不向き。
- ・ 机の配置を講義形式にされた方がよいと思います。半数の参加者が正面を向いていなかったのも少し聞きづらかったです。しかし、様々な説明をして頂き、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 4月1日以前に開催案内をいただけると助かります。紙資料はあまり必要がないと思いました。（pptのスライドのハンドアウト）
- ・ 各研究科ごとの実施にして欲しい。
- ・ 参加人数分の座席と資料は準備すべきかと。
- ・ 遅く到着したこともあり、資料が手元に無かった。マイクがひびいており、聞き取りづらかった。
- ・ 十分な数が用意されていない。マイクの使い方が悪い。
- ・ 資料が不足していて、回って来なかった。人によっては声が小さい。
- ・ 部屋が手狭？
- ・ キャパシティー。時間のルーズさ。研修前に種々の事務手続きが終了していなかったため（パスがないなど）研修後も実施（？）できると予想される事項が多かった。
- ・ 机の並べ方、スライドが見えない席が多い。
- ・ 書類を読めば済む内容が多かったように思います。最後のワークショップは出席しなければ得られない内容でためになりました。
- ・ 内容は良いと思うが、web で统一的にアクセスできるようにして欲しい。情報が様々な所に散らばっていて不便。授業改善ワークショップは面白かった。
- ・ 中井先生の話はためになった。
- ・ 教育研修の最後のセッションが長すぎると思います。もっと具体的な案を説明して、時間を短くし、エッセンスのみ話してほしいです。
- ・ e-learning でできる科目もあるのではと思う。
- ・ 時間が不十分だった。
- ・ 最初のあいさつを短くし、説明時間にあてて下さい。
- ・ もう少し要点をまとめて話して欲しい方がいたこと。
- ・ 前任校での経験から思うことですが、大学の研究室に各種のセールスの電話がかかってくるしそれらの勧誘に対して若い人たち（ときにはポスドクまで勧誘されている）が無防備なので、電話番号の公開のあり方や、新任教員に対する注意喚起をした方がよいと思います。
- ・ 「安全保障貿易管理等」以降は、きわめて参考になりました。

○2011年4月11日「平成23年度 第1回全学教育科目担当教員 FD」

対象：平成23年度全学教育科目の担当教員

## 2. 部局等における研修（センター主催・共催）

○2011年4月8日 研究マネジメントセミナー2011「研究グループを率いるために」

講師：財満 鎮明（工学研究科）

主催：高等教育研究センター、研究推進室

○2011年4月27日 特別セミナー「TAのためのライティング支援セミナー」

講師：近田 政博

主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館

○2011年5月18日 特別セミナー「大学生のためのレポート書き方講座」

講師：近田 政博

主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館

○2011年5月20日 教員のためのセミナー「英語で教える」

講師：岩城 奈巳（留学生センター）、中井 俊樹

主催：高等教育研究センター、留学生センター

○2011年6月14日 教育研修プログラム「留学生との信頼関係をどう築くか」

講師：松浦 まち子（留学生センター）、近田 政博

主催：高等教育研究センター、留学生センター

○2011年7月15日 教員のためのセミナー「多人数授業の教え方」

講師：中井 俊樹、東 望歩

主催：高等教育研究センター

○2011年8月24日 あいちサイエンスコミュニケーションサマースクール2011「サイエンスイラストレーション入門—オブザベーションドローイング—」

講師：David Rini（ジョンズ・ホプキンス大学）

主催：サイエンスコミュニケーション推進室、高等教育研究センター、博物館、ジョンズ・ホプキンス大学 Art as Applied to Medicine 専攻

○2011年9月8日 院生・教職員のためのスキルアップセミナー「研究発表資料をつくる—ポスター・スライドづくりの理論と実践—」

講師：遠藤 潤一（広島国際学院大学 情報デザイン学部講師）

主催：情報科学研究科、高等教育研究センター

- 2011年9月28日 特別セミナー「大学生のためのレポート書き方講座 第2回」  
講師：近田 政博  
主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館
- 2011年9月12日 大学院生のためのスキルアップセミナー「学術広報の世界へようこそー広報誌制作教室ー」  
講師：福井 康雄（理学研究科）、戸田山和久（情報科学研究科）、久野高義（株式会社 コミュニケ エディター）、小川明生（tmc ic. アートディレクター）、齋藤芳子  
主催：「科学研究を伝える広報誌制作手法の追求」（科研 23650506、代表 福井康雄）  
共催：高等教育研究センター  
協力：理学研究科広報委員会
- 2011年10月11日 大学院生のためのスキルアップセミナー「クリティカルシンキングの技法ー科学技術論の事例を通して学ぶ」  
講師：伊勢田 哲治（京都大学）  
主催：高等教育研究センター、GCOE「宇宙基礎原理の探求」
- 2011年10月26日 特別セミナー「プレゼンテーション入門：人に伝わる話し方」  
講師：東 望歩  
主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館
- 2011年11月14日 大学院生のためのスキルアップセミナー「研究評価の現状ー研究者として知っておくべきこと、研究者コミュニティとして考えていくべきことー」  
講師：林 隆之 氏（大学評価・学位授与機構）  
主催：高等教育研究センター、GCOE「宇宙基礎原理の探求」
- 2011年11月16日 特別セミナー「大学生のためのレポート書き方講座 第3回」  
講師：近田 政博  
主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館
- 2011年11月25日 大学院生のためのスキルアップセミナー「研究公正入門ー研究不正に巻き込まれないためにー」  
講師：大須賀 荘（理化学研究所）  
主催：高等教育研究センター、GCOE「宇宙基礎原理の探求」
- 2011年12月6日 大学院生のためのスキルアップセミナー「人の力を引き出す技法ー研究者のためのコーチング入門」

講師：中井 俊樹

主催：高等教育研究センター、GCOE「宇宙基礎原理の探求」

○2011年12月27日 特別セミナー「研究計画書の書き方」

講師：近田 政博

主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館

○2012年2月6日 特別セミナー「大学生のためのレポート書き方講座 第4回」

講師：近田 政博

主催：高等教育研究センター、教養教育院、中央図書館

### 3. 部局等における研修（センター・スタッフ協力）

○2011年5月24日 職員課主催 平成23年度新規採用職員研修「異文化対応について—留学生の学習・研究活動を中心に—」

講師：近田 政博

○2011年6月24日 平成23年度名古屋大学附属病院臨床実習指導者研修・卒後臨床教育研修・人材育成担当者研修「コーチング」

講師：中井 俊樹

○2011年9月6日“Academic Information: Academic Calendar, Timetable, Grading System”, G30 New Faculty Orientation, hosted by vice president for international affairs

講師：近田 政博

○2011年10月7日 平成23年度名古屋大学附属病院臨床実習指導者研修・卒後臨床教育研修・人材育成担当者研修「教えるということ」

講師：中井 俊樹

○2011年11月21日 国際部主催 平成23年度国際業務トレーニング研修：大学職員のための異文化コミュニケーションセミナー「大学教員という異文化へのアプローチ—事例から学ぶもう一つのコミュニケーションスキル」

講師：近田 政博

○2012年2月22日 平成23年度名古屋大学附属病院看護部認定看護管理研修「プレゼンテーションスキル」

講師：近田 政博

○2012年3月31日 名古屋大学消費生活協同組合新入生歓迎行事：研究者になりたい人、集合2012「大学での学び」

講師：近田政博



## ◎名古屋大学外における研修等

○2011年5月26日 東海・北陸・近畿地区学生指導研究会「大学教育改善に向けたFD・SDの現状と課題」

講師：夏目 達也

○2011年6月1日 科学技術広報研究会「研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit」

講演者：齋藤 芳子

○2011年6月4日 “Social Responsibilities for University Administrators: from bureaucrats to academics” in 2nd Asia-Europe Education Workshop, hosted by Asia-Europe Foundation

講師：近田 政博

○2011年7月8日・9日 大学セミナーハウス：第24回大学職員セミナー

企画委員：夏目 達也（企画・運営に参加）

○2011年8月7日 電通育英会大学院奨学生夏期セミナー2011「大学院生活を充実させるための方法論」

講演者：近田 政博

○2011年8月29日 第1回高等教育開発フォーラム「大学は新任教員にどのような情報・知識を提供すべきか—名古屋大学の事例をもとに—」

講師：近田 政博

○2011年8月31日 「大学生の教え方」（専門学校トライデント）

講師：中井 俊樹

○2011年9月2日・8日 「事例で学ぶコーチング」（愛知県看護協会）

講師：中井 俊樹

○2011年9月14日 「授業の設計と評価」（長野県看護大学）

講師：中井 俊樹

○2011年9月15日 「大学教授法の基礎」（長野県看護大学）

講師：中井 俊樹

- 2011年9月28日 大阪市立大学工学部 FD 集会「授業の方法の基本について」  
講師：中井 俊樹
- 2011年10月25日 立教大学大学教育開発・支援センター公開シンポジウム「研究指導はなぜ難しいのか—名古屋大学の教員調査から得られた知見—」  
講演者：近田 政博
- 2011年10月26日 愛知教育大学シンポジウム「初年次教育にいかに関与するか—全国主要大学と名古屋大学の取組—」  
講演者：夏目 達也
- 2011年11月2日 名城大学第13回 FD フォーラム「FDの義務化から3年—原点に立ち返って考える」  
講師：中井 俊樹
- 2011年11月22日 札幌医科大学 FD 教育セミナー「シラバスの意義およびその作成法」  
講師：近田 政博
- 2011年12月1日 平成22年度学術情報リテラシー教育担当者研修「大学生を教えるノウハウ」（国立情報学研究所）  
講師：中井 俊樹
- 2011年12月15日 東海地区大学図書館協議会 図書館職員基礎研修第3回「プレゼンテーション入門」  
講師：近田 政博
- 2011年12月16日 「FDとしてのメンタープログラムの試み」（岡山大学）  
講師：中井 俊樹
- 2011年12月22日 筑波大学 大学研究センター第53回公開研究会 シンポジウム：大学院における共通的教育—これまでとこれから「大学院における共通的教育の国際動向」  
講演者：齋藤 芳子
- 2011年12月26日 「授業の設計の方法」（専門学校トライデント）  
講師：中井 俊樹

- 2011年1月6日 立命館大学大学行政研究・研修センター 大学行政論Ⅱ：大学アドミ  
ニストレーター育成プログラム「ベトナムの高等教育政策」  
講師：近田 政博
- 2012年1月20日 「大学教育の行方」（日本福祉大学）  
講師：中井 俊樹
- 2012年2月1日 修文大学FD講演会「大学生が自ら学ぶ習慣を身につけるための支援  
方法」  
講演者：近田 政博
- 2012年2月15日 「授業の組み立て方の工夫」（岐阜大学）  
講師：中井 俊樹
- 2012年2月20日 第4回大分県高大連携シンポジウム「高大接続と初年次教育」  
講演者：夏目 達也
- 2012年3月22日 博士の能力育成やポストドクターのキャリア開発支援に関する勉強  
会「名古屋大学における院生、ポストクのためのスキルトレーニング/Skills training for  
postgraduates in Ngoya University」（文部科学省 科学技術政策研究所）  
講演者：齋藤 芳子

## ◎教員メンタープログラム

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものである。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムである。

### 担当者

中井 俊樹（名古屋大学高等教育研究センター）

### 本年度の活動内容と活動成果

- (1) 新任教員研修において、プログラムの広報活動を行い、希望者にメンター教員を紹介した。
- (2) パンフレットおよびホームページを通して、希望者にメンター教員を紹介した。
- (3) メンター教員のためのガイド、メンティ教員のためのガイドを通して、メンター教員およびメンティ教員の支援を行った。
- (4) 男女共同参画室と共同で、「女性教員のためのメンタープログラム」を実施した。
- (5) 23組のメンター教員とメンティ教員のマッチングを行った。
- (6) 2011年12月15日に岡山大学において「FDとしてのメンタープログラムの試み」の公開セミナーを行った。

### 「メンター・アワード2012」優秀賞受賞

ワーキングウーマン・パワーアップ会議 (<http://www.powerup-w.jp/>) は、「メンター・アワード2012」の制度表彰として、教員メンタープログラムを運営する名古屋大学を優秀賞に選びました。

受賞理由は、「メンター・メンティのためのガイドを作成し、メンターとメンティによる主体的な取組みを効果的に支援。プログラムの意義が着実に浸透し、プログラム利用者は年々増加。」などです。表彰式は2012年2月24日に女性就業支援センター（東京都港区）において開催されました。



## 【資料1】 紹介パンフレット

### Q & A

#### どんな人がメンター教員になるのでしょうか？

本プログラムでは、次世代の育成に意欲のあるメンター教員が紹介されます。メンター教員は、ガイドラインにそって活動を行うので、個人の価値観を押し付けたり、活動で知りえた個人情報や口外するなどの心配はありません。万一、相性が合わない場合は、理由を告げずいつでも終了することができ、望めば別のメンター教員が紹介されます。

#### どのようなことを相談できますか？

どのように授業するのか、どのように研究資金を獲得するのか、どのように大学教員としてキャリアを築いていくのか、どのように仕事と生活のバランスをとるのかなどが話されます。メンター教員は、遠慮せずにメンター教員に悩みや質問を投げかけてみましょう。

#### 活動の頻度はどの程度でしょうか？

初回のミーティングの相談により決定しますが、月に1回程度行われる場合が多いです。

#### 相談相手は本プログラムのメンター教員のみでしょうか？

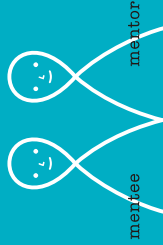
所属先の先輩教員は、メンティ教員の専門分野の内容やキャリア形成について詳しい貴重な同僚です。また個人的に学内に相談できる教員を増やしていくことは、新任教員にとって重要です。本プログラムは、そのような自然にできるつながりを代替するものではなく、補完するものです。

#### 異性が少し苦手なので配慮してもらえますか？

申し込み時に、希望すれば同性のメンター教員が紹介されます。結婚、子育て、介護などと仕事の両立について相談するため、同性のメンター教員を希望する教員もいます。

## 名古屋大学教員メンタープログラム

あなたのメンターを紹介します



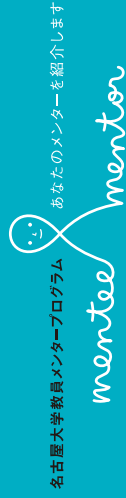
名古屋大学 高等教育研究センター

名古屋大学 高等教育研究センター  
Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University  
〒464-8601 名古屋市中種区不老町  
電話: 052-789-5696 ファックス: 052-789-5695  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>  
[info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

## 教員メンタープログラムとは

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムです。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼びます。

メンタープログラムは大学以外の組織でも広く導入されており、その効果は確認されています。現在、大学に求められているファカルティ・ディベロップメントの1つの方法としても位置づけられます。



## 教員メンタープログラムのねらい

教員メンタープログラムは、メンティ教員にとって以下のような効果が期待されます。

- ◎ 職務や生活に関して気軽に相談できる相手を得る
- ◎ 大学について理解を深める
- ◎ 教育研究など職務上必要な知識やスキルを獲得する
- ◎ キャリアの展望を考えるきっかけになる
- ◎ メンター教員を介してさまざまなネットワークをつくる

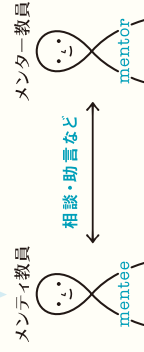
教員メンタープログラムは、メンター教員にとっても意義があります。新任教員との交流によって新しいアイデアや活力が得られたり、自らの教育研究を振り返り今後のキャリアを考えるきっかけになります。

## メンター活動の流れ

- 1 申し込み**  
名古屋大学に着任して3年未満の教員であれば、申し込みは随時可能です。申し込みの際に、日程上の都合、メンター活動への期待や希望などを記します。
- 2 マッチング**  
メンティ教員の希望やプロフィールをもとに適切なメンター教員を決定します。メンター教員より初回のミーティングに関する連絡が届きます。
- 3 初回のミーティング**  
メンター活動の目的、ミーティングの場所と頻度などの活動の計画を相互で確認します。
- 4 定期的な活動**  
ミーティングのみでなく、キャンパスツアー、授業見学などの活動も相互の合意の上で進められます。またプログラム事務局にはいつでも相談することができます。
- 5 フィードバック**  
メンター活動の成果をプログラム事務局に報告します。内容はプログラムの改善に利用されます。

### 名古屋大学に着任して3年未満の教員

メンター教員との交流を通して、大学教員として成長することが期待されます。



### 名古屋大学に5年以上勤務している教員

メンター活動をリードし、メンティ教員に対して理解者や支援者としての役割を担うことが期待されます。

## メンティ教員の声

本プログラムを活用したメンティ教員から以下のような感想をいただいています。

在期待きという身分で、今後のキャリア形成に迷い悩んでいるとき、メンター教員の助言は大きな支えとなりました。信頼できるメンター教員との出会いによって、自分の可能性を心置きなく追求することができました。

大学院生と大学教員との違いを学ぶことができました。先輩という立場で学生に接するのは全く違う、教員としての振る舞い方について助言をもらいました。

それまで授業を担当した経験がなかったため、メンター教員の授業を見学させてもらいました。資料の作り方や映像の採み方など、いろいろな刺激をうけました。

名大サロンの異分野の教員が集まる研究会などに連れて行ってもらい、メンター教員が5倍10倍に増えたような感じでした。知り合ったベテラン教員が同年代の教員を紹介してくださるので、あっという間に学内に知り合いが増えました。

## 申込方法

本プログラムを活用したいと考えている方は、電子メールの本文に下記の5項目を記して、申込先までお送りください。また、同姓のメンター教員をご希望の場合は、その旨もお書きください。

1. 氏名
2. 所属
3. メールアドレス
4. メンター活動への期待や希望
5. 時間の取りやすい曜日や時間帯

申込先 ▶ 教員メンタープログラム事務局 (高等教育研究センター)  
info@eshe.nagoya-u.ac.jp

## 【資料2】メンター教員のためのガイド

<p>名古屋大学高等教育研究センター Faculty Guide</p>	<p>メンター教員のためのガイド The Mentor's Guide</p>
<p>背景と論点</p>	<p>教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するものです。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼びます。メンタープログラムは大学以外の組織でも広く導入されており、その効果は確認されています。現在、ファカルティ・ディベロップメントが大学に求められています。教員メンタープログラムはその一つの形態と考えることもできます。</p> <p>教員メンタープログラムは、メンティ教員だけでなくメンター教員にとっても意義があります。新任教員との交流によって新しいアイデアや活力が得られ、自らの教育研究を振り返り今後のキャリアを考えるきっかけになるでしょう。</p>
<p>実践の手法</p>	<p><b>1. 教員メンタープログラムを理解する</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・メンティ教員と信頼できる関係性を築くことが第一に重要である</li><li>・自身の経験、知恵、ネットワークをもとに、メンティ教員を支援する</li><li>・メンティ教員が抱える課題のすべてをメンター教員が解決できるものではない</li><li>・活動の進め方について困ったときには、プログラム事務局に相談することができる</li><li>・メンティ教員とメンター教員の双方とも、理由を告げずいつでもプログラムを終了することができる</li><li>・メンター活動のノウハウやプログラムの改善点をプログラム事務局に報告する</li></ul> <p><b>2. メンター教員の多様な役割を理解する</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・メンティ教員にとって気軽に相談できる相手になる</li><li>・大学教員という職業の意義と役割を考えるきっかけを与える</li><li>・職務を進めるにあたって必要な知識やスキルを紹介する</li><li>・結婚・出産・育児・介護などのライフイベントと仕事の両立についてアドバイスする</li><li>・メンティ教員のキャリア形成を考えるきっかけになる</li><li>・メンティ教員のロールモデルになる</li><li>・自分のネットワークを利用して、メンティ教員のネットワークを広げる</li></ul> <p><b>3. 初回のミーティングをつくる</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・メンター教員がメンティ教員に初回のミーティングについて連絡する</li><li>・学内のカフェなど緊張せずに話せる場所を選ぶ</li><li>・自己紹介をし、どのような支援ができるかを伝える</li><li>・メンター活動の目的と進め方について、メンティ教員の要望を聞きながら相互で確認して決める<ul style="list-style-type: none"><li>➢ 活動の目的、期間（例：一年）、ミーティングの場所と頻度（例：2ヶ月に1回1時間程度）、活動の過程で得られた個人情報の取り扱い、活動の報告の方法</li></ul></li><li>・次回のミーティングの日程を決め、1時間程度で終了する</li></ul>



#### 4. 面談のスキルを高める

- ・ まずはメンティ教員の話をしっかり聞くことを重視する
- ・ 現在のメンティ教員の置かれた立場を理解する
- ・ 「メンティ教員の課題は何か」、「現在の状況はどうか」、「今後どのようなステップが必要か」、「そのために活用できる資源は何か」という一連の流れを意識する
- ・ メンティ教員の弱い部分に着目するのではなく、強い部分に着目する
- ・ メンティ教員が答えに困っているときには、無理して答えさせない
- ・ 「自分が解決してあげなければ」や「教えてあげなければ」といった気負いを持ちすぎない
- ・ 自分がわからない質問に対しては正直にわからないことを伝える
- ・ 自分に手に負えない深刻な内容を相談されたら、事務局と相談するなどして慎重に取り扱う
- ・ メンターとしてのスキルを高める研修機会に参加する
- ・ 若手教員に参考になりそうな書籍に目を通しておく
  - 『大学教員準備講座』、『大学教授という仕事』、『科学者という仕事』、『成長するティップス先生』、『アット・ザ・ヘルム』、『理系の女の生き方ガイド』など

#### 5. 学内の情報を把握しておく

- ・ 学生の特徴、大学の教育システム、研究支援、福利厚生など大学についての質問に答えられるようにしておく
- ・ 教員の活動を支援する学内のさまざまな組織や人を把握しておく
- ・ さまざまなキャリアの教員、さまざまなライフイベントを経験した教員を把握しておく
- ・ 参加できる大学教員用の研修機会について把握しておく

#### 6. さまざまな活動を試みる

- ・ キャンパスツアーを実施する
- ・ 一緒にFD活動に参加する
- ・ 自分の授業を見学する機会を与える
- ・ メンティ教員の授業を見学する
- ・ メンティ教員のシラバスにアドバイスする
- ・ メンティ教員の研究計画書にアドバイスする
- ・ 書籍の出版、学会誌の査読、研究費助成の審査などの経験を伝える
- ・ メンティ教員が他の教職員と会う機会をつくる

#### 7. メンティ教員を一人の大学教員として尊重する

- ・ 多様な考え方や生き方を理解し尊重する
- ・ 自分の考えや経験を押しつけない
- ・ 最初に決めた目標に固執せず柔軟に対応する
- ・ 活動で知りえた個人情報をお外しない
- ・ 守れない約束をしない
- ・ メンティ教員から学ぶ態度を持つ

参考文献：渡辺かよ子（2009）『メンタリング・プログラム－地域・企業・学校の連携による次世代育成』川島書店

作成者：中井俊樹（名古屋大学高等教育研究センター）  
作成日：2010年10月1日

## 【資料3】メンティ教員のためのガイド

<p>名古屋大学高等教育研究センター</p> <p>Faculty Guide</p>	<p>メンティ教員のためのガイド</p> <p>The Mentee's Guide</p>
<p>背景と論点</p>	<p>教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するものです。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼びます。メンター教員による支援の内容や方法は、メンティ教員との工夫次第で決まっていきます。メンティ教員の積極的な姿勢がメンター活動を有意義なものにします。新任教員には、職務の内容だけでなく、今後のキャリア形成や仕事と結婚・出産・育児・介護といったライフイベントとの両立など、不安なことがたくさんあるものです。プログラムの活用を機会として、自分の教育研究を振り返りつつ、将来像を描いていきましょう。</p> <p>また、教員メンタープログラムは、学内でのネットワークづくりの第一歩となります。これを手がかりにして様々な教職員と交流を深めていくことができれば、今後の教員生活はより有意義なものとなるでしょう。</p>
<p>実践の手法</p>	<p><b>1. 教員メンタープログラムを理解する</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ このプログラムは、メンティ教員が大学教員として発達することを支援するものである</li><li>・ 活動の内容・方法はメンター教員とのミーティングを通じて決定される</li><li>・ メンター教員は指導する立場ではなく、対話や助言を通してメンティ教員をキャリア的、心理・社会的に支援するものである</li><li>・ 話しにくいことは無理に話さなくてもよい</li><li>・ 活動の中で知り得たメンター教員の個人情報を口外してはいけない</li><li>・ メンター教員との関係に困ったときは、プログラム事務局に相談できる</li></ul> <p><b>2. 自分自身に問いかける</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 今の自分が達成すべき課題は何か</li><li>・ 今の自分にとって必要な情報とは何か</li><li>・ 必要な情報の入手方法を知っているか</li><li>・ 将来的な自己イメージを持っているか</li><li>・ メンター教員からどのような点について支援を受けたいのか</li><li>・ メンター教員に自分の思いを伝えようと思っているか</li><li>・ メンター教員からのフィードバックに耳を傾けられるか</li></ul> <p><b>3. 初回のミーティングに臨む</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ メンター活動の内容について自分から提案する</li></ul> <p>【例】「○○について相談したいのですが」「○○について支援が受けられますか」</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 学内の組織や教員の職務などについての疑問を積極的に質問する</li><li>・ 悩みや課題について、メンター教員を信頼して話す</li><li>・ 任期の有無や現在の立場など、自分の置かれている実情をありのままに伝える</li><li>・ 自分の必要性を考えながら、次回以降のミーティングの予定を立てる</li><li>・ 活動の目標地点を設定する</li></ul>

#### 4. メンター教員からのアドバイスを聞く

- ・自分が知りたいことについて率直に尋ねる  
【例】「大学教員として重要だったのはどのような経験ですか」  
「新任教員のとき困ったのはどのようなことですか」  
「仕事と子育ての両立はどのようにしましたか」
- ・大学教員としての生活のために必要な情報を得る  
【例】「研究費助成に採択されるには何が必要ですか」  
「○○について、他にどんな本を読んだらいいですか」  
「○○について他に詳しい方はどなたですか」
- ・授業について尋ねる  
【例】「どのような資料を使っていますか」  
「課題はどのように出していますか」  
「授業ではどんなことを心がけていますか」
- ・学会誌の審査、研究費助成の審査、書籍の出版などの経験を聞く
- ・アドバイスを受けて活動した結果について、メンター教員にフィードバックを伝える

#### 5. 教職員間のネットワークをつくる

- ・他のメンティ教員とそれぞれの悩みや解決方法を共有する
- ・同じ学部学科の教員に学生の様子を聞く
- ・研究費の処理方法について職員に尋ねる
- ・他学部学科の教員と話し、分野ごとの研究方法や授業の仕方の違いを知る
- ・図書館職員に学生の利用状況について尋ねる
- ・大学教員生活の中での印象的な出来事についてベテラン教員に聞く
- ・他大学の教職員と大学や学生の違いについて話す

#### 6. 自立した教員として歩む

- ・目的に応じたメンター教員を学内外につくる
- ・今後の教育・研究生生活の計画を立てる
- ・子育てや介護といったライフイベントの将来的な見通しを立てる
- ・教員メンタープログラム発展のための提案をする
- ・メンター教員の考え方を理解する
- ・メンター教員との間に同僚としての新たな関係を築く
- ・自分がメンター教員になる

大学教員としての参考文献：夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子（2010）『大学教員準備講座』玉川大学出版部

作成者：伊藤奈賀子（名古屋大学高等教育研究センター）  
作成日：2010年10月1日  
URL：<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>

【資料4】 教員メンタープログラムHP

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/mentoring/>

<http://www.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/mentoring/>

CSHE 名古屋大学高等教育研究センター

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/

サイトマップ | ENGLISH

検索

プログラムとサービス  
Programs and Services

センター概要  
about CSHE

教授・学習  
サポートツール  
Tools and Resources

プログラムとサービス  
Programs and Services

大学教員対象  
院生・PD対象  
学部生対象  
情報配信サービス

プロジェクト  
Projects

出版物  
Publications

セミナー  
Seminars

スタッフ  
Staff

トップページ > プログラムとサービス > 大学教員対象 > 教員メンタープログラム

### ■ 教員メンタープログラム

■ News

高等教育研究センターが男女共同参画室とともに運営している「教員メンタープログラム」が、ワーキングウーマン・パワーアップ会議の「メンター・アワード2012」優秀賞に選ばれました。

■ 教員メンタープログラムとは

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムです。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼びます。

メンタープログラムは大学以外の組織でも広く導入されており、その効果は確認されています。現在、大学に求められているファカルティ・ディベロップメントの1つの方法としても位置づけられます。

名古屋大学の男女共同参画

男女共同参画室の活動

名古屋大学方式 女性研究者採用加速・育成プログラム

発展型女性研究者支援名大モデル

家庭と仕事の両立支援

学内保育園

学内学童保育所

あかりんご隊・女子学生支援

女性教員のためのメンタープログラム

あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム

### 女性教員のためのメンタープログラム

◆ News ◆

男女共同参画室が高等教育研究センターとともに運営している「教員メンタープログラム」が、ワーキングウーマン・パワーアップ会議の「メンターアワード2012」優秀賞に選ばれました。

教員メンタープログラムとは

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムです。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼びます。メンタープログラムは大学以外の組織でも広く導入されており、その効果は確認されています。

名古屋大学では、男女共同参画室と高等教育研究センターが協力して、女性教員のための教員メンタープログラムを実施しています。特に名古屋大学方式女性研究者採用加速・育成プログラム事業で採用された教員は、採用当初から2名以上のメンターが配置されます。

教員メンタープログラムのねらい

教員メンタープログラムは、メンティ教員にとって以下のような効果が期待されます。

- ・職務や生活に関して気軽に相談できる相手を得る
- ・大学について理解を深める
- ・教育研究など職務に必要な知識やスキルを獲得する
- ・結婚、出産、育児、介護などのライフイベントと仕事の両立を相談できる
- ・キャリアの展望を考えるきっかけになる
- ・メンター教員を介してさまざまなネットワークを作る

## ◎東海高等教育研究所刊行物の利用促進

2009年3月に解散した東海高等教育研究所の書籍ならびに季刊誌を名古屋大学高等教育研究センターおよび名古屋大学附属中央図書館において公開し利用促進を図った。

### 担当者

中井 俊樹（名古屋大学高等教育研究センター）

### 本年度の活動内容と活動成果

- (1) 東海高等教育研究所の刊行物を高等教育研究センターにおいて閲覧できるようにした。
- (2) 東海高等教育研究所の季刊誌である『大学と教育』全49号を名古屋大学附属中央図書館において閲覧できるようにした。
- (3) 東海高等教育研究所の刊行物一覧と内容を紹介するホームページを作成した。

### 東海高等教育研究所の刊行物一覧

- ・『大学と教育』全49号（1991年から2009年）
- ・東海高等教育研究所編『大学再生の条件—大学教育に新しい風を』（大月書店、1991年）
- ・東海高等教育研究所編『何のための大学評価か—大学改革の核心を問う』（大月書店、1995年）
- ・東京高等教育研究所・東海高等教育研究所・高等教育研究会（京都）共編『大学ビッグバンと教員任期制』青木書店、1998年
- ・東海高等教育研究所編『大学を変える—教育・研究の原点に立ちかえって』大学教育出版会、2010年

【資料】東海高等教育研究所の刊行物一覧・内容紹介のHP

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/projects/tokaiken/>

The screenshot shows a web browser window displaying the website of the CSHE Nagoya University Higher Education Research Center. The page features a navigation menu on the left with categories like 'センター概要', '教授・学習サポートツール', 'プログラムとサービス', 'プロジェクト', '出版物', 'セミナー', 'スタッフ', and 'リンク'. The main content area is titled '東海高等教育研究所の刊行物を閲覧できます' and contains text about the center's history and research focus. Below the text, there is a contact information section for '中井俊樹' and a photograph of several research publications.

CSHE 名古屋大学高等教育研究センター

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/

プロジェクト  
Projects

センター概要  
about CSHE

教授・学習  
サポートツール  
Tools and Resources

プログラムとサービス  
Programs and Services

プロジェクト  
Projects

出版物  
Publications

セミナー  
Seminars

スタッフ  
Staff

リンク  
Links

このサイトについて  
ローカルページ

### 東海高等教育研究所の刊行物を閲覧できます

高等教育研究センターでは、東海高等教育研究所による書籍ならびに季刊誌『大学と教育』全49号を閲覧することができます。ご関心のある方は高等教育研究センターまでお越しください。

東海高等教育研究所は、1990年12月に発足した研究所です。大学政策および高等教育政策の検討や現場からの政策提言を目指し、非営利の会員制研究所として自主的な研究活動を展開してきました。2009年3月に解散するまでの間、東海地域の高等教育に関する研究やネットワーク形成において先駆的な役割を果たしてきました。

高等教育研究センターは、設立時から東海高等教育研究所の所長を担ってきた新村洋史先生とご相談させていただいた結果、これまでの東海高等教育研究所の機能の一部を継承することになりました。まずは、東海高等教育研究所の貴重な刊行物や資料を整理して保存し、刊行物については広く読み続けられるように閲覧体制を整えたところです。多くの方にご活用いただければと存じます。

本件に関するお問合せ先  
中井俊樹  
052-789-5686  
[info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

## 研究会活動





## ◎アカデミック・ライティング研究会

### メンバー

近田 政博 (名古屋大学高等教育研究センター准教授)

Paul Wai Ling Lai (名古屋大学教養教育院アカデミック・ライティング支援室特任准教授)

### 本年度の活動目標

①高等教育研究センター、附属図書館、教養教育院が共催する「レポート書き方講座」全4回シリーズ開催を通して、学部生向けの日本語アカデミック・ライティングの教材を作成する。

②学部生に「論理的な文章を書く経験」を奨励することをねらいとして、「2011年度名古屋大学学生論文コンテスト」を実施し、前年度よりも多く、より水準の高い応募論文を確保する。

### 本年度の活動内容

①これらの教材は上記のLai氏が自身の英語アカデミック・ライティング授業用教材を同講座向けに書き直したものを、近田が日本語に翻訳する方式をとった。当日は、主として近田がレクチャーと進行役を担当し、Lai氏が随時サポートするティームティーチング形式で進めた。

- ・「第1回レポートの書き方講座－主題を表現する」2011年5月18日
- ・「第2回レポートの書き方講座－論理を構築する」2011年9月28日
- ・「第3回レポートの書き方講座－自分の論理を再点検する」2011年11月16日
- ・「第4回レポートの書き方講座－出だして勝負する！」2012年2月6日

これらを開催するにあたり、附属図書館情報サービス課から広報、受付、会場マネジメント、受講生への各種支援等の協力を得た。

②「2011年度名古屋大学学生論文コンテスト」を高等教育研究センター、教養教育院、附属図書館の共催で実施した(協賛:コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合)。

- ・2011年7月:ポスター、チラシ、Web等による広報開始。
- ・2012年1月13日:締切。高等教育研究センターの教員・研究員による予備審査。
- ・2012年2月10日:本審査(審査員:山本一良理事、松浦好治附属図書館長、戸田山和久教養教育副院長、木俣元一高等教育研究センター長)
- ・2012年2月29日:表彰式(附属図書館長賞の表彰式は3月13日)

・2011年度の応募論文は21本。審査の結果、次の4論文を優秀賞に採択した。受賞論文は名古屋大学の知的成果物として名古屋大学学術機関リポジトリに登録。

・受賞論文は次の通り（敬称略）。

優秀賞・附属図書館長賞「なぜ日本人は世界一素晴らしい医療に世界一不満を持つのか？」  
医学部1年 田中健一

優秀賞「障害者に対する職場内ハラスメントと今後の対策」  
法学部1年 朴 鎮洙

優秀賞「暴力の時代における情念の浄化装置としての絵画」  
医学部4年 山田悠至

優秀賞「J-POPから見る若者の心象風景～『逢いたいソング』についての考察」  
教育学部1年 高井崇佑

③他に開催した関連セミナー等（講師は近田政博）

- ・「TAのためのライティング支援セミナー」（2011年4月26日）
- ・「大学生のためのレポートの書き方」医学部医学科1年生用講義「医学入門」のうち1回分（2011年5月11日）
- ・「研究計画書の書き方」大学院教育発達科学研究科主催「留学生のための情報交換会」、（2011年7月28日）
- ・「研究計画書の書き方セミナー」、立命館大学2011年度大学院生のための自己力向上支援プログラムNo.16（2011年10月11日）
- ・「研究計画書の書き方セミナー」高等教育研究センター・附属図書館主催（2011年12月21日）

## 本年度の活動成果

①日本語アカデミック・ライティングのための名大オリジナル教材『Mei-Writing 日本語版論理的に書く技法』を制作した（原作：Paul W.L. Lai 編集・訳：近田政博）。また、平成24年度から文系基礎科目の授業として「学术论文の書き方入門」（前期、2単位）を開講することが教養教育院から認可された。同授業にあたっては、上記のオリジナル教材を使用する予定である。

②2011年度は21本の応募を確保することができた（前年度は16本）。同時に、審査員からは応募論文全体の水準も昨年と比べて向上したとの評価を受けた。附属図書館においてレポート書き方講座を数ヶ月おきに開催し、その機会ごとに同コンテストへの応募を呼びかけたこと、基礎セミナー担当教員全員に同コンテストの案内チラシを送付したことなどが一定の効果を生んだのではないかと考えられる。

【資料1】2011年度名古屋大学学生論文コンテストポスター

2011年度  
**名古屋大学学生論文コンテスト**

●論文内容= 応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。  
内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるよう記述してください。  
(論文題目例がホームページに掲載されていますので、参照してください。)

●応募期間= 2012年1月13日[金]13時まで



学問のススメ、論文へススメ。

学生生活にスパイスは足りていますか？  
授業に出る、レポートを書く、試験勉強をする、  
サークルに入る、友達と遊ぶ、  
本を読む、アルバイトをする…  
まだまだもの足りない人へ  
学問の香りのスパイスを贈ります  
読書の秋も深まったら、冬仕度  
——さあ、論文へススメ！

**応 募 要 項**

応募資格 名古屋大学に在学する学部学生

応募規定 ◎応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限りです。  
◎審査対象論文は1人1編のみとします。  
◎ホームページ( <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/> )に  
掲載されている書式に従い、論文と応募用紙それぞれについて  
電子ファイル(PDFまたはWord)を作成し、メール送信してください。


応募先 E-mail: [info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

審査 本学教員による

表彰 3名以内に、賞状および副賞

結果発表 ◎2012年2月上旬を予定  
◎発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします。  
◎入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします。

その他 論文の書き方に関する各種文献を高等教育研究センター  
(東山キャンパス文系総合館5階)にて閲覧できます。



●主催=名古屋大学高等教育研究センター、教養教育院  
●共催=名古屋大学附属図書館 ●協賛=ココマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合  
●問合せ先=名古屋大学高等教育研究センター 2011年度名古屋大学学生論文コンテスト担当  
Tel: 052-789-5696 E-mail: [info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp) URL: <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>

【資料2】 2011 年度名古屋大学学生論文コンテスト授賞式の様子



## ◎アカデミック・リーダーシップ研究会

大学環境が厳しさを増す状況の中で、大学経営の高度化が強く求められている。この状況に対応するため、大学の教育・学習部門におけるアカデミック・リーダーシップを形成・継承・発展するための具体的かつ有効な方策を検討する。

### メンバー（五十音順）

大塚 雄作	（京都大学 高等教育研究開発推進センター）
大森不二雄	（首都大学東京 大学教育センター）
齋藤 芳子	（名古屋大学 高等教育研究センター）
近田 政博	（名古屋大学 高等教育研究センター）
中井 俊樹	（名古屋大学 高等教育研究センター）
中島 英博	（名城大学 大学・学校づくり研究科）
代表 夏目 達也	（名古屋大学 高等教育研究センター）
吉永契一郎	（東京農工大学 大学教育センター）

### 活動目標

大学環境が厳しさを増す状況の中で、大学経営の高度化が強く求められている。この状況に対応するため、大学の教育・学習部門におけるアカデミック・リーダーシップを形成・継承・発展するための具体的かつ有効な方策を検討する。具体的には、以下の内容を解明する。

- ・日本と諸外国における大学経営陣のリクルート、経営陣着任前の準備の実態
- ・諸外国との比較により、日本の大学における経営陣のリクルート・研修の特徴
- ・大学経営陣が職務を遂行する上で必要な知識・スキルの内容、およびその習得方法
- ・大学経営陣に必要な知識・スキル習得を支援するための研修の内容・方法
- ・研修を提供する主体、および提供の方法

### 本年度の活動内容

1. 2011年5月、7月、11月、2012年2月に研究会総会を開催し、各メンバーによる研究成果の報告を行った。また、アカデミック・リーダーシップに関する研究状況に関して、招聘した研究者からレクチャーを受けた。
2. 筑波大学理事・教育担当副学長 清水一彦氏を招聘し、講演会を開催した。同大学における教育改革及びそこで副学長の担う役割等について報告を受け、質疑応答を行った。
  - ・講演タイトル 「副学長として教育改革に取り組む」
  - ・講演日時 2011年5月10日

- ・講演要旨 [http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/110510\\_shimizu/](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/110510_shimizu/)
3. フランス・パリ第 8 大学准教授 サイド・ペヴァンディ氏を招聘し、講演会を開催した。フランスにおける近年の大学教育改革の状況、改革における学長・副学長を中心とする大学執行部の役割等について報告を受け、質疑応答を行った。
    - ・講演タイトル 「フランスにおける高等教育グローバル化と大学経営改革」
    - ・講演日時 2011 年 7 月 26 日
    - ・講演要旨 [http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/110726\\_paivandi/](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/110726_paivandi/)
  4. オーストラリアで開催された高等教育研究開発協会（HERDSA）に代表を派遣して、オーストラリアの大学における教育改革やそこにおける大学執行部・一般教員の役割について調査と情報収集を行った（2011 年 7 月）。
  5. アメリカで開催された専門・組織開発協会（POD）に代表を派遣して、オーストラリアの大学における教育改革やそこにおける大学執行部・一般教員の役割について調査と情報収集を行った（2011 年 10 月）。
  6. アメリカで開催された全米州立大学協会（American Association of State Colleges and Universities、以下 AASCU）の研修に、代表を派遣した。アメリカの州立大学等の執行部を対象とするリーダーシップ形成を目的とする研修の参加し、その内容や特徴の把握に努めた（2011 年 2 月）。
  7. アメリカで大学執行部向けの研修で定評のあるハーバード大学に代表を派遣した。同大学で開催している研修の内容や課題等について担当者から事情を聴取するとともに、関連する資料を収集した（2011 年 12 月）。

#### 本年度の活動成果

- 研究発表 大塚雄作、大森不二雄、齋藤芳子、近田政博、中井俊樹、中島英博、夏目達也、吉永恵一郎「大学教育改革における大学執行部のリーダーシップの形成と発揮—国立大学副学長を中心に—」高等教育学会大会（2011 年 5 月 29 日、於名城大学）
- 研究発表 大森不二雄、中井俊樹、中島英博、夏目達也（司会）「《ラウンドテーブル》教育改革促進のための大学経営陣のリーダーシップ形成と研修プログラム」大学教育学会大会（2011 年 6 月 5 日、於桜美林大学）
- 刊行物 「大学経営高度化を実現するアカデミック・リーダーシップ形成・継承・発展に関する研究」（中間報告、2012 年 3 月）

# ◎多人数授業研究会

## メンバー

中井 俊樹 (名古屋大学高等教育研究センター)

東 望歩 (名古屋大学高等教育研究センター)

## 本年度の活動目標

多人数授業を担当する教員に必要な知識・スキルを明確にし、研修教材を作成する。

## 本年度の活動内容と活動成果

### 1. 教員向けセミナー「多人数授業の教え方」の実施

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/poster/110715.pdf>

[http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/fdf\\_pg110715.html](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/fdf_pg110715.html)

[http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/fdf\\_pg110715\\_summary.html](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/fdf_pg110715_summary.html)

### 2. ファカルティガイド「多人数授業の工夫」「ミニットペーパーを活用する」の作成・公開

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/LargeClasses.pdf>

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/MinutePapers.pdf>

### 3. ミニットペーパーのテンプレート作成・公開

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/minute.htm>

## 【資料1】ファカルティガイド「多人数授業の工夫」

<p>名古屋大学高等教育研究センター</p> <p>Faculty Guide</p>	<p><b>多人数授業の工夫</b></p> <p>Teaching in Large Classes</p>
<p>背景と論点</p>	<p>多人数授業の定義は研究者や大学によって異なりますが、100名の学生が一つの基準とされています。国内外の研究において、クラス規模が授業に影響を与えるという研究結果がありますが、多人数授業であっても学習成果や満足度の高い授業は見られます。</p> <p>多人数授業において教育効果が低くなる要因としては、集団による匿名性が授業に対する学生の帰属意識や責任感を低下させること、個々の学生への教員の対応が少なくなること、可能な教授法に限られること、プリントの配布や出席の確認などの授業運営に要する時間が増えることなどが指摘されています。</p> <p>一方、多人数授業に対して教員と学生の捉え方は違うようです。教員は多人数授業を好まない傾向がありますが、学生は大学ならではの学習形態と捉える側面もあり、教員ほど不満を抱いていないようです。</p>
<p>実践の手法</p>	<p><b>1. 学生を大勢の中の無名の一人にしない</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 学生を一個人として見ようとしていることを示す</li><li>・ 学生の顔を覚え、教室の外でもあいさつする</li><li>・ 学生を名前と呼ぶようにする</li><li>・ 学生が互いに知り合う活動を取り入れる</li><li>・ 授業の後に教室にしばらく残り、個別の質問に対応する</li><li>・ オフィスアワーを設け、授業時間外にも質疑応答に対応する</li><li>・ 初回の授業に学生の授業への期待、出身高校、趣味などを記したカードを提出させる</li><li>・ 学生に自分のメールアドレスを公開し、メールによる質問を受けつける</li></ul> <p><b>2. 教室を大きく使う</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 教卓の後ろではなく前に立つ</li><li>・ 普段よりジェスチャーを大きくする</li><li>・ 板書やスライドの文字の大きさを教室の後方から確認する</li><li>・ 教室の中を歩きながら話す</li><li>・ マイクを使うときには、いつもよりゆっくり話す</li><li>・ コードレスのマイクやスライドを送るポインターを使う</li><li>・ 前方座席の学生ばかりでなく、広く学生から発言を求める</li><li>・ 発言する学生の声が大きくなるように、少し距離をとって対話する</li></ul> <p><b>3. 急に始めず、急に終わらない</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 導入の時間とまとめの時間を授業の中に入れる</li><li>・ 授業の初めに、今日の授業で身につけてほしい学習目標を知らせる</li><li>・ 黒板に今日の授業で扱う内容の全体像を先に示す</li><li>・ 新しいテーマに入る際には、興味や関心を喚起する</li><li>・ まとめ時間では、この日の重要な内容をもう一度確認しながら伝える</li><li>・ 小テストやコメントペーパーを使って学習成果を確認する</li><li>・ 次回の授業時間までの課題を丁寧に説明する</li></ul>



#### 4. 授業が単調にならないようにする

- ・授業をいくつかのパートに分けて構成する
- ・スライドや動画など視覚教材を使う
- ・教壇でできる演示実験を行う
- ・ペア学習やグループ学習を取り入れる
- ・フィッシュボウル（5から10名で議論させ、他の学生は聞き役）を取り入れる
- ・ディベートやロールプレイを取り入れる
- ・クリッカー（学生がリモコンを使って回答する機器）を使って、小テストやアンケートを実施する
- ・ゲストスピーカーを呼ぶ

#### 5. 学生の参加度を少しずつ高める

- ・「賛成の人は手を挙げて」などの簡単な質問から始める
- ・考える時間を与えてから発言させる
- ・質問や感想を書かせた後に発言させる
- ・学生が質問や発言したら、まずそのこと自体をほめる
- ・学生の発言を待つときは、教員自身が沈黙に負けてすぐに話し始めないようにする
- ・「2人で議論する」から「4人で議論する」へといった段階を踏む

#### 6. 多人数に適した評価を行う

- ・配布、回収、採点に要する時間を考えて課題やテストは慎重につくる
- ・多肢選択方式やマークシート方式の試験が学習目標に適しているかどうか検討する
- ・学生の学習状況や出席の確認のためにミニットペーパーを利用する
- ・学生間でレポートを評価させる
- ・代表的な答案に対して授業の中でコメントする
- ・eラーニングのテスト機能やレポート提出機能を利用する

#### 7. 効率的に運営する

- ・最初の授業でシラバスと口頭で授業を使って方針を伝える
- ・レポートの締切と返却日、授業で守ってほしいルールなどの大事な内容はシラバスなど紙でも伝える
- ・人数に応じて「後ろ3列は座らないように」といった指示を与える
- ・教材をまとめたコースバケットを初回の授業で配布する
- ・座席指定にする
- ・学科別や学籍番号別などでレポートの回収先を分けることで、レポートの整理を容易にする
- ・レポートを返却する際に、「よくできました」などと書かれたハンコを使う
- ・メーリングリストをつくり、一度に受講生全員に連絡できるようにする
- ・メールでの質問を受け付け、適切な内容であれば全員に返信する
- ・授業運営を手伝ってくれるサポーターを受講生から募集する

参考資料：中井俊樹「クラス規模は授業にどのような影響を与えるのか」『名古屋高等教育研究』第6号、2006年、pp.5-19。

作成者：中井俊樹（名古屋大学高等教育研究センター）  
作成日：2011年7月29日  
URL：http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/guide/

## 【資料2】ファカルティガイド「ミニットペーパーを活用する」

<p>名古屋大学高等教育研究センター Faculty Guide</p>	<h3>ミニットペーパーを活用する</h3> <p>Teaching with Minute Papers</p>
<h3>背景と論点</h3>	<p>ミニットペーパーとは、授業中、学生に記述させるコンパクトな質問用紙です。「リアクションペーパー」「ワーキングペーパー」「ワーキングシート」「大福帳」「シャトルカード」など、用途や目的に応じたさまざまな名称や形式があります。</p> <p>「ミニット」の名の通り、短時間でを行うものですが、ミニットペーパーを用いることで得られる教育効果は多岐にわたります。授業の振り返り、学習内容の定着、理解度の確認、ディベートやディスカッションの題材や補助、レポートや期末テストの下準備、自分の考えや意見を文章で書く機会の提供、アカデミック・ライティングの基礎指導などです。</p> <p>記名式のペーパーでは、多くの場合、出席管理や成績評価に用いられます。個別、あるいは公開でのコメントにより、学生とのコミュニケーションや教室空間の雰囲気づくりに役立てることもできます。授業改善のための意見を広く求めることを目的として、あえて匿名式で行われることもあります。</p>
<h3>実践の手法</h3>	<h4>1. 使用する目的を明確にする</h4> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 学生からのフィードバックを受ける</li><li>・ 出席管理や成績評価の要件とする</li><li>・ 授業内容の振り返りを促す</li><li>・ 与えられた情報に対して問題意識や疑問を持つ習慣をつける</li><li>・ 学習内容を自分なりに理解しようとする主体的な意識や態度を育成する</li><li>・ テーマに対して自分なりの考えを深める時間を与える</li><li>・ 自分の考えを文章にまとめる訓練をする</li><li>・ 小テストによって理解度を確認する</li><li>・ 添削指導を通じて文章力向上を図る</li><li>・ レポートや試験に備えるための学習の方向性を示す</li><li>・ 学生の意見を教材として取り上げる（※授業で公開する場合は、事前に了解を取る）</li><li>・ ディベートやディスカッションのためのグルーピングをする</li></ul> <h4>2. 質問を設定する</h4> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 今日の授業において、重要だと思う点をまとめてください</li><li>・ 今日の授業内容で、疑問に持った点をあげてください</li><li>・ 今日学習した内容のうち、よく理解できなかった点をあげてください</li><li>・ 今日の授業中、聞いていて混乱した箇所をあげてください</li><li>・ 今日の授業で学んだ「 」という用語・概念・理論・公式について説明してください</li><li>・ 今日の授業で、とくに興味を抱いた点や印象的な内容を教えてください</li><li>・ 今日の授業で扱ったテーマに関わる具体的な事例や体験を教えてください</li><li>・ 今日の授業で視聴した映像・教材について、感想や意見を述べてください</li><li>・ 今日の授業で行った討論・発表の良かった点と改善点をコメントしてください</li><li>・ 次回の授業で扱うテーマについて、知っていることや思いつくことを書いてください</li><li>・ 今後、授業で扱ってほしい題材やテーマがあれば教えてください</li><li>・ 授業方法について、要望や意見があれば教えてください</li></ul>

### 3. 作業時間を活用する

- ・ 学習内容の振り返りや知識の定着を助けるために授業の最後に行う
- ・ 講義の中に作業時間を挟むことで気分転換を図り、集中力のキープを助ける
- ・ 配布や記述の時間を制限することで遅刻・中抜け防止、出席率向上を図る
- ・ 作業中の机間巡視で学生とコミュニケーションをとる

### 4. 講義の中で記述内容を取り上げる

- ・ 学生の意見や質問を起点にした授業展開によって、学習効果を高める
- ・ 講義内容に学生自身の興味・関心がフィードバックされている実感を持たせ、授業への参加意欲や満足度を上げる
- ・ 学生からの質問や意見を受け入れ、それに応える姿勢を示すことで、質問者だけでなく受講生全体に教員に対する信頼感を与える
- ・ 学生の意見、考え、疑問、興味、関心が授業に反映されていることを明示する
- ・ 模範例を取り上げることで、教員が受講生に求める学習達成度を具体的に例示する
- ・ 授業内容の理解を助ける・深める質問と答えを共有する
- ・ 模範的な文章や達成度の高い学習成果を見せて、学習意欲を高める
- ・ 他者の学びへの気づき、多様なものの見方を学ばせる
- ・ 互いの意見や考えを知ること、教室全体の親和性、学生間の連帯感を高める
- ・ 良い意見を書いた学生を指名して、その意見についての詳しい考えを発表させる
- ・ 対話型の授業において、議論の方向性を導いていく材料にする
- ・ ディスカッションやディベートを活性化させる

### 5. 授業改善に活かす

- ・ 受講生の知識レベルや興味、関心の方向性を把握する
- ・ 授業内容の理解度を把握して、必要があれば学び直しの機会を作る
- ・ 学生の達成度に応じて、より高度な学習内容を付加する
- ・ 授業方針に抱いている不安感や不審感を把握して解消する
- ・ 教員と学生がダイレクトにコミュニケーションするチャンネルとして機能させ、具体的な学生の意見を受け取ったり、教員からの個別指導などを行ったりする

### 6. 指導・評価を効率良く行う

- ・ 学籍番号によるグループ別、学科・学部別に回収する
- ・ 配布・回収を手伝ってくれるサポーターを受講生から募集する
- ・ I C T 端末を使用する授業では、電子データによる提出とする
- ・ マークシート式に印刷・集計できるソフトを使用する
- ・ 使用目的、作業時間に応じたサイズで作る
- ・ 配布、回収、管理がしやすいように、記名欄や枠線・罫線を印刷しておく
- ・ 添削の代わりに「よくできました」などのハンコを使って評価を伝える
- ・ 誤字脱字、計算ミスなどを学生間でチェックさせる
- ・ ペーパー整理、提出チェックをTAにサポートしてもらう

### 7. フォーマットをダウンロードする

- ・ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/minute.html>

参考資料：バーバラ・グロス・デイビス著、香取草之助監訳（2002）『授業の道具箱』東海大学出版会

作成者：東望歩（名古屋大学高等教育研究センター）

作成日：2011年7月14日

URL：<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/guide/>

# ◎名古屋 SD 研究会

## メンバー（五十音順）

中井 俊樹	（名古屋大学高等教育研究センター）
齋藤 芳子	（名古屋大学高等教育研究センター）
長尾 義則	（名古屋大学大学院環境学研究科）
村瀬 隆彦	（佐賀大学学務部）
上西 浩司	（鳥羽商船高等専門学校学生課）
水谷 早人	（日本福祉大学学生支援部）
辰巳 早苗	（大阪樟蔭女子大学修学支援課）

## 本年度の活動目標

昨年までのプロジェクトに引き続き、教務部門の実務経験の豊富な職員と高等教育の専門家によって、教務を担当する職員に必要な知識・スキルを明確にし、研修教材を作成する。

## 本年度の活動内容と活動成果

1. 2010 年度に作成した『教務の Q & A』をもとに大幅な改訂を行い、『大学の教務 Q & A』（玉川大学出版部）を出版した。
2. 大学教育学会第 33 回大会（2011 年 6 月 5 日、於桜美林大学）で「教務部門の研修教材開発から見た SD の課題」（発表者：上西浩司、村瀬隆彦、長尾義則、齋藤芳子、中井俊樹）を発表した。
3. 教務系職員育成に関する公開セミナー（講師：村瀬隆彦）を開催した。
  - ・ 講演タイトル 「失敗事例・成功事例を通じた教務系職員育成のあり方」
  - ・ 講演日時 2011 年 11 月 2 日
  - ・ 講演要旨 [http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/111102\\_murase/](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/111102_murase/)
4. 大学教育改革フォーラム in 東海 2012 (2012 年 3 月 3 日、於名古屋大学) で成果発表を行った。
  - ・ 発表者 上西浩司、村瀬隆彦、辰巳早苗、長尾義則、中井俊樹、齋藤芳子
  - ・ 発表タイトル 「大学の教務 Q&A—名古屋 SD 研究会からの発信」

## ◎なごや科学リテラシーフォーラム

名古屋地区で科学教育に携わる大学教員が連携し、大学での科学リテラシー教育の質を高めることを目的とする。本フォーラムは平成20年度より活動が続いている。今年度は、大学での科学リテラシー教育に関するシンポジウム（科学リテラシー講演会）を1度開催し、大学教員・大学生・小中高教員など幅広い層の参加者と意見交換を行った。また、身近な道具を使った科学実験の方法や、一般市民に科学に関する説明をする方法など、科学リテラシーの普及に役立つスキルを習得することを目的としたワークショップ（科学実験指導者講習会）を、大学生を対象にして1度開催した。さらに、昨年度から続く試みとして、守山生涯学習センターと連携して自然科学に関する市民講座（「守山科学夜話」）を5回実施し、一般市民と研究者との議論をつなぐ役割を果たした。

### メンバー

代表	川勝 博	(名城大学総合数理教育センター センター長・教授)
	浪川 幸彦	(椋山女学園大学教育学部 教授)
	佐藤 成哉	(愛知淑徳大学文学部 教授)
	戸田山和久	(名古屋大学大学院情報科学研究科 教授)
	村上美智子	(主婦)
	谷口 正明	(名城大学総合数理教育センター 准教授)
	内田 達弘	(名城大学総合数理教育センター 助教)
幹事	安田淳一郎	(名城大学理工学部 助教)

### 本年度の活動内容

- (1) 科学リテラシー講演会の実施
- (2) 科学実験指導者講習会の実施
- (3) 守山科学夜話の実施

会合日：2011年5月9日,6月27日,9月12日,2012年2月20日

### 本年度の活動成果

- (1) 第7回科学リテラシー講演会「数学は言葉だ！」2011年7月9日,名城大学名駅サテライト.
- (2) 第8回科学実験指導者講習会,2011年11月26日,名城大学天白キャンパス.
- (3) 守山科学夜話,2011年10月14日,11月11日,12月2日,2012年1月20日,2月10日,守山生涯学習センター.
- (4) 平成23年度なごや科学リテラシーフォーラム活動報告書,2012年2月.

## ◎名古屋哲学教育研究会

名古屋地区等で哲学を教える教員が、所属大学を越えて日ごろの教育実践を共有し、知見を交換する機会を提供する。同時に、哲学を専門とする大学院生に、教授法について学ぶ機会を提供する。

### 実施体制

代表 戸田山和久（名古屋大学大学院情報科学研究科教授）

幹事 久保田祐歌（愛知教育大学教育創造開発機構 LA プロジェクト担当研究員）

### 本年度の活動内容

平成 24 年 1 月に、名古屋哲学教育研究会共催セミナー「初等・中等教育における対話教育の可能性—教員養成大学で育むべき力とは—」を、愛知教育大学にて開催した。2008 年度より「FD・SD コンソーシアム名古屋」の後援を受けて、哲学を専門とする大学教員が、哲学を専門としない学生に対する哲学の教授法を共有する場を設けることを目的として、セミナー等を実施してきた。今年度のセミナーは、哲学が科目として導入されていない初等・中等教育における哲学教育の導入可能性について、初中等の教師を目指す学生、教員養成を担う大学教員、哲学を専門とする大学教員、大学院生で検討する場を設けるという趣旨で実施した。開催にあたっては、愛知教育大学の「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクトとの共催という形式で実施した。

セミナーでは、初等・中等教育における対話に基づく哲学教育を研究・実践する講師 2 名を招き、「子どもの哲学」（子どものための哲学・子どもとする哲学）の内容・方法・実践についてお話をうかがった（詳細は「講演要旨」を参照）。当日の参加者の多くは教師を目指す学部学生であり、哲学対話教育について教育現場での有用性や実施可能性という観点からの意見を得ることができた。対話教育の重要性が高まっているなかで、それがなぜ「哲学」対話教育でなくてはならないのか、という問題については、哲学を専門とする大学教員の間でさらに検討していく必要があると思われた。

今後の活動としては、大学における哲学教授法の実践共有の場を設けることを基本としながら、哲学教育の裾野を広げる取組も実施していきたいと考えている。

## 名古屋哲学教育研究会共催セミナー実施報告

### 1. 開催概要

タイトル：

初等・中等教育における対話教育の可能性—教員養成大学で育むべき力とは—

講演者：

寺田俊郎氏（上智大学文学部哲学科教授）

土屋陽介氏（日本大学文理学部人文科学研究所研究員・茨城大学非常勤講師）

日時：

平成24年1月19日（木）16：40～18：40

場所：

愛知教育大学本部棟3階第5会議室

共催：

愛知教育大学教育創造開発機構リベラル・アーツプロジェクト

### 2. 講演要旨

初等・中等教育における哲学対話教育の試みを「子どもの哲学」（子どものための哲学・子どもとする哲学）を中心として紹介し、対話教育の意義と方法について対話しつつ共に考える。また、哲学対話教育の海外・国内における実践を報告する。

「子どもの哲学」とは、哲学史・哲学理論の学習ではなく、哲学的対話・思考の活動である。1960年代に子ども向けの論理学・哲学教育の構想をもち、モンクレア州立大学に「子どものための哲学推進研究所」を創設したマシュー・リップマン（Matthew Lipman）を創始者とする。基幹教材として作成された『ハリー・ストトルマイヤーの発見』の翻訳とともに、世界各国で研究所・活動団体が設立され、国際組織「子どもとともにする哲学的探究国際会議」の設置にまで発展している。

リップマンは、推論・概念形成のための知的能力だけでなく、探究の共同体を形成し、共同で探究を進めるための社会的能力を育てることを重視する。そのためには対話の技法を育てることが必要となる。その基本的な手法は次のとおりである。（1）物語、絵本、映像などを鑑賞し、子どもが問いを立てる、（2）進行役（教員）は問いを黒板やフリップ・チャートに書き出す、（3）選ばれた問いに対する答えを共同で探していく。

哲学対話教育の意義は、「道徳性の基礎」「市民性の基礎」「学力の基礎」を身につけることができる点にある。哲学対話を通して学ぶことができるのは、対話の技法と作法、各教科に固有の哲学的問題等である。対話教育の手法が他にもあるなかで、なぜ「哲学」対話を重視するのかというと、当たり前とされていることを問い直したり、重要だが簡単に答えの出ない問いを問う等の特色をもつので、（比較的）平等で自由な空間、共同探究者としてのおとな、というソクラテス的状况を形成でき、事柄を自己の生や生活世界に結びつけて考えることを可能にするからである。こうした哲学対話教育を学校教育制度に導

入る場合には、「哲学」という教科の設置、家庭科、公民科との連携等の方法が考えられる。

教員養成課程に哲学対話の授業があることの意義については、「学校教育において対話教育を活性化する」「教員の教育力を高める」「各教科の教育内容を深める」「従来の子ども観や教育観を見直す」ことが可能である点を挙げるができる。

リベラル・アーツとは、自分とは異なる人びとと自由で平等な人どうしとして共生する技法と作法である。人間にとってほんとうに大切な知を専門家に頼らず、一人の世界市民として探究する営みは、哲学者カントの言う「世界概念の哲学」に重なる。哲学対話は、世界市民の基底的な教養として位置づけることができるのである。

### 3. 参加者アンケート結果

#### セミナーの満足度とその理由（自由記述）

##### 【満足度 5】（回答者 11 名中 6 名）

- ・自分自身の思考が深まったと思う。考える機会を与えてもらった。新しい考え方に触れられた。「理由」「根拠」「前提」をもった発言が大事。その中で特に「前提」ということが自分にはなかった。[学部生]
- ・これから教育について考える中で、教育の方法を変えたいと思ってるところだったので、参考になりました。[学部生]
- ・知らない分野についてたいへん勉強になった。[教員]

##### 【満足度 4】（回答者 11 名中 5 名）

- ・実際の哲学対話教育の場面が見られてよかった。「哲学すること」の意義というか、今までの私たちの考え方にはないような視点から見ることができました。[学部生]
- ・自分が早く挙手しなかったせいでもあります、自分が感じているもやもやとしたものを発信する時間があつたらさらに深めることができたのに・・・という思いから。[学部生]
- ・最新の研究の紹介があつたから。[大学院生]
- ・国語にも通じるし、現場でも必要。[教員/大学院生]
- ・実践例を映像を通して知ることができた。哲学教育の最前線の活動を知ることができてよかった。[教員]

#### 「対話教育」の初等・中等教育への導入の意義（選択回答）とその理由（自由記述）

##### 【非常に有意義である】（回答者 11 名中 7 名）

- ・VTR で見たように、子どもたち自身、発言する態度、思考する態度が見られたから。第 1 回目ということもあり発言者が偏っているということも言われていたのですが、その後の子どもたちが思考する、考えるということに抵抗がなくなりそうです。[学部生]
- ・多様さを受容する一人一人を尊重するという態度を教員、子どもが取れるようになる



- ことが大切だと考える中で、対話教育は有効ではないかと感じたため。[学部生]
- ・少子化で昔と比べて対話教育を導入できる環境になってきたから。[学部生]
  - ・子どもは感覚を通じて、経験に根差した発言が目立ったが、中等教育では客観的知識を交えて歴史的な問題（特定の概念の変遷について）に通じる手掛かりになるかもしれないと思った。[学部生]
  - ・ふだん考えないから考える機会を与えるという意味でよい。[学部生]
  - ・とりわけ道徳教育においては、むしろ哲学的なレベルで批判的に考える必要があると思う。[学部生]
  - ・自分の居場所を作る力、他人が安心してすごせる空間を作る力を養うことは教師も子どもにも必要。[教員/大学院生]

**【少しは有意義である】**（回答者 11 名中 3 名）

- ・私も今ちょうど考えていたことでしたが、最後にあったように「哲学」にしばられた中でのお話だったので、その点に関しては賛同できない部分がある。対話に可能性は感じているが、すぐに導入は有意義かどうかという問いには答えられない。まだ分からない点が多く判断できない。[学部生]
- ・対話の力は重要であると思う。[教員]
- ・「批判的思考」「創造的思考」を育む上で有意義であると考え。ただし、哲学的対話のレベルまで行くかどうか疑問。（大学においても）まずは、対話の技法を学ぶ段階から教育する必要があるであろう。[教員]

**【あまり有意義でない】**（回答者 11 名中 1 名）

- ・対話することの具体的な効果が今のところ見えない。[大学院生]

感想やコメント・提案（自由記述）

- ・勇気出して参加してみて良かったです。貴重な時間をありがとうございました。  
[学部生]
- ・今回、初めて参加しましたが、次の機会があれば、少し早めにお知らせを下さるとうれしいです。[学部生]
- ・映画は幼稚園で、先生方は小学校であったが、中学校になるとどうなるのか。逆に幼稚園、小学校だから発言できたのでは？[学部生]
- ・国語の伝え合いや道徳のエンカウンターが対話に通じている。リンクしている所が大きい。[教員/大学院生]

# 愛知教育大学LAプロジェクト主催 第5回リベラル・アーツEduセミナー 初等・中等教育における対話教育の可能性 —教員養成大学で育むべき力とは—

## 趣旨

教員養成系大学で学ぶ学生が特に身につけるべき力やその教育方法について意見交換する。議論に先立ち、初等・中等教育における対話に基づく哲学教育を研究・実践する寺田俊郎氏、土屋陽介氏から、国内・海外の教育実践について講演していただく。それを受け、教員養成大学として行うべき取り組みについてディスカッションする。

## 概要

日時：平成24年1月19日（木）16：40～18：40

場所：愛知教育大学 本部棟3階 第5会議室

参加対象：大学教職員、学生

講師：

寺田 俊郎 氏（上智大学文学部哲学科教授）

土屋 陽介 氏（日本大学文理学部人文科学研究所研究員・茨城大学非常勤講師）

※今年度より、文科省特別研究経費によるプロジェクトの一環として、教員養成系大学の特色を活かしたリベラル・アーツ型教育の構築に向けた取組を推進しています

主催：国立大学法人 愛知教育大学 教育創造開発機構

「教員養成系大学の特徴を活かしたリベラル・アーツ型教育の展開」プロジェクト

共催：名古屋哲学教育研究会

お問合せ先：久保田 祐歌（LAプロジェクト担当研究員）

ykubota@aecc.aichi-edu.ac.jp/内線2552



## ◎能力認定学位研究会

日本、アメリカ合衆国、フランスにおける企業の労働力ニーズや労務管理の手法の変化の動向を調査するとともに、これらの企業側の変化に対する高等教育機関の対応の状況や将来戦略の内容等について調査・研究する。

### メンバー（五十音順）

加藤 かおり	（新潟大学 大学教育機能開発センター）
齋藤 芳子	（名古屋大学 高等教育研究センター）
近田 政博	（名古屋大学 高等教育研究センター）
中井 俊樹	（名古屋大学 高等教育研究センター）
代表 夏目 達也	（名古屋大学 高等教育研究センター）

### 活動目標

1. コンピテンシーによる労務管理に関する研究動向の調査を行う。
2. 高度職業人に対するニーズやコンピテンシーによる労務管理導入の状況に関する調査を行う。
3. 日本、アメリカ、フランスの高等教育機関を対象に、企業の労働力ニーズへの対応について、主に教育課程と学生の就職支援策等の点から調査する。
4. 中央（連邦）政府の労働省と教育省を対象に、企業における新しい労務管理導入や、それに対する各高等教育機関の対応策に関する政府の方針・具体的な政策等について調査する。
5. 上記調査結果をふまえ、日本の大学における学生の就職促進・支援方策のあり方について検討する。

### 本年度の活動内容

1. 研究会総会（2011年7月）、学内研究会（2011年8月）を開催し、主要メンバーによる研究成果の報告および議論を行った。
2. イタリアで開催されたヨーロッパ大学継続教育ネットワーク（EUCEN）の年次大会に代表を派遣して、ヨーロッパ諸国の大学における能力評価学位に関する制度と運用の実態に関して情報・資料の収集を行った（2011年11月）。

## ◎物理学講義実験研究会

理系講義で学生が体験的に学習する機会を作り、理論と実験を関係づける手法の1つとして、講義中に実験を導入する方法がある。現在、講義中に行う実験（以下、「講義実験」）器具の開発と活用には、各大学の教員が各自で取り組んでおり、そのノウハウが共有されていない。そこで我々は、学内外の講義実験に関するノウハウを抽出し、各大学の教員間で共有できるネットワークを形成することを目的として活動を行っている。

### メンバー

代表	三浦 裕一	(名古屋大学理学研究科 准教授)
	中村 泰之	(名古屋大学情報科学研究科 准教授)
	古沢 彰浩	(名古屋大学教養教育院 専任講師)
	小西 哲郎	(名古屋大学理学研究科 准教授)
	千代 勝実	(山形大学基盤教育院 教授)
	齋藤 芳子	(名古屋大学高等教育研究センター 助教)
幹事	安田淳一郎	(名城大学理工学部 助教)

### 本年度の活動内容

- (1) 新規講義実験の開発・集積
- (2) 既存講義実験の調査と改善
- (3) ハンドブックおよびウェブサイトの普及
- (4) ハンドブックおよびウェブサイト体裁・機能の改善
- (5) 講義実験の効果測定法・評価法の検討と実施

会合日 2011年4月4日, 5月11日, 6月15日, 7月20日, 9月6日, 10月12日, 11月9日, 12月14日, 2012年1月11日, 2月16日, 3月16日

### 本年度の活動成果

研究交流 大学教育改革フォーラム in 東海 2012 (2012年3月3日, 於名古屋大学) におけるミニワークショップ「現象と概念を結ぶ—物理学講義実験という挑戦」企画

研究論文 安田淳一郎, 齋藤芳子, 小西哲郎, 中村泰之, 千代勝実, 古澤彰浩, 三浦裕一 「物理学講義における系統的演示実験の試み」 『大学の物理教育』17(3), pp.121-124, 2011.

- 研究発表 三浦裕一, 安田淳一郎, 小西哲郎, 中村泰之, 千代勝実, 古澤彰浩, 齋藤芳子  
「物理学講義における系統的演示実験-回転運動の教材開発と誤解の原因分析」日本物理学会 2011 年秋季大会, 富山大学, 2011 年 9 月.
- 研究発表 齋藤芳子, 安田淳一郎, 小西哲郎, 中村泰之, 千代勝実, 古澤彰浩, 三浦裕一  
「物理学講義における系統的演示実験-リアルタイム評価の試行-」日本物理学会 2011 年秋季大会, 富山大学, 2011 年 9 月.
- 研究発表 安田淳一郎, 齋藤芳子, 小西哲郎, 中村泰之, 千代勝実, 古澤彰浩, 三浦裕一  
「物理学講義における系統的演示実験-提示方法の理論的な検討-」日本物理学会 2011 年秋季大会, 富山大学, 2011 年 9 月.
- 研究発表 安田淳一郎, 齋藤芳子, 小西哲郎, 中村泰之, 千代勝実, 古澤彰浩, 三浦裕一  
「物理学講義における系統的演示実験-提示方法の検討-」大学教育改革フォーラム in 東海 2012, 名古屋大学, 2012 年 3 月.
- 研究発表 三浦裕一, 安田淳一郎, 小西哲郎, 中村泰之, 古澤彰浩, 齋藤芳子, 千代勝実「物理学講義における系統的演示実験-電磁誘導を理解させるシリーズ実験」日本物理学会 2012 年年次大会, 関西学院大学, 2012 年 3 月.
- その他 科研費基盤研究(C), 23501062, 2011-2013, 大学講義で物理的概念の理解を促進させる系統的演示実験とリアルタイム評価の開発, 研究代表者: 三浦裕一 (名古屋大)

【資料】物理学講義実験研究会ウェブサイト

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/physdemo/>

# VERIOR INTERPRETATIO NATURAE

物理学講義実験研究会 *sed omnia verior interpretatio naturae conficitur per instantias, et experimenta idonea et apposita Francis Bacon, Novum Organum Aphorisms 50*

---

HOME



### 理論箱

講義実験とは  
講義実験の機能  
発見の秘訣  
実験の秘訣  
留意すべきこと



### 実践箱

力学  
電磁気学  
熱力学  
波動

---

#### What's New

2012年3月11日  
保護中: 熱電磁気回転実験 (熱電対発電・電磁気回転)

2012年3月10日  
保護中: 3原色の影の色

2012年3月6日  
保護中: 真空保存容器を用いたボイルの法則の体験

2012年3月5日  
曲げてみて理解する金属の原子構造

2012年3月2日  
ミニワークショップ開催のお知らせ

#### 実験カテゴリー

発電機\* 座標 (極座標) ガウスの法則 ベクトル演算 (ベクトル積) モーター\* ジュール発熱\* ポテンシャル 電荷 電気力線 ビオ・サバールの法則 光速\* 格子欠陥\* 転移\* 合金\* 金属\* 熱伝導\* ブラウン運動\* 熱運動\* 拡散現象\* シミュレーション\* カオス\* 2体問題 摩擦\* 熱エネルギー\* エネルギー保存 重心 位置エネルギー 2重振り子\* 共振現象\* 引き込み\* 同期\* 慣性モーメント 運動量保存 単振動 剛体の運動 (直線運動) 電磁誘導 電磁 渦電流\* 磁場中の電流に働く力 剛体の運動 (回転運動)

#### Featured Demo

---

#### Menu

- 理論箱
- 講義実験とは
- 講義実験の機能
- 発見の秘訣
- 実験の秘訣
- 留意すべきこと
- 実践箱
- 力学
- 電磁気学
- 熱力学
- 波動
- 原子

コラム一覧  
参考文献  
関連リンク  
ダウンロード  
物理学講義実験研究会  
成果発表

---

PAGE TOP

---

## VERIOR INTERPRETATIO NATURAE

物理学講義実験研究会  
お問い合わせ  
[physdemo@nagoya-u.ac.jp](mailto:physdemo@nagoya-u.ac.jp)

### 理論箱

講義実験とは  
講義実験の機能  
発見の秘訣  
実験の秘訣  
留意すべきこと

### 実践箱

力学  
電磁気学  
熱力学  
波動  
原子

### コラム一覧

参考文献  
関連リンク  
ダウンロード

### 物理学講義実験研究会

成果発表

- 131 -

## ◎留学生研究会

### メンバー（五十音順）

- 田中 京子（名古屋大学留学生センター 准教授）  
田所 真生子（名古屋大学留学生センター 特任准教授）  
代表 近田 政博（名古屋大学高等教育研究センター 准教授）  
土井 康裕（名古屋大学大学院経済学研究科 特任講師）  
トリシア・C＝ジョーンズ（名古屋大学高等教育研究センター 客員准教授）  
坂野 尚美（名古屋大学留学生センター 特任准教授）  
松浦 まち子（名古屋大学留学生センター 教授）  
山口 博史（名古屋大学国際交流協力推進本部 特任講師）  
渡部 留美（名古屋大学国際交流協力推進本部 特任講師）

### 今年度の活動目標

1. 上記ハンドブックを活用した学内ワークショップの企画立案・主催
2. 『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』ウェブ版の制作
3. G30 新任教員用オリエンテーションの企画立案参加
4. 職員向け異文化コミュニケーション研修の企画立案参加

### 今年度の活動内容

1. 上記ハンドブックを活用した学内ワークショップの企画・立案・主催  
名古屋大学教職員のためのワークショップ「留学生との信頼関係をどう築くか」を2011年6月14日に実施した。総長補佐からグローバル30プログラムの入試状況について説明があり、次いで上記ハンドブックの内容をもとにして、留学生と教職員が信頼関係を築くために教職員にどのような配慮や工夫が求められるかについてのケーススタディを行った。
2. 『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』ウェブ版の制作  
『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』ウェブ版（参考資料1）アップロードを、2011年8月31日に行った（ウェブ作成の発注先業者は荒川印刷）。冊子版（2011年3月20日刊行）からの改訂として、「Q&Aと参考情報の相互リンク」（参考資料2）、「キーワード検索のページ新設」（参考資料3）、「コラム追加」を行った。
3. G30 新任教員用オリエンテーションの企画・立案・参加  
「グローバル30新規採用教員オリエンテーション」（国際担当副総長主催）を2011年9月6日に実施した。同副総長が同プログラムの趣旨を説明し、次いで名古屋大学



に勤務する外国人教員が日本の大学で勤務する際の文化適応について体験談を語った。最後に、名古屋大学の学年暦、時間割等の注意事項を説明し、全体で意見交換を行った。

#### 4. 職員向け異文化コミュニケーション研修の企画・立案・参加

平成23年度国際業務トレーニング研修「大学職員のための異文化コミュニケーションセミナー」（国際部主催）を2011年11月21日に実施した。異文化コミュニケーションのあり方について、①概論、②海外研修派遣経験のある職員の事例紹介、③事例検討の順に説明を行い、最後に意見交換を行った。

#### 【資料1】『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』トップページ

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/index.html>

HOME | はしがき | あとがき | クレジット | サイトマップ

## 名古屋大学教員のための 留学生受け入れハンドブック

キーワード索引 PDF版ダウンロード

### はしがき

1. 名古屋大学で学ぶ留学生の概要
2. 留学生の受け入れに関するQ&A
  - 2-1. 受け入れ手続きを行う
  - 2-2. 日本の生活への適応を促す
  - 2-3. 学習を支援する
  - 2-4. 研究指導を行う
3. 名古屋大学の教員からのメッセージ
  - 3-1. 留学生を受け入れる際に留意していること
  - 3-2. 留学生へのメッセージ

### 4. 留学生を受け入れる際の参考情報

- 4-1. 入学前の受け入れ手続きについて
- 4-2. 日常生活について
- 4-3. 授業や研究指導について

### あとがき

### コラム

### キーワード索引

あ行 か行 さ行 な行 に行 は行 ま行 や行 ら行

名古屋大学高等教育研究センター  
Center for the Studies of Higher Education,  
Nagoya University  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

ECIS  
名古屋大学留学生センター

名古屋大学国際化拠点整備事業

ver1.0 2011年8月31日  
Copyright © 2011 名古屋大学高等教育研究センター. All Rights Reserved.  
[info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)

【資料2】『名古屋大学教員のための留学生受入れハンドブック』「留学生受け入れに関するQ&A」のページ

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/faq/index.html#index2>

## 2-1. 受け入れ手続きを行う

- [Q1] 留学志望者の日本語能力をどうチェックすればよいか。
- [Q2] 記載された学歴が正確なものかどうか、申請段階でどうチェックすればよいか。
- [Q3] 志望学生の出身大学のレベルを確認するのが困難だが、どうしたらよいか。
- [Q4] 研究計画書を自分で書いていないと思われるものがある。どうやって見なければよいか。
- [Q5] 留学生の身元引受人や出身大学の推薦書等の信頼性が疑われるときは、どうやって確認すればよいか。
- [Q6] 授業料や生活費の支払い能力があるかどうか、どうやって確認すればよいか。
- [Q7] メールでやりとりしても、研究生を受け入れるべきかどうか判断がつかない。たくさん希望者から依頼が来て、誰を受け入れるかで悩んでいる。
- [Q8] 入学検定料の送金方法をどうしたらいいのか？ 留学生にとって為替の作成は容易でないと思うが。
- [Q9] 留学生にチューターをつけられると聞いたが、どのような学生をチューターに任用すればよいか。
- その留学生がどのようなサポートを必要とするのかを把握し、それに適したチューターを探すことが必要です。専門分野の基礎知識の習得が必要なら、同じ研究室の先輩学生が望ましいでしょう。短期留学生のチューターなら、日本の文化施設などと一緒に出かけたり、必要な時に通訳ができる学生が好ましいでしょう。その他、責任感があり、留学生支援に真面目に取り組むことのできる学生、コミュニケーション能力をもった学生であることが期待されています。
- 本学では『名古屋大学チューター・マニュアル』や『名古屋大学チューターハンドブック』を制作しています。下記のURLからPDF形式で全文ご覧いただけます。
- <http://www.ecis.nagoya-u.ac.jp/exchange/tutor.html>
- [Q10] 留学生のチューターに適任の日本人学生が見つからなくて困る場合が多い。
- [Q11] 研究生として入学したら、自動的に大学院の試験に合格できると考えている留学生がいる。どのように対応するのが適切か。
- [Q12] 他大学の大学院受験を勧めたが、転学を受け入れがたいようである。
- [Q13] 大学院入試に不合格であった留学生を、次年度の研究生として受け入れ延長すべきか。

【資料3】『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』キーワード検索のページ  
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/keyword/index.html>

[HOME](#) | [はしがき](#) | [あとがき](#) | [クレジット](#) | [サイトマップ](#)

## 名古屋大学教員のための 留学生受け入れハンドブック

[キーワード索引](#)



名古屋大学で学ぶ 留学生の概要	留学生の受け入れに 関するQ&A	名古屋大学の 教員からのメッセージ	留学生を受け入れる 際の参考情報	コラム
--------------------	---------------------	----------------------	---------------------	-----

### キーワード索引

**あ行**

- [アカデミックスキル](#)
- [アパート](#)
- [アパートの保証人](#)
- [アルバイト](#)
- [異性関係](#)
- [近隣の場所](#)
- [医療機関](#)
- [飲食上の制限](#)
- [インフルエンザ](#)
- [英語による授業](#)
- [英語能力](#)
- [お土産](#)

**か行**

- [外国人学生](#)
- [科学技術の重用](#)
- [学位](#)
- [学習意欲](#)
- [学習奨励費](#)
- [学生定員](#)
- [貸付金](#)
- [家族の招聘](#)
- [家族の病気](#)
- [帰国留学生](#)
- [基礎学力](#)
- [休学](#)
- [旧正月](#)
- [教授法](#)
- [郷土料理](#)
- [グローバル30](#)
- [けが、病気](#)
- [研究計画書](#)
- [研究室の行事](#)
- [研究室の人間関係](#)
- [研究指導](#)
- [研究手法](#)
- [研究生](#)
- [研究テーマ](#)
- [公営住宅](#)
- [交通違反](#)
- [国費留学生](#)
- [子育て](#)
- [ごみの分別](#)
- [コミュニケーション](#)

**さ行**

- [在留資格](#)
- [在留資格認定証明書](#)
- [在留資格の切替](#)
- [査証\(ビザ\)](#)
- [資格外活動許可申請](#)
- [指導教員](#)
- [指導教員の交替](#)
- [私費留学生](#)
- [就職](#)
- [授業内容の理解](#)
- [授業の出席](#)
- [授業のルール](#)
- [授業料](#)
- [授業料免除](#)
- [出身国の教育制度・教育事情](#)
- [出身大学の推薦書](#)
- [障がいを持っている留学生](#)
- [奨学金](#)
- [書類の提出](#)
- [推薦書](#)
- [生活費](#)
- [政治的な話題](#)
- [精神的な悩み](#)
- [セミナー](#)
- [先行研究](#)

**た行**

- [大学院入試](#)
- [知的所有権](#)
- [中国学位・学歴認証システム](#)
- [チューター](#)
- [著作権](#)
- [TA\(ティーチング・アシスタント\)](#)
- [ディスカッション](#)

**な行**

- [名古屋大学留学生後援会](#)
- [日常生活](#)
- [日本学生支援機構](#)
- [日本語能力](#)
- [日本語の授業](#)
- [日本語表現](#)
- [日本の教育制度](#)
- [日本の留学生受け入れ政策](#)
- [日本留学試験](#)
- [入学検定料](#)
- [入国管理局](#)
- [人間関係](#)
- [妊娠](#)

**は行**

- [パーティ](#)
- [配偶者や子ども](#)
- [電車手続き](#)
- [ハラスメント](#)
- [批判的思考](#)
- [ベジタリアン](#)
- [保育園](#)
- [法律的な問題](#)
- [ホームステイ](#)

**ま行**

- [身元引受人](#)

**や行**

- [家賃](#)

**ら行**

- [留学生宿舍](#)
- [留年](#)
- [レポート課題](#)



## 教材・プログラム開発



## ◎博士のキャリア展開に資するスキル開発プログラム

### 設計と実施

名古屋大学高等教育研究センターでは、世界的な博士教育改革の潮流および日本の動向を踏まえ、院生やポストク等を対象とするトレーニングプログラム「院生・ポストクのためのスキルアップセミナー」を開発、実施している。このトレーニングプログラムは近い将来の正課への展開を念頭においており、研究科や GCOE との共催により、各部局の状況を把握しつつ、理解増進に努めている。

課外セミナーの開講は 2010 年に開始した。正課授業の設計に資することを目的にしており、英国や欧州科学財団が提示した「トランスフェアラブル・スキルズ」を基に設計している。セミナー開催にあたっては、学内他部局で提供されてこなかったテーマを中心に取り上げている。

2010 年度の課外プログラムは「コミュニケーション」をテーマにシリーズでセミナーを行った。本年（2011 年）度は「研究活動とその環境」をテーマにしたシリーズセミナー「院生・ポストクのためのスキルアップセミナー 2011 秋」を開催したほか、他部局との共同開催による単発セミナーとして、「サイエンスイラストレーション入門」、「ポスター・スライドづくりの理論と実践」、「学術広報誌制作教室」を開催した。

以上のほかに、各部局との連携による「博士の学問分野別キャリア支援事業」を進めている。

多元数理科学研究科との共同事業では、純粋数学においてアカデミックポストを得る以外にも数学に関連する分野は数多くあるという事前調査に基づき、数学のもつ潜在的な需要についての講演会を 2010 年度に開催し、本年（2011 年）度は学生独自のプロジェクトをサポートしつつ、ロールモデルを招いてのキャリアセミナーを開催した。今後は教授学習の基礎知識や学問と社会の関係などを学ぶセミナーを行い、教育活動やアウトリーチ活動の実践に展開することを検討している。

また、日本文学、日本文化を英語で発信するというテーマを掲げ、異文化コミュニケーションや教授法の基礎を学んだ後に、留学生対象のセミナー講師に挑戦してもらうという一連の活動を、文学研究科教育研究推進室ならび留学生センターと連携して実施した。

この学問分野別キャリア支援プログラムは、他部局が参照できるモデルケースづくりと位置づけている。

## 院生・ポスドクのためのスキルアップセミナー 2011 秋

主 催：高等教育研究センター＋GCOE「宇宙基礎原理の探求」

対 象：本学大学院生、研究員等

各回定員：30名

名古屋大学 高等教育研究センター＋GCOE「宇宙基礎原理の探求」  
大学院生のためのスキルアップセミナー 2011秋

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp>

対 象 = 本学在籍の大学院生、研究員等

登 録 = 原則として前日までに下記問合先まで氏名と所属をご連絡ください

問合先 ⇒ e-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp または 内線: 5696

参加費  
無料

### クリティカルシンキングの技法—科学技術論の事例を通して学ぶ—

日時：2011年10月11日[火] 14時～16時

場所：理学南館1階セミナー室

講師：伊勢田 哲治（京都大学 大学院文学研究科）

### 研究評価の現状

—研究者として知っておくべきこと、研究者コミュニティとして考えていくべきこと—

日時：2011年11月14日[月]15時～17時

場所：ES総合館034講義室

講師：林 隆之（大学評価・学位授与機構）

### 研究公正入門—研究不正に巻き込まれないために—

日時：2011年11月25日[金] 15時30分～17時30分

場所：ES総合館034講義室

講師：大須賀 壮（理化学研究所）

### 人の力を引き出す技法—研究者のためのコーチング入門—

日時：2011年12月6日[火]16時30分～18時30分

場所：理学南館1階セミナー室

講師：中井 俊樹（名古屋大学 高等教育研究センター）

Preparing Future Professionals



○クリティカルシンキングの技法—科学技術論の事例を通して学ぶ—

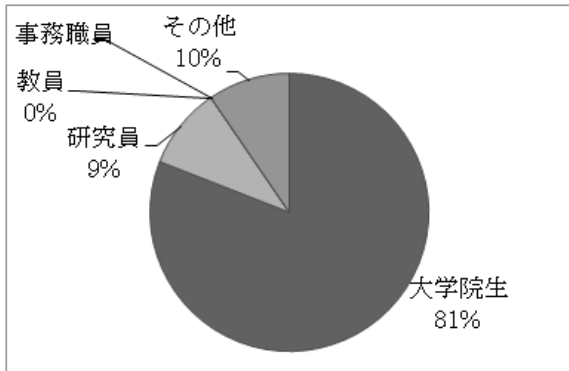
日 時：10月11日[火] 14:00-16:00

場 所：理学南館1階セミナー室

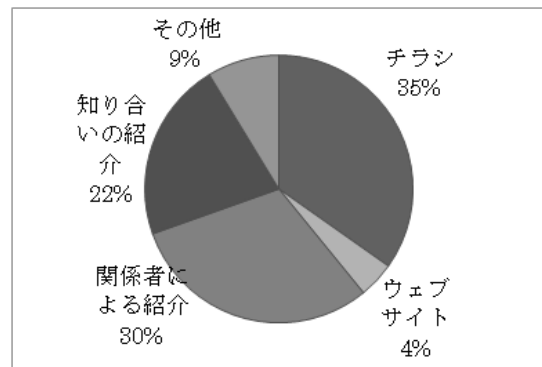
講 師：伊勢田哲治（京都大学）

受講人数：23名（アンケート回答21名）

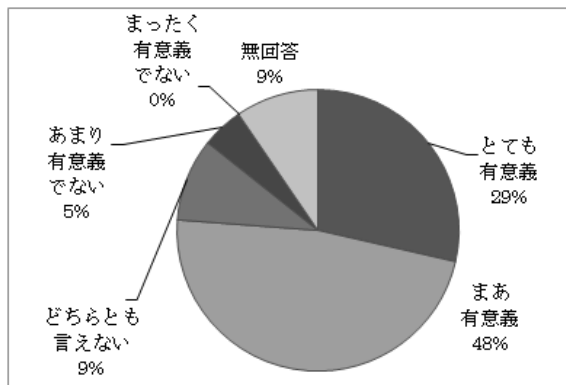
所属



セミナーを知ったきっかけ



セミナーは有意義でしたか？



課題文はいかがでしたか？

- ・よくつくられていると思います。スキル1と2はそれぞれで課題文1を選んだ人には違う視点を強く与える気もするのですが、2を選んだ人はある程度直観的にやっている気もしなくはない。（少し日本語を直せそうな気はします。たまに読みにくい。）
- ・だれもが知っている身近な話題であり、適切なのではないかと思った。
- ・地球温暖化の課題文は、科学の点からみても判断に悩む問題を扱っていて、歯ごたえがあった。
- ・教材として適切に感じられたが、ところどころに著者と意図が感じられ、少し抵抗してみたくなった。
- ・少し難しかったです。
- ・全体的に争点がタイムリーであり、考える必要がある内容でよかった。それぞれの対立

した例文も説得力があり、議論の争点がおもしろかった。しかし、さまざまな方面からアプローチができるので、シンプルな内容や、実際に結果が出ている問題も取り上げるとおもしろかったかもしれない。

- CTとの結びつきがはっきりしていてわかりやすかった。
- 時間内で読むには長かった。
- 課題1、2は長くて読み切れず、ディスカッションしにくかった。地震の内容は、テーマ的に何をどうしたいのかといった先が見にくくて読みにくかった。
- ユニット2はよかったです。途中参加なので、ユニット1のほうはわかりません。
- "課題文1において、批判の終着点を金とかに持ってきている点は、一般受けするかもしれないが、大学の講義には向かない（そもそも批判したいバイアスがかかっている人向けにしか説得力を持たない）と考えられるので、一部改訂したほうがよい。
- 課題文2において、バイアスを排除する研究デザインについて、完全でなくても例を述べておかないといけないと思う。この方法にはこんな問題点があつてとか色々書いておくことで、将来的な可能性（デザイン成立の可能性）を示せるようになる。
- 放り込み方は上手いと思う。（2、4が受け入れやすいが、立場は2と3が近い）
- 最初読んだ時は、前提知識も少ないので、文章の意味自体がよくわからなかった。今回の教育プログラムに上手く沿った文章だったと思う。
- 事前に配ってもよかったです。内容はよかったです。
- 2と3、4が平行な感じでとてもよかったです。1、2は「地震」の問題で身近に感じました。
- いい課題だと思います。
- 読む内容が少し重く、もう少し考える時間があればよかったです。
- 対立構造が似ている文章を2セット用意しており、さらに意見が分かれるものでよかったです。
- すぐに理解することが難しかったが、2つの課題の比較をする際のポイントがよくわかった。
- 課題文の論理構造に着目したディスカッションがおもしろかった。人によって解釈が違っていたからである。

#### スキル1、2はいかがでしたか？

- 1：「水俣病で医学者は何をしてきたか」（津田??さんの）みたいなタイトルの本の、疫学の section を思い出しました。
- スキル2：2を知った後、unit1 と unit2 の比較というか、検討もできたら面白いような気がする。
- スキル1は基本的ではあるが重要であると感じた。スキル2は話題としては興味深かったが、どういう場面でどのように適用すればよいのかイメージがつかみにくかった。
- 四分割表の説明はわかりやすかった。メタクリティカルシンキングは、初めて触れたも

のということもあって、この文章だけではよくわからなかった。

- 方法論として、明確化するために役立ったと思う。
- スキル1は理にかなっており、スキル2もおもしろかったです。
- スキル1、2ともに物事を考える上で必要な技術であり、意識的にこの技術を使うことによって頭の中が整理された。
- もちろん自分でCTするに十分な知識、スキル態度を身につけるのも大切だが、メタCTをする時の基準をはっきりさせることも大切だと感じた。特に未来のことなどわからないので、その時はメタCTをうまく生かす必要があると思った。
- スキル1は簡単にできるが、とても大切なことだと感じた。物事を短絡的に結果と関連づけるのではなく、そうでない場合なども想定することが必要だと改めて認識した。
- 四分割表は、わかりやすく簡単でよかったが、メタCTは使い方がよくわからなかった。
- ユニット2はとてもよいテーマだったと思います。もう少しディスカッションの時間をとってもらいたかったです。
- スキル1：せめて5%棄却域の数字とかを入れておかないと、2人と20人の差がどれくらいなんだろう…とかいう説明において説得力を欠く。課題文1→課題文2への誘導の意図が透けてみえる。
- スキル2：判断基準を何通りか示さないと混乱する。スキル2の使い方が若干あやしいかなと思う。グループディスカッション3に入る前に、意図と使い方がわからないと使いくい。
- 4分割法を初めて知ったが、これは役に立つスキルだと思う。カイ二乗検定などももっと勉強したいと思った。メタCTでは、このスキルを応用するものではなくて、メタCTしすぎな人に対して注意を促すために用いられるといいと思った。
- スキル1はCTの体系的なしかたとしてきけてよかったです。
- スキル2は普段からしているつもりでしたが、名前を初めて知りました。"
- 考え方などわかってとても良かったです。ただし具体的に使うとなるともう少し時間が要ります。日常生活で練習したいと思います。
- トイレに行っていてあまりよく聞けなかったのが残念でした。
- 今後、物事を考える際の参考にしていきたいと思います。
- 2ともディスカッションでは、一方の意見への賛同が集中してしまった。
- 同左（すぐに理解することが難しかったが、2つの課題の比較をする際のポイントがよくわかった。）
- スキル1については「実際に存在しない関係性を誤って見出す」例も知りたかった。
- スキル2についてはもっともな話だと感じた。

**科学技術に関わる課題を使ったクリティカルシンキングはうまくいっていると思いますか？**

- わかりません。でも面白かったです。
- クリティカルシンキング自体はうまくいっていると思うが、スキル1やスキル2との結

びつきが弱いと感じた。スキル1、2を紹介しているのであるから、それをCTでうまく活用できるとよいと思う。また、CT自体の説明（どうやるべきか）がもう少しあるとよいのではないか。

- 科学に関わる問題では、それが正しいか否かを重くみて感情的評価が入り込みにくいのでクリティカルシンキングがやりやすい。
- 実際にありそうな例を扱うことで取り組みやすかったように思う。
- うまい話（課題文1）の後に、それもさとするような話（スキル2）を読むと、どうしてもCTによるものが正しく感じてしまいそうです。しかもCTをされながらも耳に良い話はどことなく信じたいと私は思います。
- まだまだ浸透はしていないので、うまくはっていないと思われる。しかしクリティカルシンキングは無意識のうちに行っている面もあるので、うまくいっている面もあるかもしれない。
- 科学者と一般市民がポイントと感じているところが違い、うまくCTできていない部分が多いと思う。コミュニケーションが必要だ。
- クリティカルシンキングによって批判的に考えることはできているが、それによる対立をどう解決するかが難しいと思う。
- あまりそう思わない。科学技術はやはり結果が大切であり、その途中をああだこうだ言い合うのはただの机上の空想に近い気がした。しかし途中であっても対策をとる必要な場合はあると思うので、使いやすいようにする必要がある。
- あまりうまくいっているとはいえない。
- 適切な議論の場所がない気がします。もう少しそういう場を色々設定できるとありがたいと思います。
- うまくいっていると思う。だが直観に頼ることが大きい。
- 若干バックグラウンドを知っている話なので、読みやすいというメリットと、それゆえに意見にバイアスがかかりやすくなると思ったので、参加者が知らなさそうな短い文のものを課題にしたほうがよいのではないかと思います。
- うまくいけばいいと思います。
- 客観性の求められる科学技術に **critical thinking** をどう適用するのか難しかったです。
- 方法は理解できた。
- 実験的な印象を受けたので、うまくいっているかわかりませんが、反復することで身につく内容かと思いました。ドリルとかあるといいかも。
- クリティカルシンキングについては科学技術以外の一般的なもののほうが、より課題文の論理・前提条件などが認識しやすく、それに対する批評もしやすいと感じた。

### セミナーの良かったところ

- 題材が取り組みやすく、講師の方の説明もわかりやすかった。
- 課題を演習しながらであったので、理解は深まりやすいと思う。

- ・個人的に自分の専門（物理学）以外での議論は初めてだったので、他人の考えに沿いながら文章を読み、自分なりの解釈を心の中で整えることの大変さ、他人なりの解釈を聴くおもしろさを知ることができました。
- ・個人で考え、また他人の意見を聴く機会が同時にある点
- ・グループディスカッションで理解を深め合えた。教材がわかりやすかった。
- ・クリティカルシンキングというものがあることを知れた。
- ・軽くディスカッションできてよかった。
- ・途中参加できた。
- ・やはり課題文の配置かと思う。
- ・考えるのによい
- ・ディスカッションの中で、一つの文章のさまざまな切り口が見えた点。
- ・Group discussion was good!
- ・グループディスカッションや演習問題を通して具体的に教えられたことがよかったです。
- ・ディスカッションがあるのは楽しめるところなんじゃないかと。
- ・ディスカッションを通して、他の人の物の見方、価値観を学ぶことができたことと、自分の読解力について把握することができたことです。
- ・自分の考えを客観的にとらえる体験をしたことは新鮮であった。
- ・論文を考える時、ディスカッションをする時の解の導き方について知りたかったので、良いきっかけとなった。
- ・ディスカッション

### セミナーの改善点

- ・ややかけ足だったので、時間をもう少し延ばしてはどうか。またセミナーがあまり周知できていないと思う。
- ・時間が短いセミナーでこのテーマを扱う場合、課題文は1つにしぼって議論するほうがよいかもしれません。
- ・abstract が事前に欲しい。
- ・ディスカッションがあるとは知らない上に、（個人的に）難しい文章を短時間で読んだので、ディスカッションの時に全然良い自分の意見が言えませんでした。なので、できれば事前に文章を読めるようにしてほしいです。
- ・議論の時間が短いように感じたので、もう少し余裕があるとよい。
- ・時間が短かった。先生の話が少し聞き取りづらかった。
- ・時間が足りなかったです。
- ・話が少し長くて、眠くなった。
- ・もう少し遅い時間にやってほしい。
- ・課題文1を書いた人の立場を明らかにした段階で講師の立場が明らかになるので、立場を明らかにするのか考える上で、少し慎重になるべきだと思う。被験者というのと、何を

させられるんだろうと不安になるので、不安を与えない配慮が必要となる。課題文4について、どの意味で説得力があるように話されているか、実例をあげるべきかと思った。やはり時間不足な感は否めない。

- 内容が多すぎる。もしくは時間を長くするべき。
- figures, graphs…in PPT
- もう少し時間が長かったらよいです。
- 机の配置、グループの前の人が大変そうだった。時間が足りない。
- もう少し読む時間と考える時間がほしいです。
- まとめ方、CTが研究・社会でどう役に立つか、きれいな“オチ”があるとよいと思う。
- もう少し内容を単純に変化をつけてほしいです。
- 時間が足りない。もう少し議論したかったし、講義も聞きたかった。

### 自由記述

- 有益な企画だと思う。今後いろいろな機会を設けてほしい。
- もっと難しい内容でいいと思う。
- 自分が今後書く文章・論文にもこの考えを生かしたいと思います。
- まだまだクリティカルシンキングという単語は知らない人が多いので、重要性についても宣伝していただきたい。
- 今後参考にしたい考えがたくさん含まれていた。面白かった。
- クリティカルシンキングに興味はあるが、やはり使い方がまだ難しい。
- 文系の人間なのですが、個人的に学部の頃から科学技術（社会）論をとっていたので、興味はあります。今回理学部の人たちが多いセミナーで、とても有意義だったと思います。
- 実はこの課題文3、4を授業で（類似の形で）取り上げたことがあり、あまり意図が上手く伝わらずに困ったことがあった。「理学部相手に」「経済学部相手に」「法学部相手に」で、少しずつ変えた対処法がわかると非常にありがたかったと思った。

## ○研究評価の現状

—研究者として知っておくべきこと、研究者コミュニティとして考えていくべきこと—

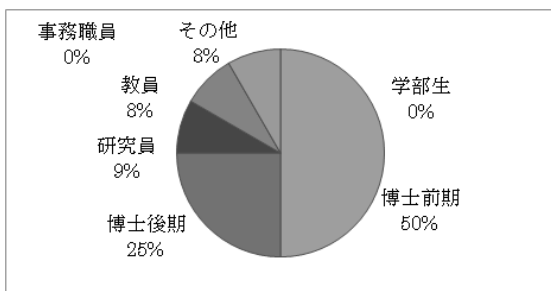
日 時：11月14日[月] 15:00-17:00

場 所：ES 総合館 034 講義室

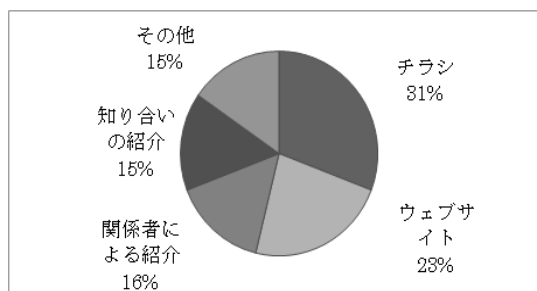
講 師：林隆之（大学評価・学位授与機構）

受講人数：22名（アンケート回答13名）

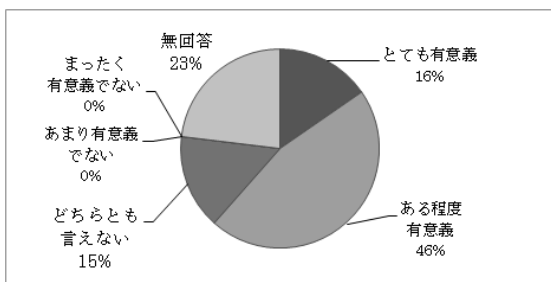
### 所属



### セミナーを知ったきっかけ



### セミナーは有意義でしたか？



### セミナーで印象に残ったこと

- ・「評価によって研究活動が左右される」ということがとても印象的でした。科学の発展のためには必要な”評価”だけれども、評価の方法によっては、研究の質が軽んじられてしまう危険もあるのかと思いました。”研究者・科学者の活動を評価する手法”の妥当性などを、どう評価すればよいのか！？
- ・Ⅲ. 評価による指標の内容—指標のジャッジの危うさを知る。ディスカッション—各々の経験を聞くことができてよかった。
- ・研究評価とは何か、どういう評価の基準があるか、という話が印象に残った。若手研究者は研究歴が浅いゆえに、研究評価が短期的なものとなっているのではないかと感じた。論文がすぐに出ない研究課題には取り組めないのではないかと。
- ・評価の実際
- ・今まで、「研究評価」について、歴史～現状～課題など系統だてて知る機会がなかったので、良かった。講義の内容等わかりやすかった。グループで話し合い、他のグループの発表を聞くことで、他の研究者（院生）の話が聞けて面白かった。

- ・研究評価について、いくつも（多面的な）評価あること、評価に耐えうる研究が必要。
- 2.評価尺度として一定のものがないなかでの評価に意義があるのか疑問。
- 3.評価されることは、大事なことだと思ったが、金銭に関わる研究（科研費等）の場合で結果をありのまま表現することが難しいような結果が出た場合などは、バイアスがかかった結果に誘導される可能性もあるのでは。
- 4.今後の評価システム自体の評価が知りたいと思った。
- 5.建設的な批判の場。
- ・研究評価の現状としては、まだ国としても右往左往している感じがしました。
- ・良いと思います。
- ・議論をさせられるとは思わなかったが、なかなか良かった。
- ・研究評価の歴史や全体像について学ぶことができた。

### セミナーの改善点

- ・セミナー企画の公示にあたり、もう少し、具体的な内容を提示して下さると参加するの  
かどうかが決めやすい。今回のテーマ、サブテーマは私にとってやや抽象的でした。
- ・定刻どおりに始めるようにする。
- ・人数に対して、会場が広すぎるように思います。人数にあわせた少し小さい講義室が良かったのではないのでしょうか。
- ・宣伝が足りない気がする。

### 自由記述

- ・日本学術会議で、発言する力を持つ方々は、もっと若手研究者含む研究生の生の声を集めたいとPRしたら良い意見が集まるのではないかと思いました。
- ・参加者が少ないと感じた。
- ・院生として有意義な学びが出来た。ありがとうございました。
- ・教員の自己評価は自分に都合の良いように書きそうである。
- ・良いと思います。
- ・ピア・レビューでは「学際領域の評価が弱点」というので終わってしまったのが残念で、その先を知りたかった。



○研究公正入門—研究不正に巻き込まれないために—

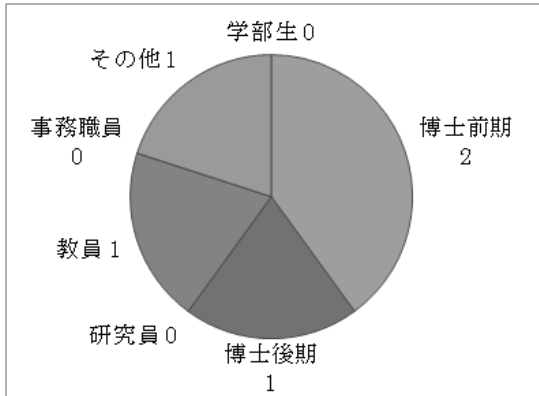
日 時：11月25日[金] 15:30-17:30

場 所：ES 総合館 034 講義室

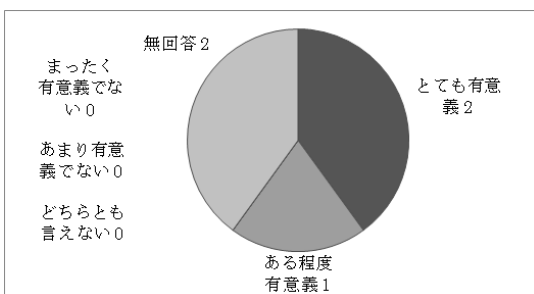
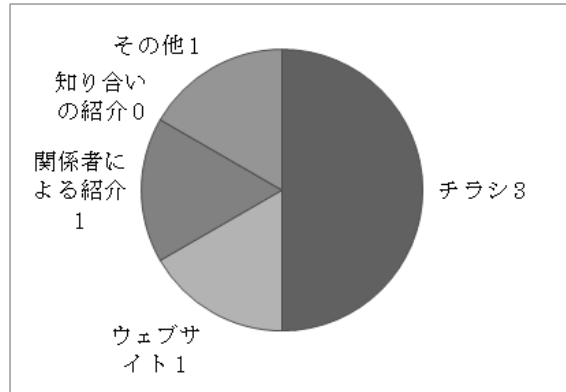
講 師：大須賀壮（理化学研究所）

受講人数：7名（アンケート回答5名）

所属



セミナーを知ったきっかけ



セミナーは有意義でしたか？

セミナーで印象に残ったこと

- ・「倫理教育の必要性」が研究不正対応策の課題：「責任ある研究」の実現を目指して (No.36) の図がナルホドと思いました。研究不正をしない、させないためにはどんな対応ができるのか考え続けたいです。
- ・シェーンの研究不正行為：日本において2004年～数々の研究不正事件があったこと。
- ・研究不正に「巻き込まれない」「巻き込ませない」：研究は世のため、人のために行うものと教えられてきたゆえに、厳しい苦しい研究を達成出来るものと思っていた。あらためて「研究不正」は、起きることを想定して、その上で巻き込まれたり、巻き込ませたりしてはならないと感じた。
- ・"FFP"について系統立てて話があったので理解しやすかった。"研究ノート"の意義や役割について知らなかったことが多く、もっと聞くことができれば良かったと思う。
- ・研究不正の調査、報告、その後のケーススタディを含めて紹介していただき、これからの対応に役だった。

### セミナーの改善点

- ・ 5時間分の資料を全て、講義を受けたかったです。
- ・ 後半の話も具体的に聞きたかった。
- ・ 前回と今回セミナーに参加しました。大変内容の濃い、良いセミナーだと感じています。しかし参加者が講師の先生に申し訳ないほど少ないです。大変残念なことと思います。PRが少ない為と思われます。学生掲示板でそのつどPRされたら、もっと多くの学生が参加出来るのではないのでしょうか。

### 自由記述

- ・ 「真実を歴史が証明する」ということから、研究者は、その行動の影響が過去にも未来にも及ぶのだということを考えないといけないと思いました。
- ・ 不正に巻き込まれないようにするためにまず不正とは何かを知ることが第一歩だということがわかりました。不正とは倫理的な個人の意識の問題と思っていたが、なぜ起きるのか発生機構を考えると必ずしも個人的なことだけではないとわかりました。
- ・ 授業では、学べないセミナーをこれからもご企画ください。
- ・ こうしたセミナーは、大学院入学時に学生向けに開催されると大きな効果が出るように思います。

○人の力を引き出す技法—研究者のためのコーチング入門—

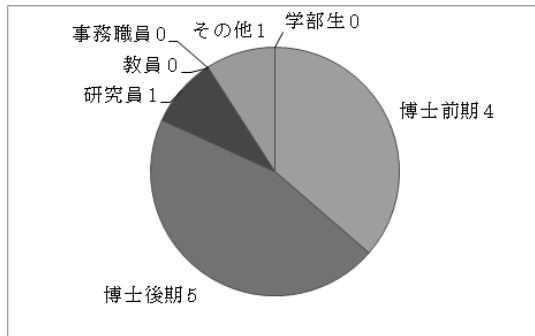
日 時：12月6日[火] 16:30-18:30

場 所：理学南館1階セミナー室

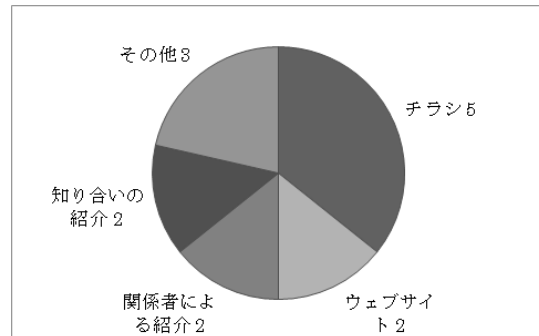
講 師：中井俊樹（名古屋大学）

受講人数：12名（アンケート回答11名）

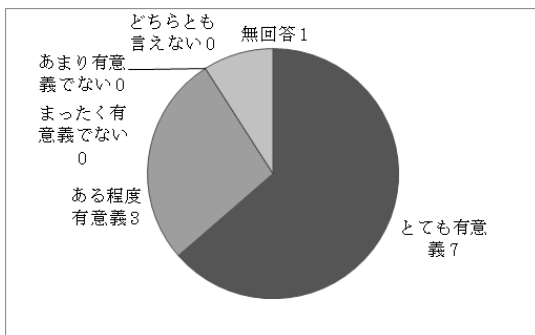
所属



セミナーを知ったきっかけ



セミナーは有意義でしたか？



セミナーで印象に残ったこと

- ・具体的なスキルの紹介があり、実践的でとてもよかった。説明もわかりやすかった。
- ・人の力を引き出すのは身近なところから出来る。まずIメッセージ！
- ・自然にやるのは、難しそうと思った。
- ・質問のスキル2のように、3つの軸を意識することで、会話の雰囲気を変えられるということを学んだこと。
- ・承認のスキルでIメッセージ（Weメッセージ）がなかなか出てこなかったこと。日頃言っていないのではないかと反省しました。
- ・COACHの本来の意味。
- ・全体的にディスカッション形式をとっていたため、他人の意見がとても参考になりました。
- ・スキル使用について「急がば回れ」という考え方。
- ・大変面白くて、有意義な講義でした。

- ・印象に残ったのは、①「急がば回れ」→いつも結論だけほしいタイプなのですが、ゆっくり話を聞くことの大切さを感じました。②「人の見方はさまざま」→人を見るとき自分の価値観で良い悪い判断すると間違える可能性が大きい。肯定の立場から人を見るとリフレーミングにつながる気がしました。
- ・コーチの意味がその人の望むところまで送り届けること。行為をうまく体現した言葉だと思う。日常的な教育活動の重要性。
- ・自分は割と他人と比べるとIメッセージとほめ言葉のボキャブラリーが豊富。
- ・質問スキル、使い方→意識して質問できるようになると良いかも。オープンQ→答えにつまる→クローズドQなど？
- ・事例分析、討論はためになる。
- ・「コーチング」に様々なスキルや枠組みがあるというのが参考になりました。日常で、意識化して、実践することが重要だと感じました。
- ・日常的によく起こることを対応することができるものを学んだので、さっそく自然化をしたい。この講義はかなり役立つと思います。

#### セミナーの改善点

- ・今回のセミナーは、他の回と比べてもとてもよかったので、大きな改善点はないと思う。
- ・演劇を通じて、実際にIメッセージ、スキルを練習してみる。
- ・多少、質問が漠然としていて、答えにくい気もした。
- ・間延びしている時間がある。
- ・何気なく話していたり、無意識に聞いていたことを意識的に振り返るようにする。
- ・自分の話し方のクセに気づくように意識する。
- ・コーチングを理解するには、一朝一夕でないことが改めてわかりました。
- ・今回は「入門」だったので、「アドバンス」もあるとよいと思いました。
- ・PRをいっぱいして下さい。
- ・話もわかりやすく、参加型でもあるので、面白く、特にありません。
- ・部屋が寒い→あたたかく！

#### 自由記述

- ・今後も同様のセミナーを企画してほしい。
- ・ありがとうございました。
- ・自分を振り返るいい機会になった。これを生かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・明日から活用したいと思います。「今、コーチング中だ」と意識しながら、コーチングできるようになりたいです。「おとな」に教える(?)ということの難しさと面白さを再認識できました。

## 単発セミナー

### ○サイエンスイラストレーション入門—オブザベーション・ドローイング—

あいちサイエンスコミュニケーション・サマースクール 2011 特別プログラム

日 時：8月24日[水] 10:00-17:00, 25日[水] 10:00-17:00, 26日[水] 10:00-17:00

場 所：全学教育棟 SIS4 講義室+SIS ラボ

対 象：広く一般（大学院レベルの内容のため、バックボーンレベルを考慮して受講者を決定）

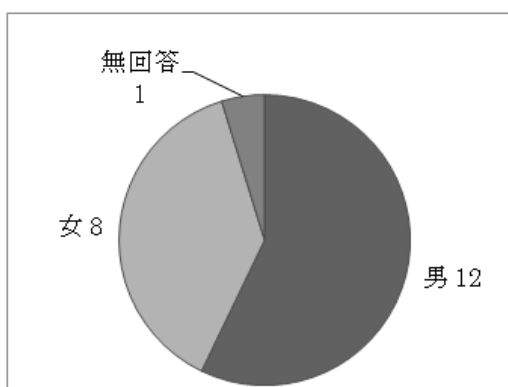
定 員：20名程度

講 師：David Rini（ジョンズ・ホプキンス大学）

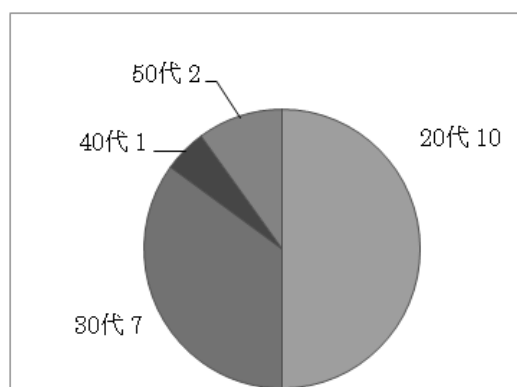
ファシリテーター：奈良島知行（Tane+1）

主 催：サイエンスコミュニケーション推進室+高等教育研究センター+博物館

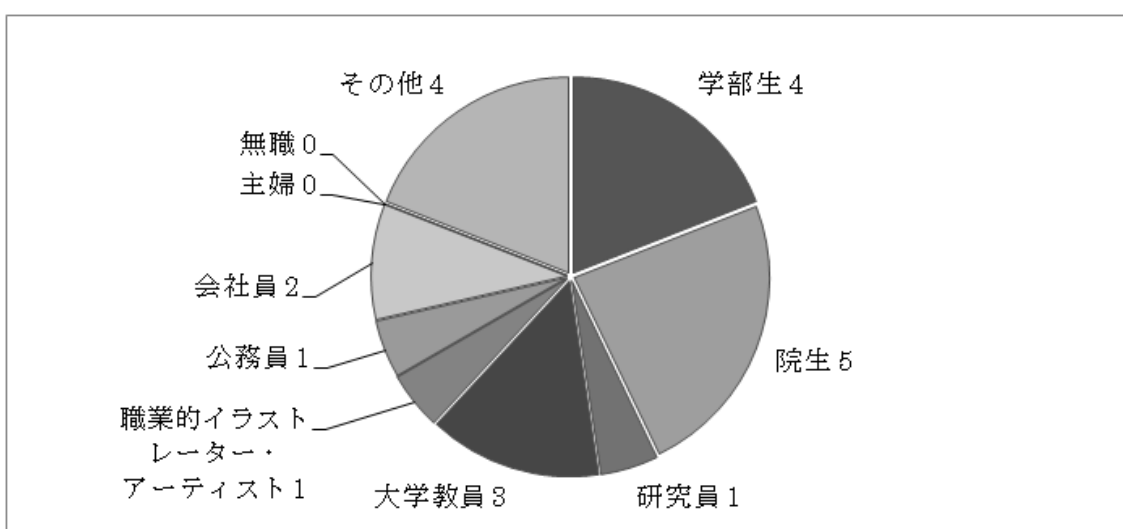
#### 受講者(性別)



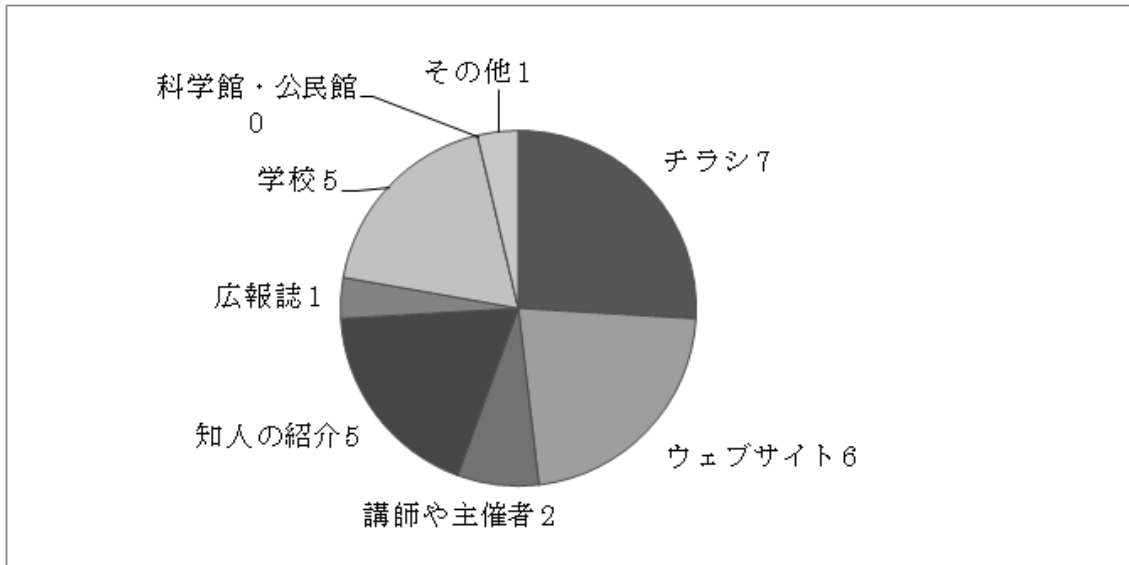
#### 受講者(年齢)



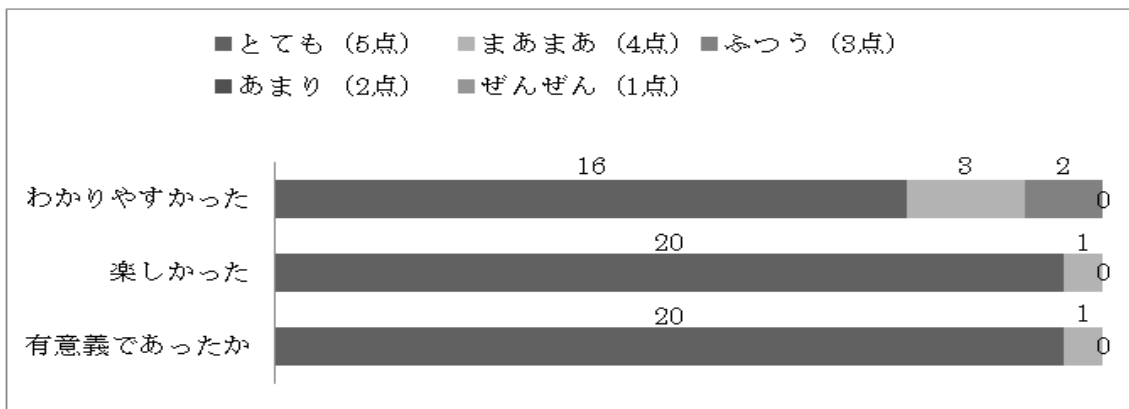
#### 受講者(職業)



### セミナーを知ったきっかけ



### 3日間を通しての感想



### スクールの良かったところ

- ・絵の描き方からソフトの使い方まで、幅広く基本的なことが学べたので、今後のために大変参考になりました。また、サイエンスイラストレーションが普通のイラストとどう異なるのか、明確に話されていたので、わかりやすかったです。
- ・サイエンス・イラストレーションという日本では珍しいテーマであったこと
- ・サイエンスイラストレーションの現場でどのような仕事が行われているか知ることができ、良かったです。自分の描く絵についても考え直す良い機会になりました。
- ・段取りの良さ、丁寧さ
- ・とことん見て！ とことん描く！ 全力を傾けて描く！ という経験ができてよかったです。英語の講義に不安がありましたが、Rini 先生がゆっくり簡潔に話してくださって、奈良島さんやスタッフのみなさんが訳を添えていただけて安心しました。何より受講料無料なのが（これだけの内容なのに！）、信じられません。うれしいです。
- ・detail を観察する目、全体を見る目が養われた。一人でイラスト練習をしていたので、たくさんの方の共通の思考の人と出会えたことが、私にとって大変うれしかったです。講師の

先生がたが、常にモチベーションをアップさせるように気をつかい、言葉をかけていた  
だいたこと。Photoshop のつかい方を教えていただいたこと。

- ・ 色々な分野の人がいたこと
- ・ 実際に作業を進めながらできたので、やりかたが大まかにでもわかった
- ・ 実践的なところ、モチベーションが高いところ（受講側）
- ・ 実際に作業しながら受けられたこと。同じ対象を皆で書くことで、違いがわかりやすか  
った。
- ・ 実技と細かい指導
- ・ 講師の方々が巡回して直接指導して下さったこと
- ・ 観察眼が養えました。イラストレーションの作成スキルが向上した。サイエンスイラス  
トの概念が理解できた。
- ・ 初心者に対して、たくさんの先生がたが丁寧に教えてくださったところ。
- ・ 講義と実技のバランスが良い。他の参加者の作業を見ることができる。講師陣の質の高  
さ。
- ・ 実際に手を動かして作業できたところ
- ・ サイエンスイラストレーションについて知ることができた。絵を書くことができた。書  
き方を知ることができた。PC を使った書き方を知ることができた。
- ・ 少人数制で、マン to マンのシステム。すべての道具を用意していただいたこと。参加者  
が多様であったこと。
- ・ 大人の人たちが美術(イラスト)に興味をもってくれたこと。芸大が主催していないこと。
- ・ デッサンの基礎から学んで陰影のつけ方、仕上げまでを3日間で行えたので、作業の流  
れが大変良く理解できました。

### スクールの改善点

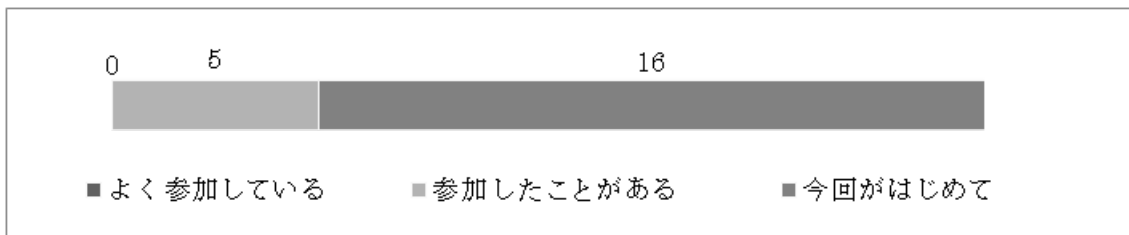
- ・ やはり、家に持って帰って作業できたほうが良かったと思います。
- ・ スタッフと講師間の疎通が一部不全であったこと
- ・ スケッチするものを、小さいものにするか、1日増やしたほうが良いと思った。
- ・ 他の受講者の方々とお話できる機会がもう少しいただければと思いました。
- ・ ほとんど満足しています。できれば年2回（3回、4回、…more!）ひらいていただき  
たいです。
- ・ オーガニゼーション、時間が短かった
- ・ デッサンなどの自分の作品がほしい点。デッサン→Photoshop→イラストレーターなどの  
大まかな作業手順を示してほしいと思いました。
- ・ 先生の英語（特に技術的な部分や専門用語）が説明があるとよかったと思う。フォトシ  
ョップ、イラレの説明がもう少しあるともっとよかった。
- ・ 時間的にタイトだったので、もう少し余裕があるといいと思います。
- ・ カラーの講座があればまた受けたいです。

- ・プリンタやスキャナをより質の良いものを使えるように
- ・より定期的にできたらうれしいです！
- ・一日の作業時間をもっと長くすることで、日程を短くできると思います。社会人が平日に3日仕事を休むのは辛いです。
- ・よいきっかけになりました。この後どのように長期間、時間をかけて学習をさらに深めるのか…。難しいですが、通信教育（e-mail、web 教育）が可？
- ・observation だけでなく、空想の世界の絵の書き方なども知りたい。参加者どうしの交流を先にして、話しながらできたらよかったです
- ・とにかく続くことが大事だと思います。
- ・ぜひ続けてください。継続することが大事だと思います。

### 自由記述

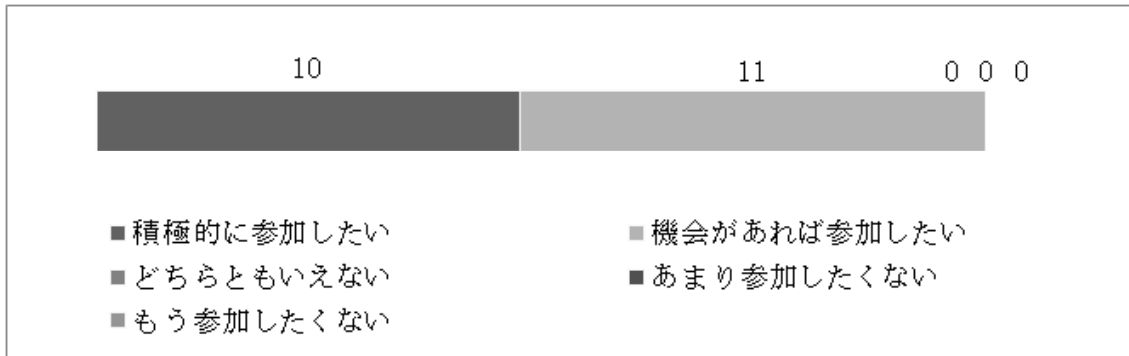
- ・3日間楽しかったです。ありがとうございました！
- ・3日間ありがとうございました。
- ・とても勉強になりました。特に label や leading line のつけ方は、今後の発表や修論にとっても役立ちそうと思わぬ収穫でした。描くことがもっと好きになりました。ありがとうございました。
- ・simple な技法とわかりやすい講義で非常に良かったと思います。
- ・大変楽しく有意義な3日間でした。夢のようなサマースクールをありがとうございました。
- ・貴重な体験ができ、非常に勉強になりました。また、楽しかったです。スタッフの皆様感謝いたします。
- ・とても楽しくためになる有意義なサマースクールでした。本当にありがとうございました！
- ・とても有意義な時間でした！ どうもありがとうございました。
- ・丁寧に教えていただきありがとうございました。仕事で使えるように頑張ります。
- ・楽しませていただきました。ありがとう。
- ・10年続いたらいいと思う。そして次の企画が生まれたらもっと面白くなりそうです。
- ・今後も同様の講座があれば、ぜひ参加したいです。

### 以前にもこのような活動に参加したことはありますか

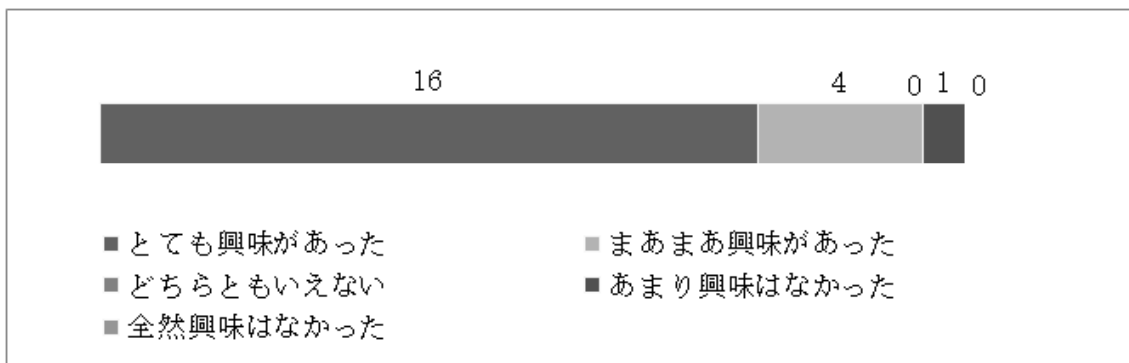




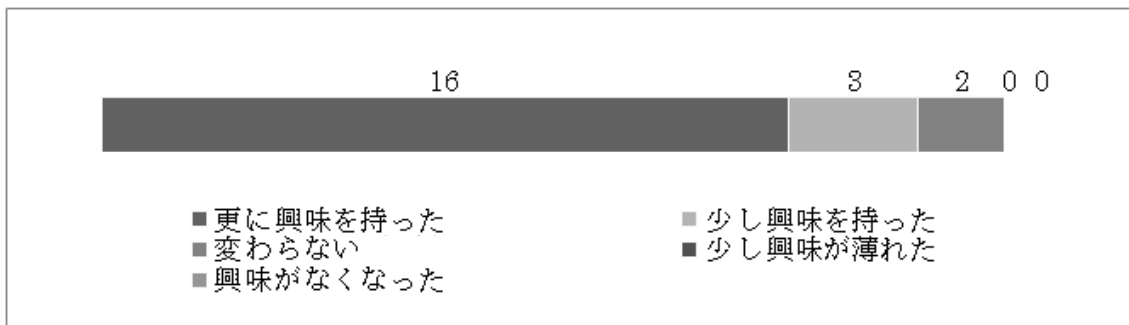
また参加したいと思いますか



今まで自然や科学・技術に興味はありましたか



今日参加して自然や科学・技術への興味が高まりましたか



○研究発表資料をつくる ポスター・スライドづくりの理論と実践

日時：9月8日[木] 10:00-12:00 [理論編], 13:00-15:30[実践編]

場所：全学教育棟 SIS3 講義室 + SIS ラボ

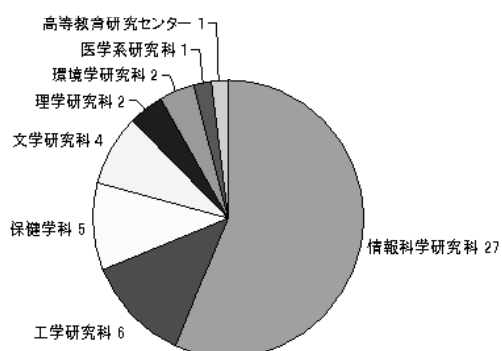
対象：本学に在籍する大学院学生または教職員等

定員：[実践編]のみ 25 名（理論編も受講のうえ）

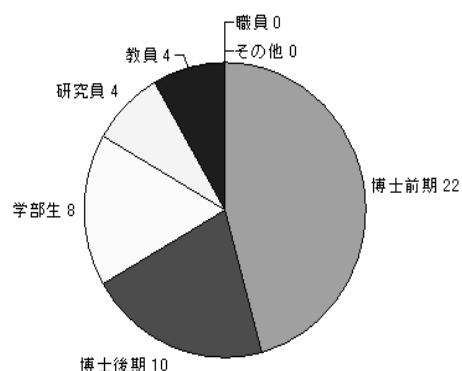
講師：遠藤潤一（広島国際学院大学情報デザイン学部）

主催：高等教育研究センター + 情報科学研究科

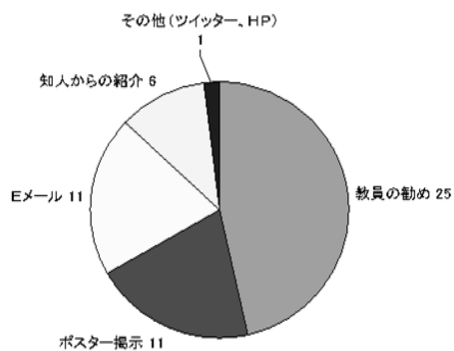
所属



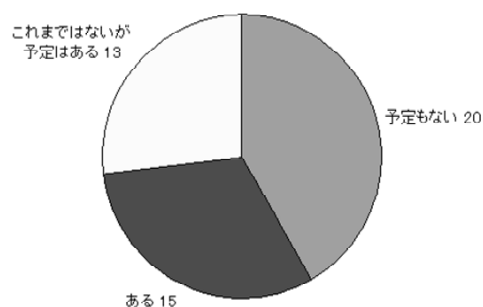
職位



セミナーを知ったきっかけ



ポスター発表経験の有無



ポスター発表経験数

回数	1回	2回	3回	4回	5回	10回	15回
人数	6	1	1	3	1	1	1

全体としていかがでしたか

満足	37
やや満足	10
どちらとも言えない	1

## 印象に残ったこと

- ・中央揃え（禁）ということ。
- ・ミニワークショップ：実際に自分で考えてみたこと・見本があったこと：具体的な改善方法がわかった。
- ・色使いの話が非常に勉強になりました。写真の見せ方も今後気をつけようと思います。デザインの原則についてはなんとなく知っていたものの、実際に改善例を見せていただくと直感的に理解することが出来ました。
- ・デザインは感性・センスがすべてではないこと。
- ・気をつけること、注意することなど、重点をおくところとそうでないところのバランスが重要だという点。
- ・スライドの作り方の勉強になりました。
- ・デザインに原則があるということ。
- ・デザインの原則について、今後とも実践しようと思った。
- ・フォントについての知識が増えたことが良かった。
- ・文字サイズや行間の目安・写真の全面表示・線のない表。
- ・スライドやポスター作成におけるルールや改善方法を学ぶことができました。
- ・デザインの原則がわかりやすかった。
- ・スライドやポスター発表のコツ（4つの原則）。
- ・自分はプレゼンで配色が苦手だったが、そのあたりの指針がためになった。
- ・今までルール上当たり前だと思ってやっていたことが原則に反することだったり、ハッとさせられることがたくさん詰め込まれた講義でした。
- ・デザインの原則・4種類を意識する。
- ・実際に悪い例・改善例があったので、その差がわかりやすく、印象に残った。
- ・実際の見せ方（黒背景、全画面）。
- ・資料が適切であること。
- ・内容のバランスがよかったこと。
- ・シンプルなデザインで見やすいものの例が多く出されていてわかりやすかった。
- ・表現の原則・写真を大きく見せる技。
- ・何気なく作っていたスライドやポスターも、工夫することで伝わりやすさも異なること。
- ・資料の立派さ。
- ・「4つの大原則（整列、グループ、コントラスト、統一）というのがあればデザインが習得できる」というのが、センスがないとあきらめていた私にとって、とても印象に残りました。
- ・文字のフォント、全体の配置など参考になりました。次の発表で実践してみます。
- ・デザインはセンスによらなくても、知識を身につけることで改善することができるということ。
- ・色の使い方などの基本を気をつけなければいけないなと感じた。今まで試行錯誤で作っ

ていたなので、参考になりました。

- ・プレゼン作成の際に、自分がやっていたものが悪い例であったりして、基礎的なことが学べたこと。
- ・今回の授業のスライド自体がとてもわかりやすく、実用例となった。とてもわかりやすかったです。
- ・デザインはセンスではないという点。
- ・デザインの原則は印象的である。
- ・デザインの原則を意識するだけで、見やすさが格段に変わるということがわかり、よかったです。
- ・色の使い方について（ベース・サブ・アクセント）
- ・レイアウトよりも書体や大きさの話がとても参考になりました。
- ・効果をはっきりと見え、参考にしてみたいと思った。
- ・色のはなし・パワーポイントの機能の紹介・視線の有意性。
- ・他の方の作った内容を添削する作業。
- ・文字に色をつけないほうがいいということが意外だった。
- ・ポスター制作、上部への視線。
- ・アイキャッチについて、強調の仕方の参考になりました。
- ・ミニワークショップ ・定時に終わったこと。
- ・実際にプリントアウトしたものを見たこと（はじめて作ったので）。
- ・コントラスト効果 ・ガイドの使い方。
- ・実際に作ろうとすると、午前の内容を反映させるのは多少難しかったが、午後の内容を反映させてみると、美しいポスターに見えた。
- ・写真を大きくする

### セミナーの改善点

- ・配布物はあらかじめ配っておいてよいと思う。
- ・大満足なので今は思いつきません。
- ・セミナーの後半は急いでいる印象でした。行間のところをゆっくり聞きたかったです。
- ・デザインのデータを配布してもらえたらよかった。
- ・スライドマスタなど、手早くそろえる方法（手順）などを示していただけるとよかった。  
（グラフや表を見やすく表示するための加工にいつも時間がかかるので）
- ・時間が長めだったので、途中で休憩を入れてもらえればよかったと思います。
- ・2時間だと、途中で集中力が切れてしまうことがあるので、途中2～3分の休憩をいただきたかった。
- ・具体的な良いスライドの例をたくさん見たかった。
- ・自分をもっと準備してくればよかった。
- ・Macを使って、セミナーを行うことを知らせてほしかった。

## 自由記述

- ・この時期（8-9月）だったので、参加がしやすかった。
- ・とてもよいセミナーでした。これからもこういう機会を企画してほしいと思います。
- ・これまでスライドやポスター制作はセンスに頼っていたが、今回知識としてのデザインを学べたのでこれから積極的に使っていきたいと思います。
- ・参考になりました。
- ・日頃疑問に思っていたスライドの技術を説明してもらえて、ためになった。
- ・具体例を見ていて、資料の内容がわかりやすくなりました。
- ・センスだけでなく知識があれば、見やすいスライドやポスターを作ることができるので、工夫してみようと思いました。とても興味深かったです。
- ・ポスター作成のイメージができ、今後活かしていきたいと思います。
- ・漠然とスライドの見やすさ見にくさは考えて作っていたけど、具体的に原則やテクニックをご提示していただいたおかげで、何が良くて何が悪いかというのがはっきりして、とても参考になりました。
- ・言われてみれば基本的なことばかりだが、こうして改めて確認することによって意識を高めることができた。
- ・スライド改善案について：
  - ・p3の例は下にかかっているのでは？
  - ・p4のメリットデメリット2行目と3行目に行間を取っていることから、3行目はある種結論では？
- ・プレゼンのルールについて、あらためてその効果や意味を再確認できた。
- ・実際の例が示されており、大変わかりやすかったです。
- ・美しく見やすいスライドの作り方が学べてよかったです。
- ・とても参考になりました。
- ・あまり意識的にプレゼンのデザインについて考えたことがなかったので、これまでもできていたこと、今後改めて考えていくべきところが認識できたのでよかったです。
- ・基礎的なことをわかりやすく知ることができて、とてもよかったです。話の切れ目（章立て）のスライドのデザインが大胆で分かりやすく、スライド作りの参考にしようと思いました。
- ・とてもためになりました。ありがとうございました。
- ・大変勉強になった。ありがとうございます。
- ・実践的でわかりやすくよかったです。
- ・スライド・ポスター作りの基礎がわかってよかった。
- ・本日は大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・苦手な分野ですが、基本事項までおさえてくださっていて、わかりやすかったです。
- ・初めて言われて気づいたところがあったので、参考になりました。ありがとうございました。

- ・気をつける点や、人がどのように自分の発表を見ているかなど教えていただけてよかったです。
- ・満足です。おもしろかった。
- ・普段スライドを作る際に直感で作っていた部分を、今後しっかりと意識して作れるようになったと思います。
- ・思ったより簡単にできて、今後とても役に立つ内容だと思いました。
- ・とても参考になりました。ありがとうございました。
- ・ポスターの準備が不十分なのに、午後の部に参加して申し訳なかった。

#### 院生研修全般について

- ・スピーチの講習会があったら参加してみたいです。
- ・プレゼン等の話術。相手に印象づける話し方など。
- ・レポート・論文等のデザインに関する講習があれば、ぜひ参加したい。
- ・デザインだけでなく、研究をどのようにしてスライドにすればよいかを知る研修があればうれしい。
- ・また機会があったら参加したいです。
- ・知人から聞くまで、このようなことが開催されているということを知らなかった。もっと広報していいと思う。
- ・学部生にも対象枠を広げて、もっと広報に力を入れてほしいです。
- ・文章、論文投稿のルールなどに関するセミナーなどがあると役立ちそうである。
- ・ポスターの作り方だけでなく、発表のノウハウも教えてほしいです。
- ・論文作成でも同様の研修があるとありがたいです。
- ・どんどんこうした研修を実施してほしい。2～3回にしながら、実際にポスター作成、発表練習までできたらとても勉強になるかと思います。

○学術広報の世界へようこそ—広報誌制作教室—

日 時：9月12日[月] 13:10-16:50 +懇親会

場 所：理学南館1階セミナー室

対 象：若手教職員， 研究員， 大学院生， 学部生等

定 員：30名

講 師：小川明生 (t.m.c.)， 久野高義 (コミュニケ)， 戸田山和久 (情報科学研究科)，  
福井康雄 (理学研究科)

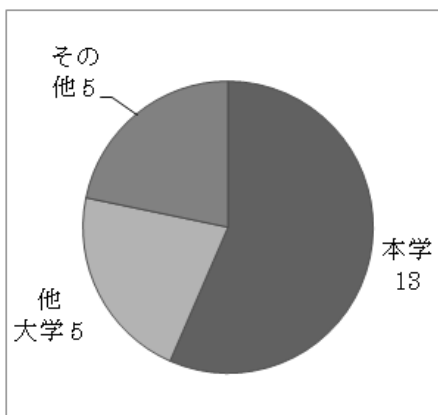
モデレーター：齋藤芳子 (高等教育研究センター)

主 催：「科学研究を伝える広報誌制作手法の追究」 (科研 23650506, 代表・福井康雄)

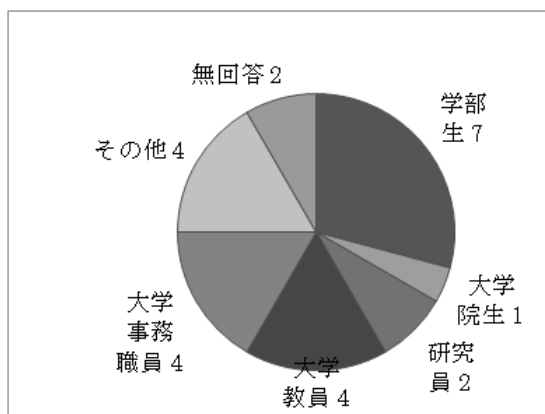
共 催：高等教育研究センター

協 力：理学研究科広報委員会

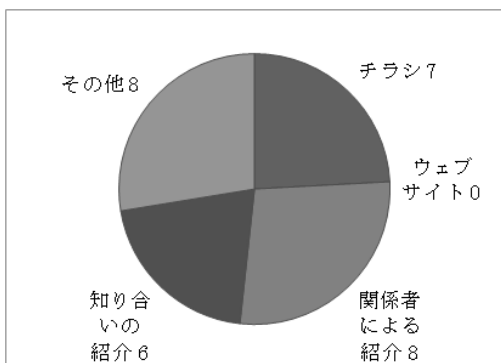
受講者(所属)



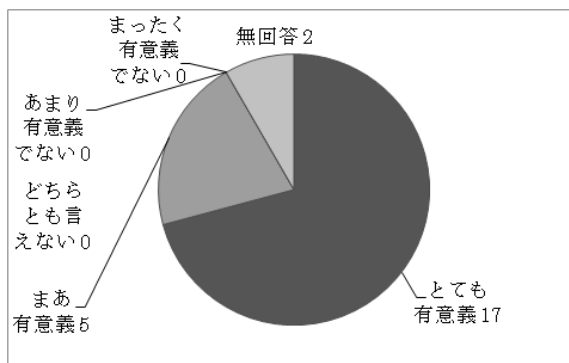
受講者(身分)



セミナーを知ったきっかけ



全体としていかがでしたか



セミナーの良かった点

- ・なるほどと思えることが多かった。
- ・福井先生が平易な言葉で、理学を伝えることのエッセンスを楽しそうに語ってくれたこと。

- ・理 *philosophia* にかける情熱と予算を教えてもらえた点。文章、編集、デザインなどさまざまな面から学べた点。
- ・文章術がワークショップでおもしろかった。また、デザインの話はたくさん例が見れて楽しかった。
- ・内容が多様。具体性もあってわかりやすかった。みなさま丁寧に質問に答えていただき、広がりのある講義でした。
- ・企画、編集、デザイン、個々の深い部分の話が聞け、普段知らない分野が知れて良かった。ちょっとしたヒント！がわかった。
- ・学術的な話と実践的な話が同時に聞けたことがよかった。
- ・ラフでわかりやすいところ。具体例が多く、わかりやすかった。
- ・講師の方々のお話がとても聞きやすく、魅力的でした。
- ・各工程の担当者の考えた聞いたこと
- ・初心者にもわかりやすい内容でした。
- ・エディターやアートディレクターの方など、専門的な方の生のお声が聞けてとてもよかったです。またワークショップを通じて身をもって体験できたことは、印象的でわかりやすかったです。
- ・飾らない言葉で本音のようなものが聞けてとてもおもしろかったです。
- ・広報誌作成に関わった経験はありませんが、定期的送られてくる冊子がどのように生み出されているのかがわかり、興味深かったです。ありがとうございました。「理 *philosophia*」を数冊配布いただいて、視覚的効果の違いが見えて比較できた点がわかりやすかったです。
- ・自分の一番の目的であったデザイン術について、実際の例や効果の説明を含めて、話を聞くことができたところ。広報誌の制作について、本誌を見るだけではわからない流れについて聞くことができたところ。実際のことにつながった直接的な話を聞けたところ。
- ・具体的でわかりやすかった。編集術の奥義の部は仕事の裏側の面の話を伺えたようで興味深かった。
- ・たくさん専門家から非常に有意義な話を聞くことができました。
- ・包括的：編集作業の流れをカバーする講師の陣容、具体的：経験と素材に基づく話、参加できるワーク
- ・理 *philosophia* を知ることができたことです。先生方や参加者の方々と出会えたことです。文章術やデザイン術、企画や編集術、どのお話も大変興味深かったです。
- ・さまざまな職種の方のお話が聞けた。質問も多く聞けた。実際にワークショップを経験できた。あまり経験のないことだったので、新鮮な気持ちで受けられた。
- ・いろいろな職種の方から、多方面の視野でのお話が聞けた。パンフレットなど、たくさん資料をいただいた。
- ・実践的な学術広報に関する話を、作成者の立場から聞くことができ、今までの活動を反省し、改善点が見えてきました。



- ・「学術」という点にこだわり過ぎなかったことだと思います。実際に今日聞いた内容すべてが直接的に役立ってくるということは私の立場上少ないと思いますが、さまざまなシーンに応用が利いてくると感じました。

### セミナーの改善点

- ・対象を明確にしたほうがよいかも。たとえば大学職員を対象にしたら、おもしろそう。学生はどう聞けばよいか少しわかりにくい。
- ・プロフェッサーや企業人ではなく、学内の専門職の方（サイエンスコミュニケーター、技術職員など）がスピーカーになるとよいと思います。今回はそういう人はむしろオーディエンス側だったのではないかと感じました。
- ・とても興味深い内容なので、定員をもっと増やして、多くの方がこのお話を聞けるとよいのではないかと思います。
- ・3人目の先生の話は少し眠くなりました。
- ・内容がとてもよかったので、たくさんの人に告知できるといい。
- ・資料を読めばわかるものの説明は少ないほうがよい。
- ・視点として研究者に足りない点が浮き彫りにできたらよかったかもしれません??
- ・継続的实施
- ・新聞に載っていた開始時間と、実際の開始時間が違ったので、とまどいました。
- ・ありません。強いて言えば、講義の配布資料（完全なものでもなくても）があると、帰宅後に見直すことができます。デザインの場合は難しいかもしれませんが。
- ・配布方法は難しいと先生もおっしゃってましたが、セミナー開催の掲示が広まればよいのかなあと思いました。偶然に掲示に出会いましたので、参加できてうれしかったです！
- ・個人的に、時間を短縮し、回数を増やしてはどうかと思いました。
- ・ワークショップ方式での内容が増えると、さらに魅力的になるかと思いました。
- ・スライドを映す際、もっと電灯を消してもよかったと思いました。特に小川先生のスライドがやや白んで、せっかく素敵なスライドなのにもったいないと思いました。

### 自由記述

- ・今回の参加者はどのような人たちでしょうか？ ずいぶん20~30代くらいの女性が多いですね。彼らは院生、ポスドク、教員？
- ・専門家の方から、具体的なお話を伺うことができ、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・またこういった広報セミナーに参加したいです。
- ・学術的内容を広く一般に門戸を広げて参加できる機会を増やしてほしい。
- ・私自身、「シンプル」な文が書きたいと思い、悩んでいたのですが、今日のお話はとても勉強になりました。
- ・大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・名古屋大学のHPのどこにも広告がなかったみたいです。新聞広報がなければ、この広

報誌制作教室は知りませんでした。

- 新聞に載せていただくと、学外の方が参加しやすくなるので、これからもこのようなすばらしい学びの場の提供、広報をお願いしたいです。
- とても参考になりました。飛行機等のパンフレットなどを、今後違った視点で拝見できそうです。
- またしょっちゅう開催していただきたいです。ありがとうございました。
- 興味のあるテーマだったので参加しました。ありがとうございました。
- すてきな時間をありがとうございました。
- 学術広報という言葉になじみが少ないため、具体的内容が想像しにくかった。
- また参加したいです。
- 予想していた内容以上にさまざまなことを学びました。次回またあれば参加したいと思います。「理 *philosophia*」の存在も知らなかったもので、これからは目を通したいと思います。クレイグスカフェに置いてあるとうれしいです。

## 【資料1】サイエンスイラストレーション入門ポスター

科学を可視化するイラストレーション技法の基礎を学ぶ

あいちサイエンスコミュニケーション・サマースクール 2011

Celebrating 100 Years

TEACHING EXCELLENCE in MEDICAL ILLUSTRATION

ジョンズ・ホプキンス大学医学部  
Art as Applied to Medicine 専攻創設 100周年

# サイエンスイラストレーション入門 ～ オブザベーション・ドローイング～

2011年8月24日(水)～8月26日(金)

名古屋大学(東山キャンパス)内

受講料無料

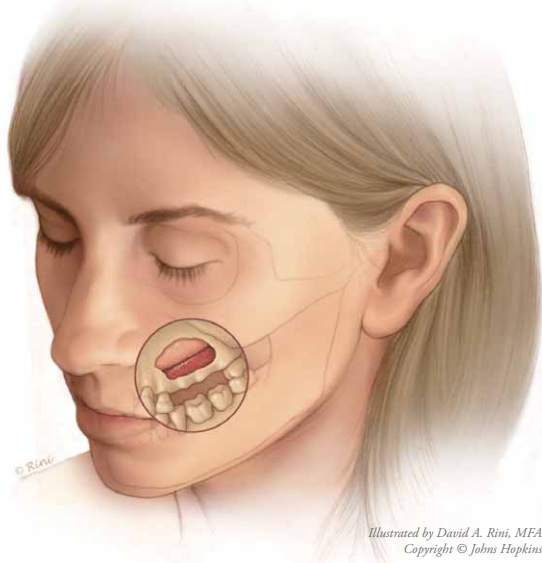
広く一般を対象に20名程度

大学院レベルの初学者を想定していますので、  
バックボーン・レベルを考慮のうえ選考します。

内容: サイエンスイラストレーションの基本技法である「オブザベーション・ドローイング」を学習します。頭蓋骨(標本)をデッサンし、スキャナーでパソコンに取り込んで細部を仕上げます。

期間中に完成しない場合は、電子メール等による追加指導を受けられます。

募集方法: 2011年7月18日(月・祝)から、あいちサイエンスフェスティバルのウェブサイト(<http://aichi-science.jp/>)にて受け付け。8月5日(金)に締め切り、8月8日(月)までに選考結果を電子メールで通知します。



Illustrated by David A. Rini, MFA  
Copyright © Johns Hopkins



講師 David Rini (ジョンズ・ホプキンス大学医学部 Art as Applied Medicine 専攻准教授)

医学・科学イラストレーションのファインアート修士号を1989年にミシガン大学で取得。オハイオ州のメイフィールド神経外科施設(Mayfield Neurological Institute)に神経外科イラストレーション部門を設立したのち、1993年から現職。新技術と伝統的技法を併用。ハンドワークから3DのCG技術までを駆使して作品制作・教育を行う。

講座コーディネーター 奈良島 知行 (サイエンスイラストレーター Tane+1 LLC 代表)

桑沢デザイン研究所を経て、百科事典や図鑑向けのイラストを描く仕事を開始。1977年、東京にイラストレーション・プロダクション「Studio Sloth」を設立。1987年に渡米。ナショナルジオグラフィック、サイエンティフィックアメリカンなどの科学雑誌から広告まで、フリーランスイラストレーターとして数々のプロジェクトに参加。



主催: 名古屋大学サイエンス・コミュニケーション推進室/高等教育研究センター/博物館、ジョンズ・ホプキンス大学 Art as Applied to Medicine 専攻

共催: 名古屋大学 GCOE「システム生命科学の展開: 生命機能の設計」、名古屋大学 GCOE「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」、東北大学 GCOE「脳神経科学を社会へ還元する教育研究拠点」、筑波大学芸術学群、トロント大学バイオメディカル・コミュニケーションズ専攻

協力: Tane+1 LLC、サイエンス・ビジュアルイゼーション研究会、株式会社グエル、(財)日本モンキーセンター

後援: 名古屋アメリカンセンター(依頼予定)

お問い合わせ

名古屋大学サイエンス・コミュニケーション推進室

Phone, 052-747-6527 / Fax, 052-788-6016

E-mail, [illustration@aichi-science.jp](mailto:illustration@aichi-science.jp)



“あいちサイエンスフェスティバル2011”  
ブレ企画

“あいちサイエンスコミュニケーション・  
セミナー”特別プログラム

本企画は JST 地域ネットワーク支援を受けて開催します。

## 【資料2】研究発表資料をつくるポスター

高等教育研究センター・情報科学研究科合同開催  
院生 / 教職員のためのスキルアップセミナー

# 研究発表資料をつくる

## ポスター・スライドづくりの理論と実践

**趣旨** 近頃はポスターやスライドによる研究発表の機会が多くあります。そこで求められる「見てもらえる、なかみが伝わる」ビジュアル表現のスキルは、社会人になってからも広く使えるものです。本セミナーでは、理論と実践の両面から、研究発表ポスター・スライド制作のスキル向上を目指します。基礎からはじめますので、経験の浅い方にも、実践を振り返りたい方にもオススメです。

### 日時と会場

2011年9月8日 [ 木 ]

午前の部 [ 理論編 ] 10:00 - 12:00 SIS3教室 ( 全学教育棟中棟4階 )

午後の部 [ ポスター実践編 ] 13:00 - 15:30 SISスタジオ ( 全学教育棟中棟3階SISラボ内 )

**講師** 遠藤潤一氏 ( 広島国際学院大学情報デザイン学部講師 )

**対象** 午前の部 [ 理論編 ] 本学に在籍する大学院学生または教職員 研究員含む  
午後の部 [ ポスター実践編 ] 本学に在籍する大学院学生または研究員

**参加** 無料

**申込** 午後の部 [ ポスター実践編 ] のみ必要, 9/7 [ 水 ] 締切  
所属, 学年または職名, 氏名, メールアドレスをinfo@cshe.nagoya-u.ac.jpまで送信してください  
定員25名 情報科学研究科枠あり, 希望者多数の場合は後期課程在学学生を優先します  
午後だけの参加は不可. 参加者は作成した ( 作成中の ) ポスターのデータファイルを持参すること

### 内容

#### [ 理論編 ]

発表ポスターについて  
デザインの原則  
個別の要素のデザイン 文字, 段落, 色, グラフや表, 図  
スライド制作の場合

#### [ 実践編 ]

ポスター作成に適したアプリケーションの使い方  
ポスターの改善  
講評

問合せ→ 高等教育研究センター 齋藤・豊田 内線5696 | info@cshe.nagoya-u.ac.jp

# 学術広報の

学術研究機関に積極的なアウトリーチ活動が求められる昨今です。  
基本である「情報発信」のスキルを基礎から学んでみませんか？  
経験豊かな教員と編集・デザインのプロが広報誌制作の「術」を伝授します。

# 世界へ

日時：2011年9月12日(月) 13:10-16:50+懇親会(1時間程度)

場所：理学南館1階 理学セミナー室

対象：若手教職員、研究員、大学院生、学部生等 / 定員：30名

申込み：9月8日(木)までに、氏名、所属、役職、学年を電子メール本文に書いて  
[info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)宛てに送信してください

# ようこそ

## プログラムと講師

13:10 - 13:20	イントロダクション	齋藤芳子(高等教育研究センター)
13:20 - 14:00	企画術のいろは	福井康雄(理学研究科)
14:00 - 14:50	文章術を磨こう	戸田山和久(情報科学研究科)
(休憩)		
15:10 - 15:50	編集術の奥義	久野高義(エディター/株式会社コミニク) × 福井康雄
15:50 - 16:40	デザイン術に挑戦!	小川明生(アートディレクター/tmc inc.)
16:40 - 16:50	まとめ	講師陣

\*終了後1時間程度の懇親会を予定しています。

モデレーター：齋藤芳子(高等教育研究センター)

事務局：早川貴敬、鳥居和史(理学研究科)

主催：「科学研究を伝える広報誌制作手法の追究」(研研23650506、代表・福井康雄)

共催：名古屋大学高等教育研究センター

協力：名古屋大学大学院理学研究科広報委員会

# 広報誌制作教室

## 院生・PD キャリア形成支援セミナー（数学系）

数学を専攻する大学院生のうち、卒業後、実際に数学の研究職に就くのは一部に過ぎないにも関わらず、彼らは在学中、数学の研究者に囲まれ、研究職以外のキャリアを思い描きにくい環境にある。

このプロジェクトでは、純粋数学の研究だけでなく、教育、企業、数学以外の分野の研究など幅広い領域で数学を役立てている人たちの講演会を実施することで、大学院生の視野を広げ、彼らのキャリア形成を支援することを目指した。

### 第1回 これまでの研究とアカデミックキャリアの形成について

日 時：2011年11月18日（金）17:00～18:30

場 所：理学部1号館（多元数理科学研究科）409号室

講 師：川上 裕（山口大学大学院理工学研究科講師）

主 催：名古屋大学高等教育研究センター、名古屋大学多元数理科学研究科

概 要：講演者はこれまで「曲面のガウス写像の研究」を行い、その中でいくつかの研究職を経験しながら現在の職に就いています。本講演では、講演者がこれまで経験してきたことで皆さんにお伝えしたいことを講演者の研究の紹介を交えご紹介したいと思います。

講演要旨：本講演では、数学系の研究者が現在どのようにアカデミックキャリアを形成していくのか、また、その過程において気をつけなければならないことは何かといったことについて講演者の経歴を踏まえて話をした。

数学系の研究者のアカデミックポジションとして、大学および高等専門学校の教員の職に就くことが考えられるが、そのポジションを獲得していく過程は昔とは大きく変化している。そこで本講演では、まず現在その過程がどのようなものになっているのかを講演者の経歴とともに紹介した。次に、数学系の研究者がアカデミックポジションに就くために必要なこととして「学術論文作成」、「研究費獲得」、「公募書類作成」が挙げられるが、これらについて注意すべき点を詳しく述べた。数学系の研究者の業績をあげる上で、学術論文を作成することは非常に重要である。しかし、数学系において学術論文をどのように作成するのか、学術誌に投稿する際にどのような点に注意しなければならないのかということについて説明を受ける機会は少ない。そこで本講演では、講演者がこれまで経験してきたことをもとに、学術論文の作成法と投稿の際に気をつけなければならないことについて紹介した。また、アカデミックポジションに就くためには、ほとんどの場合、各大学や高等専門学校から出される公募に応募しなければならない。その際の書類の作成の仕方や選考過程については知られていないことが多い。そこで本講演では、講演者が実際作成した公募書類をもとに、書類作成の際にどのよ

うな点に注意しなければならないのかを説明した。また、選考過程において「面接」や「模擬授業」を行うことがあるが、それはどのようなものなのかについて体験を踏まえて紹介した。最後に本講演が皆様のキャリア形成の一助になれば幸いである。

○第2回 Penner-Andersen によるタンパク質の Fatgraph Model

日 時：2012年1月13日（金）17:00～18:30

場 所：理学部1号館（多元数理科学研究科）409号室

講 師：田中 亮吉（京都大学大学院理学研究科数学教室）

主 催：名古屋大学高等教育研究センター、名古屋大学多元数理科学研究科

概 要：Penner と Andersen 等によるタンパク質の Fatgraph Model について紹介いたします。Fatgraph とはある種の有限グラフであり、彼らはこれを用いて、タンパク質の立体構造を記述する試みを行っています。具体的には、Fatgraph から定まる位相不変量を用いて、三次元構造を分類しようというものです。ここでは、タンパク質構造から Fatgraph を経由し位相不変量を構成する手続きを主に解説したいと考えています。時間が許せば、これらのタンパク質からランダムに生成されるネットワークに関連して、エキスパンダーグラフ上の混合時間の評価についても述べようと思います。

講演要旨：本講演では、数学研究の他分野との接点を強調し、タンパク質の Fatgraph Model について解説を行った。近年、従来の数理生物学での研究手法とはまた違った視点で、数学者と生物学者との議論が活発になって来ている。ここでは、数学科の大学院レベルの深い数学的素養が要求されるような理論が積極的に用いられる。一方で、数学科の大学院生にとって、そのような方向性での研究、あるいは背景となる生物学的な話を聴く機会は、それほど多くはない。今回は、そうした方向性の例として、デンマークのオルフス大学のトポロジーの研究者たちによる、表題に関わる研究を紹介した。

講演の前半では、主に背景となる生物学的な問題を解説した。代謝や遺伝子発現などの生体现象は、多くの異なるタンパク質分子の相互作用から成り立っている。病気や発生に関わる機構を研究する一つの手法は、そうしたタンパク質を同定することである。一方、タンパク質は一般にはポリペプチドからなる巨大な分子であり、その立体構造が生化学的機能を大きく決めていることが分かっている。分子生物学の中心教義によれば、タンパク質はアミノ酸配列により決まり、そこから立体構造が決まるものであるが、アミノ酸配列から立体構造を予測することは、バイオインフォマティクスにおける基本的な問題の一つである。また、以上の話から察せられるように、タンパク質の局所構造はいくつかの決まったパターンから構成されている。立体構造と言ったとき問題となるのは、大域的な構造である。しかし、こうした大域

的な構造を区別する指標あるいは立体構造を特徴付ける量については、これまであまり厳密な意味で数学的議論がされていなかった。そこで、Penner と Andersen らはトポロジーのアイデアを導入し、これらの立体構造を区別する指標を構成した。その構成に用いるのが Fatgraph というある種の有限グラフである。さらにその指標を計算するアルゴリズムを開発した。結果として、これまで立体構造が知られているタンパク質について、指標の計算を行い、この指標が、タンパク質同士をよく区別していることを示した。講義の後半では、主に指標の構成について、数学的な部分を解説した。Fatgraph はそもそもリーマン面のモデュライ空間の理論に現れる対象である。こうした話題は、高度な数学が、数学以外の分野で思わぬ応用を持ち、真に新しい理論を作るという良い例であると思われる。この話をきっかけとして、数学科の大学院生が、自分の研究分野を深めると同時に広い視野を持つことになる一助になれば幸いである。

○第3回 高信頼ソフトウェア開発における数学

日 時：2012年1月27日（金）17:00～18:30

場 所：理学部1号館（多元数理科学研究科）409号室

講 師：今井 宜洋（有限会社 IT プランニング）

主 催：名古屋大学高等教育研究センター、名古屋大学多元数理科学研究科

概 要：数学の一分野であるラムダ計算を応用した、関数型言語や証明支援器と呼ばれる技術がある。これらの技術によってコンピュータプログラムの性質を数学の定理のように証明することができる。本講演ではこの技術を使った高信頼なシステム開発について IT プランニングでの実例を交えながら紹介する。

講演要旨：システム開発の現場ではプログラミングをいかにうまく行うかということが重要であり、プログラミング言語の選択は出来上がるシステムの信頼性に大きく作用する。その中で、数理論理学のラムダ計算を応用した関数型言語という技術が注目され、導入を始めている企業も増加している。

講演の前半では、ラムダ計算の定義を紹介し、それをモデルとした関数型言語での利点を、IT プランニングでの実例を交えながら解説した。後半では、さらに強力なラムダ計算の応用として、プログラムを証明するという証明支援器の技術を紹介した。

この講演をきっかけとして、数学専攻の学生や研究者がプログラミング言語理論などの広い視野を持つことになれば幸いである。



## 人文学系大学院生・PD キャリア形成支援プロジェクト

### グローバルP F F 研修「英語で教える」概要

本プロジェクトでは、「英語で教える」をテーマに人文学系大学院生・博士研究員を対象とした研修を実施後、研修参加者による留学生向けセミナーを開講する。

本プロジェクトは、名古屋大学の学術憲章が掲げる「国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成」のための取組として、以下の三点を目的とする。

- 1) 国内大学の国際化に対応する教授能力の育成
- 2) 海外大学での就業・就職を視野に入れたキャリア形成支援
- 3) 研究成果を国際社会に発信する能力の涵養

### プロジェクト担当者

- 岩城 奈巳 (留学生センター)  
安井 永子 (文学研究科)  
中井 俊樹 (高等教育研究センター)  
東 望歩 (高等教育研究センター) ※プロジェクト代表者

### プロジェクト実施計画

- 1) 教授法・授業設計、英語コミュニケーションに関する研修Aの実施
- 2) 研修Aの内容に基づいたセミナーの設計
- 3) 設計内容について実践的指導を行う研修Bの実施
- 4) 研修成果としての留学生向けセミナー開講

### 研修の実施計画

#### ○研修A「英語で教えるー授業設計・教授法とコミュニケーションー」

- 日 時：2011年9月21日(水) 13:00-17:00  
場 所：文系総合館 7F オープンホール  
講 師：安井 永子 (文学研究科・文学部 講師)  
中井 俊樹 (高等教育研究センター 准教授)

#### ○研修B「英語で教えるースピーチとライティングー」

- 日 時：2011年1月23日(月) 13:00-17:00  
場 所：文系総合館 7F オープンホール (予定)  
講 師：Robert Croker (南山大学 総合政策学部 NEPAS 教授)  
岩城 奈巳 (留学生センター 准教授)

○ GSI Seminar for International Students "Introduction to Japanology: Aspects of Expression in the Japanese Culture"

日 時：2012年2月13日（月） 14:00-17:00

場 所：CALE フォーラム（留学生センター2階）

主 催：高等教育研究センター

共 催：留学生センター、文学研究科教育研究推進室

講 師：水川敬章、玉田沙織、松野美海、大竹瑞穂

司会進行：安井永子

質疑通訳：MYERS Michelle

言 語：英語

講演題目：1. 日本のサブカルチャーと老い—「ヒップホップの経年変化」を例に

Japanese Subculture and Aging: The Case of "Aging Hip - hop"

2. 日本における言葉遊びの伝統

Japanese Word Play Traditions

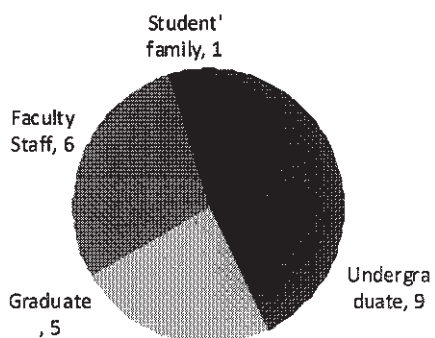
3. 日本語の感情表現における「私」

"He" is NOT "I". : "Watashi (=I)" in the Emotional Expression

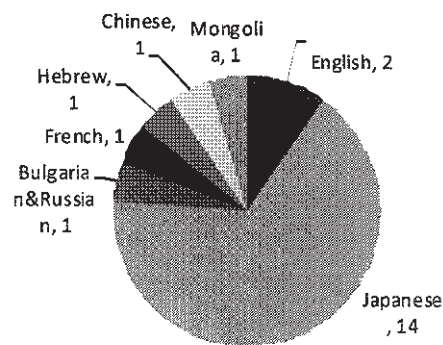
4. 日本映画で少数民族であるアイヌはどのように表現されたのか

How Japanese Cinema Depicted the Ainu as an Ethnic Minority

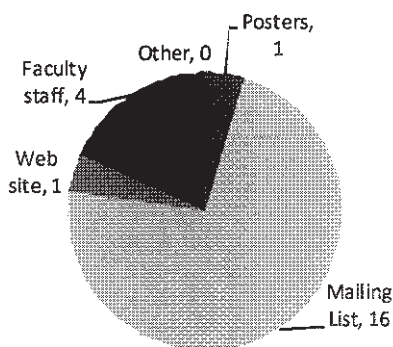
所属



母国語



セミナーを知ったきっかけ



Did you feel this seminar interesting?

Strongly 52%	Somewhat 48%
--------------	--------------

Neutral 0% Not at all 0%

Did you feel this seminar informative?

Strongly 67%	Somewhat 33%
--------------	--------------

Neutral 0% Not at all 0%

#### 自由記述

- I really enjoyed this seminar. Thanks.
- Presenters spoke clearly & were attentive to their audience, which was much appreciated.
- I could learn how I should present and talk. However, some foreign feel trouble some with Japanese information, so, probably, if you can, you had better to write in English as well.
- My major is education, so I hope there will be an opportunity to attend the seminar about educational topics next time. Thank you for holding good seminar like this.
- Hope these kind of seminars will go on, thank you!
- The seminar is great and I hope there will be more seminars focusing on the culture exchange and orientation like that in the future, thank you very much.
- 外国人にむけてディスカッションすることは、院生たちのプレゼンテーション能力をつけるためにたいへん有益なところみだと思えます。
- 日本文化を英語で聴くということと、質疑応答が聴けたのは良い経験になりました。日本についても知らないことが多すぎたので、日本人として勉強もしたいなと思いました。
- セミナーを担当する大学院生にとっても、セミナー参加者にとっても、非常に有益な機会になると思います。今後ともこのような研修やセミナーの開催があると良いと思います。

#### ○プロジェクト参加者アンケート

##### プロジェクト参加に対する動機・期待

- かねてより、留学生への日本文化紹介に興味があった。
- 現在の留学生の関心を知る。専門外の人に、日本文化に興味を持ってもらうための方法。
- 研究又は教員生活に少しでもプラスになることにはなるべく取り組んでおこうと思っていたから。プロジェクト参加を通して英語による応対の仕方を学びたい。
- 英語でコミュニケーションを取るためのコツ（技術）を学ぶこと、また、セミナーに向けて英語を自習することで、英語の学習に対するモチベーションを維持すること
- プレゼンテーション技術を学ぶこと
- 自分の教育活動・研究活動に役立てるため

- ・「英語を読む」ことは行うが、話すこと（聞くこと）はあまり行わないのでチャレンジしようと思った。

#### これまでに英語運用能力の必要を感じた場面

- ・海外での発表時
- ・海外の日本文学研究を調べる時
- ・研究に関連する書籍・論文が英語で書かれている場合
- ・国際シンポジウムで研究者に質問したい時
- ・映画祭で監督・参加者とコミュニケーションを取りたい時
- ・似たテーマでの論文が発表されているのを見た時（英語で発信することの重要性）
- ・英語話者で日本語の苦手な留学生のチューターをする時
- ・学生にレポートを出題する時。
- ・留学生への説明。（授業時）
- ・学会での発表。

#### プロジェクト参加と今後のキャリア形成との関わりをどのように捉えているか

- ・教授方法一般を学ぶ機会（双方向性のある授業）
- ・留学生への日本文化紹介に必要な知識・技術を学ぶ機会
- ・英語による授業の設計経験により、そのような能力が必要とされる場合にも積極的に参加・行動できると思われる。
- ・将来、大学等で教える際の練習
- ・将来、英語で研究発表する際の練習
- ・研究の発信。
- ・留学生への指導。
- ・短大等での授業への活用。

#### 研修 A において印象に残った内容

- ・マイクロティーチング：アドバイスをいただけたので。短時間で組み立てたので、悪い部分が全部出ていたと思う。
- ・日本語・英語のコミュニケーション傾向の差（あいづち）。
- ・コミュニケーションが非言語要素を多く含むことを普段は忘れていたため、改めて重要さが分かった。また、英語による授業にはいろいろなことをあらかじめ想定しておかなければいけないと感じた。
- ・英語による授業の進め方で、話すスピードや授業の実践を具体的に学んだこと。英語でのあいづちの打ち方の違い。
- ・構成が大切だという点は、改めて勉強になった。
- ・あいづちの入れ方がちがうという点（反応のちがいは、とても参考になった。

### 研修 A においてとくに実践に役立てたいと思った内容

- ・マイクロティーチングで学んだ授業構成方法。
- ・授業設計（復習→展開）などの方法（日英同じ）。示し方にはいくつものパターンがあることを忘れがちなので、いろいろな観点を再度意識できた。
- ・話すスピード、単語帳の用意、授業の構成の仕方（計画の立て方）など
- ・上記（構成が大切／反応のちがい）の二点
- ・完璧な英語を目指さなくてもよいという点は、自分のモチベーションを高めてくれた。

### 研修 A についての自由記述

- ・教授経験のある先生方から実践的アドバイスをいただけた。
- ・内容をどのように絞るか悩んでいたのが、授業の構成の仕方を習ったのが良かったです。
- ・丁寧で、不安をとりのぞいてくれる内容があつて良かったと思う。
- ・日本語で教える場合にも役立つ内容だった。

### 研修 B 受講準備で大変だったこと・難しかったこと

- ・自分の専門について話すことの縛りと、文化的背景を全く知らない（と想定される）留学生に向けて話すということの間でバランスを取るのが難しかった。
- ・授業の目標をどこに置けば良いのか分からなかった。
- ・地図や広告、DVD やビデオからキャプチャーした画像を集めるのが大変だった。
- ・資料に関しては、研究以外のものも、普段から意識的に保存する必要があると感じた。
- ・映画の台詞、広告のキャプションや映画批評（発表では削った箇所）を翻訳するのが大変だった。
- ・原稿を作る段階では、話すことより書くことに集中してしまい、単純な英語で話すということが、なかなか意識的に出来なかった。
- ・分かりやすく伝えるにはどうしたら良いかを考えるのが大変だった。
- ・どうしても言葉を言葉で伝えるには長くなって、用語も多くなってしまったので難しい。
- ・準備段階で受講生の英語レベルがわからず原稿を作りにくかったです。
- ・事前カウンセリングでご指摘いただいた点を反映させるのに時間が足りなかった。仕事をしているため個人的には 2 週間程度の時間が欲しかった。

### 研修 B を受けて印象的だったこと・今後役立つと感じたこと

- ・具体的な指摘を受けることが出来たので、自分では気付いていなかった問題点を発見することが出来た。
- ・自分以外のメンバーのプレゼンを実際に受けて、グループで討議し、評価することで、教授方法について具多的かつ客観的に考えることができた。
- ・ネイティブからのコメントがとても役に立った。
- ・日本の文化的背景を知らない学生に対する配慮が必要な点については、他の方から指摘

を受けて初めて気がつくことばかりで勉強になった。

- "Micro Teaching Evaluation Sheet"が、プレゼンテーションのやり方や教室でどのように振る舞うかという点を考える上で、とても役に立った。
- お互いのプレゼンテーションに対してグループ・ディスカッションをするということが、聞く側の意見を聞けるので、とても良かった。
- ロバート先生の添削がきめ細やかでした。一人ひとりのを見てくださったので。プレ発表前に添削を受け、直す機会をいただけたので、学生側も何度も構想・表現を検討することができ、内容を練ることができました。
- 生徒とのコミュニケーションが重要だという点が印象的だった。またそのいろいろな手段も授業や指摘で参考になった。また、「分かりやすく」ということをより心がけられるようになった。

### 研修Bの改善点

- 模擬授業を改善後のバージョンもできると良い。
- 原稿を提出してからプレ発表までの期間が短く、原稿を訂正する時間が取れず大変でした。Croker先生によるメール（2回）やセミナーでの指導を受けて、プレ発表まで3度訂正しているのですが、内容までは、あまり直せませんでした。また、最初に原稿が返却された後に、アドバイスを受けて、なるべく内容も直すようにしたのですが、結果的に最終原稿ではない段階のものをチェックして頂くことになり、申し訳なく感じました。それぞれのセミナーの間隔を長くにとって、内容に対するアドバイス、英語表現に対するアドバイスと段階を踏んでいただけると、ネイティブ・チェックの負担も減らすことができ、良かったのではないかと思います。
- 前回のカウンセリングからの準備・改善の時間に余裕を持たせてもらいたい。
- プレ発表の日がもっと本番と近い方が良い（2週間程度がベスト）。
- 休憩時間は15分では足りない。参加者は休憩中もコメントをいただくことになりまして、実質休憩はありませんでした。集中力が足りない私もいけないのですが、後半は発表を聞くのが辛かったです。

### 英語によるセミナー当日に苦労したこと・大変だったこと

- 聴講者に英語で問いを投げかけ、それを聞き取り応じるのが大変だった。
- 予想外の解答があった場合、それをどう処理すれば（応答すれば）よいか戸惑った。日本語で行ったとしてもこの点は苦労する。
- 英語を聞き取るのが大変で、ネイティブのスピードについて行けない場面があった。
- 聴講者に参加してもらった部分では、あまりアクティビティの内容が伝わっていなかったようだったが、働きかける言葉が出てこなかった点。
- セクション後の質疑応答では、質問はなんとか聞き取れましたが、それに対してとっさに英語で答えることには困難を感じました。

- ・成人の外国人研究者が会場におり、浅い内容を反省。留学生（短期もいる可能性）対象と聞いたので、専門的な話ではなく、日本語と触れあうのを主目的に授業を作ってしまった。専門内容としては、日本語特徴の話を用意していたが、深められておらず、興味をもってもらえるかと心配になった。
- ・練習不足だったので、上手く進められなかった。
- ・英語の聞き取りが難しいという状況で、どのように授業をインタラクティブなものにするか難しかった。
- ・授業の組み立てが難しかった。授業の目標をどこに置くべきか迷った。研究として面白いことを伝えるということと、日本の文化事情を知らない外国人へ伝えるということの両立が上手くいかず、結局、どっちつかずの内容になってしまったように思う。外国人は知らないであろう日本の文化的な知識に関することと、学問的な知と分けて考えて、内容のボリュームを絞った上で授業を組み立てれば良かったと思う。また、例示から結論を説明する過程での見せ方の工夫も必要だと感じた。

#### 英語によるセミナー当日に面白かったこと・良かったと感じたこと

- ・伝えたい内容がある程度伝わったことが実感できた点。
- ・学会報告とは違った英語でのコミュニケーションの場面を体験できた点。
- ・通訳者が介在してくれたことで、安心して質疑応答に臨めたこと。
- ・参加者が非常に興味を持ってきていることがわかったこと。また、興味の方向がさまざまで、周辺の質問も出ていたこと。
- ・自分に乏しい、異文化の知識・関心から、思いがけない視点からの質問が来るので、考える切っ掛けがもらえる。
- ・英語でのコミュニケーションではあったが、聴衆の表情や相づちを通じて、想像以上に聴衆の反応が伝わった。日本の聴衆より表情が豊かだと感じた。

#### プロジェクト参加を通じて印象に残ったこと

- ・教室英語に実際にふれることができた点。
- ・日本語・英語を問わず、実践的な授業構成について考えることができた点。
- ・アクティビティを効果的に行なうよう取り組んだこと。前提となる知識が少ない人に対しても「教える」のではなく「学んでもらう」ことを目指す姿勢を改めて大切にしたいと感じました。
- ・プレ発表では、特にロバート先生から、授業のインタラクティブなあり方や話すときの抑揚、声の大きさといった、表現のあり方を中心に助言を頂いた。非ネイティブによるネイティブ向けの英語の授業であるからこそ、表現のあり方をより重視するべきだと思った。また日本とオーストラリアでの教育環境の違いがあるようにも感じた。日本以上に、分かりやすく、メリハリのある表現を心がけるべきだと感じた。
- ・単に日本の文化を説明するだけでなく、日本の文化をよく知らなくても議論できるよ

うな共通の土台を用意することが重要と感じた。セミナー後の質疑応答を見ても、その方が、より内容に踏み込んだ質問が来ていると感じた。映画史・映画学の分野では、近年、各国映画史（とその歴史的文脈）が重視されてきた反動もあり、国や地域を問わず参加できるような共通の議論をという呼びかけがされている。このような動きは、アメリカの学会の様子を聞いたり、論文を読んだり知っていたつもりだったが、実際に英語でレクチャーするという立場に立って初めて、危機感を実感として感じた。

### プロジェクト参加によって得たもの

- ・ 学生とのコミュニケーションの重要性を再認識した。
- ・ 教授法と教室英語に関する知識。
- ・ 英語で教授する際に必要な知識。
- ・ 分かりやすい英語を使って分かりやすく説明する方法。最初の手稿では母語話者同士のように言い換えを多くしたことで、かえって分かりにくい英語も使っていたように思います。
- ・ さまざまな英語力（もしくは日本語力）に配慮する意識。
- ・ 文字情報と図情報、映像を組み合わせるいろいろな段階の聴講者を想定すること。
- ・ アクティビティの取り入れ方。
- ・ 非母語話者対象授業における教授法のヒント。
- ・ 高等教育における教授法のヒント。
- ・ 参加型授業における教授法のヒント。
- ・ 教師経験はあり、高等学校までの教育は教員免許取得過程で学んでいたが、高等教育や、教科書を使わない（講読タイプではない）授業については、訓練を受ける機会がなかったが、プレ発表で、先生方・研究員の方や、他の参加者から具体的なアドバイスをたくさんいただいたのがありがたかった。
- ・ ロバート先生による、プレ発表での相互議論や模擬授業評価表の5つのポイントは、とても勉強になった。今後、授業で教える機会があった時だけではなく、学会発表にも生かしていこうと思う。
- ・ 年表や箇条書きなど、英語でのパワーポイントの表記の仕方を教わった。

### プロジェクト参加による意識の変化や考えの広がり

- ・ 英語そのものにもっと触れる機会をつくろうと思うようになった。
- ・ 今まであまり発信するということを考えていませんでしたが、外国の方が日本の学問に対して興味をもっていることを改めて感じ、発信することの重要性を感じました。
- ・ さまざまな状況の人に配慮した授業をするという意識ができたと思います。
- ・ 日本文化に関する知識のない人に、専門の話をする際のヒント。想像以上に単純化しなければいけないことがよく分かった。
- ・ 学会発表も含め、表現のあり方にもっと意識的であろうと思った。



- ・英語の聞き取りの勉強をする良い動機付けになった。
- ・自分の専門分野を、一般化して／比較文化的観点から見ることの重要性を改めて実感した。

#### 今後のキャリア形成と本プロジェクトとの関わり

- ・すぐに実際に英語で授業を行うことは難しいが、今回学んだ教授法やコミュニケーションの取り方や授業構成に関する考え方は、今後、日本語で授業を行う際にも役立つ。母語で授業作りを考える際に見逃していた点を、英語によって授業を構成していく中で反省的に考えることができた。
- ・英語で自らの研究を広く発信していくことへの意欲にも繋がった。
- ・将来増えるであろう英語での授業のために準備ができたことはもちろん、日本人学生に対する授業にも適用できる。
- ・留学生を教える機会があれば、この授業モデルを核に、視覚資料（パワーポイント）も使いながら、充実した授業を作りたい。
- ・大学で教えるのは、おそらく数年以上先になると思うが、まだ先のこととして考えるのではなく、教える技術の習得やキャリアの形成を進めたいと思った。
- ・将来的に海外での学会発表がキャリアに必要とされるので、英語で原稿を書き、発表するのは良い予行練習となった。

#### その他、プロジェクトに対する感想・意見・要望

- ・質疑応答のシュミレーションもあるとより心強かったかもしれません。が、全体的にサポートしていただき、非常に有意義でしたし、楽しかったです。先生方にも本当にお世話になりました。ありがとうございました。
- ・プレ発表を、本番にもう少し近い時期に設定してほしかった。1週間前では修正は難しいが、2週間前ぐらいでよかったのでは。
- ・留学生対象授業のノウハウについてのレクチャーと質疑の機会がほしかった。
- ・参加者の学年、身分などもある程度揃える必要があるのではないのでしょうか。
- ・受講者のタイプ（日本語・英語能力、告知範囲）については、早くに確定させてほしかった。せっかくの機会ですから、受講者層に内容を合わせたかった。
- ・段階を踏んで、長期間に渡って進められていたので、アドバイスを受けながら、軌道修正をしながら、漸次準備を進めることができたのはありがたかったです。

【資料1】 研修Bにおけるルーブリック

Micro Teaching Evaluation Sheet					
Presenter Name: _____		Day and Time: _____		Topic: _____	
Observer Name: _____					
GRADE	Organization of Content	Using Interesting Examples	Using Powerful Visuals (board, images, PowerPoint)	Using Effective Activities	Clarity of Presentation
excellent presentation	The lesson content is organized logically, so it is easy for students to follow the teacher's ideas and develop a strong understanding of the lesson content.	Interesting and relevant examples are offered throughout the lesson, which help to clearly illustrate each of the teacher's ideas.	The whiteboard and PowerPoint are used thoughtfully and powerfully throughout the lesson, to help students understand the lesson's ideas and examples.	Lesson activities are clearly and effectively organized to help students develop a deeper understanding of the lesson's main ideas.	The teacher communicates clearly (speaks clearly and loudly, and uses effective body language), so the lesson content and activity directions are easy to understand.
good presentation	Most of the content is organized logically, but some parts could be more logically connected together. This would help students see how the lesson ideas are connected to one another.	Interesting and relevant examples are offered in many parts of the lesson, but the teacher could add more examples, so as to clearly illustrate the ideas in each and every part of the lesson.	The whiteboard and PowerPoint are used for much of the lesson; however, they could be used more often, or more effectively, to help students understand the lesson's ideas and examples.	Many of the lesson activities help students develop a deeper understanding of the lesson's main ideas, but some activities could be more thoughtfully organized or more clearly linked to the lesson's main ideas.	The teacher mostly communicates clearly, but sometimes could speak more clearly or loudly, or use more effective body language.
fair presentation	Some of the content is organized logically, but the teacher could re-order the lesson content to make it easier for students to understand how the lesson ideas connect to one another.	The teacher could use many more interesting and relevant examples that the students can easily understand and relate to, to help them understand each of the ideas of the lesson.	The whiteboard and PowerPoint could be used more effectively: more images could be offered, text more effectively presented, and a better ratio of images to text used.	The teacher could offer more lesson activities and clearly link them to the lesson's ideas, to help students develop a deeper understanding of the lesson's main ideas.	The teacher could speak more clearly and loudly, and use more effective body language, so the students can more easily understand the lesson content and activities.
Comments					
General Comments:					

模擬授業 評価表					
発表者: _____		日時: _____		発表テーマ: _____	
評価		評価・コメント: _____			
評価	全体の構成	効果的な例示	視覚的なツール	アクティブラーニング	伝わる話し方
すばらしい	全体が論理的に構成されています。学生にとって聴きやすい授業であり、講義の全体像を把握し、その内容について深い理解に到達することができます。	適切な例が、全体を通して使用されています。講義中に使用されている例は、学生の関心を引き、理解を助けるためにしっかり機能しています。	ホワイトボード/パワーポイントが、意識的・効果的に活用されています。講義中で説明される知識や例示を理解するための強力なサポートになっています。	この講義における主要な概念や知識について、学生たちが深い理解に到達できるよう意識した、効果的な学習活動が組み込まれています。	明晰で聞き取りやすい話し方、身体全体を使って「伝える」動きなどが実践されており、講義内容や講義中に行う指示がとてよく伝わります。
よい	ほとんどの部分が論理的に構成されていますが、流れや意図が不明瞭な部分もあります。より明確な構成を取ることで、講義を理解しやすくなります。	興味深い例、適切な例がちりばめられています。例示や例証を増やすことで、扱う事柄や伝えたい考えのひとつひとつがさらにわかりやすく説明できます。	ホワイトボード/パワーポイントが、よく使用されています。より多く、あるいは、より効果的に使用すれば、講義で示される概念や具体例が理解しやすくなるでしょう。	多くの学習活動が、講義の主旨をよりよく理解するため機能しています。ただ、講義のポイントとしっかりつながるよう、さらに工夫することもできそうです。	大部分は聴きやすいものの、ところどころもっとはっきり、大きな声で話した方がよいと感じます。また、もっと身体全体を使って話すのも効果的です。
ふつう	論理的に構成されている部分もありますが、学生にとってわかりやすい作りになってはいません。学生が講義の意図や流れを把握しやすいかどうかを意識して組立てるとよいでしょう。	講義の各パートで、狙いに即した例をもっとたくさん使しましょう。適切な例、興味の引かれる印象的な例を用いると、講義で扱われている内容が理解しやすくなります。	ホワイトボード/パワーポイントをもっと効果的に使うことができます。図・写真の数を増やす、文字情報の示し方を工夫する、図・写真と文字情報のバランスを取る、などの方法があります。	講義の主旨や狙いを深く理解してもらうため、学生が講義に参加できるような取組みをしていきましょう。また、学習活動は、講義内容ときちんと結びつけている必要があります。	もっとはっきりと、そして大きな声で話すとうれしいでしょう。また、言葉だけでなく身体表現を使いながら話すことで、学生たちにとって聴きやすく、わかりやすい講義になります。
コメント					
【全体に関する所見】					



Nagoya University  
Graduate Student Instructor's Seminar for International Students

## Introduction to Japanology

Aspects of Expression in the Japanese Culture

**DATE : February 13, 2012 14:00-17:00**

**PLACE: CALE Forum**

Education Center for International Students 2F,  
Higashiyama Campus, Nagoya University

**14:00-14:10 Opening Address**

**14:10-15:10 Japanese Subculture and Aging:  
The Case of "Aging Hip-hop"**

日本のサブカルチャーと若い—「ヒップホップの経年変化」を例に

**Japanese Word Play Traditions**

日本における言葉遊びの伝統

**Q&A**

**15:10-15:30 Break**

**15:30-16:30 "He" is NOT "I". :  
"Watashi (=I)" in the Emotional Expression**

日本語の感情表現における「私」

**How Japanese Cinema Depicted  
the Ainu as an Ethnic Minority**

日本映画で少数民族であるアイヌはどのように表現されたか

**Q&A**

**16:30-17:00 Closing Address**

Speakers: MIZUKAWA Hirofumi      Chairperson: YASUI Eiko  
TAMADA Saori                      Assistant Interpreter: MYERS Michelle  
MATSUNO Yoshimi  
OTAKE Mizuho

Organizer: Center for the Studies of Higher Education  
Co-Organizers: Education Center for International Students  
Office for the Promotion of Graduate Education and Research, Graduate School of Letters

**Language English**

**Attendance Free**

## ◎ファカルティガイド

必要な情報にさっとアクセスできるように、トピックス別に背景や論点と手法を簡潔にまとめた1枚もののガイドです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>

### 【本年度の刊行物】

ミニットペーパーを活用する Teaching with Minute Papers

作成者：東 望歩

作成日：2011年7月14日

多人数授業の工夫 Teaching in large Classes

作成者：中井 俊樹

作成日：2011年7月29日

## 參考資料



## ◎拠点の概要と設立経緯

### 設立経緯

名古屋大学高等教育研究センターは、1998年4月9日に学内共同教育研究施設として設置されました。センター長（併任）、専任教員4名と非常勤研究員・職員数名からなる部局です。

国際的な視野のもとに高等教育の発展に戦略的に貢献することをミッションとして掲げ、研究開発の成果をふまえた知見の提供や問題解決への参画を行っています。これらを通じて、名古屋大学および高等教育機関の質の向上、さらには高等教育機関の社会への貢献をめざしています。2010年6月10日には、FD・SD教育改善支援拠点として、文部科学省より教育関係共同利用機関〈大学の教職員の組織的な研修等の実施機関〉に認定されました。

### 研究領域

- ・教授学習論
- ・学生論
- ・カリキュラム論
- ・組織開発とリーダーシップ
- ・大学と社会
- ・高等教育政策、学術研究政策

### 活動内容

高等教育に関わる実践的な研究を進めつつ、以下のような活動へと展開させています。

- ・大学教職員のためのFD・SD教材開発と提供
- ・キャリアステージや時宜に応じた多様な集合研修プログラムの開発と実施
- ・テーマ別FD・SD研究会の支援
- ・個別教員に対するメンタープログラムの設計と実施
- ・学部生・大学院生の学習支援
- ・各種交流会の企画運営
- ・FD・SD担当者との交流・情報交換

### 教育改善支援の活動

学内をはじめとする大学教員の質の向上を目指して、各種活動を行っています。

- ・学内の教育改善支援
- ・学内教育の企画立案評価等の支援
- ・各種セミナー・講演会の実施

- ・出版物やウェブによる研究成果・情報の発信
- ・本学教員に対する授業の悩み相談、メンター紹介
- ・授業見学会、シラバス博論会の実施

## 特徴ある活動

- ・FD・SD 教材開発における協働

センターの教材開発経験を活かして、現場の教職員が FD・SD 教材の開発に携わることを積極的に支援しています。これにより、さまざまな経験、スキル、ノウハウを収集して共有することを可能にし、さらには教職員間のネットワークづくりや課題の共有を図っています。なお、開発された教材は、時間と場所を選ばない自己研修のツールとして活用されています。

- ・時宜に応じた集合研修

キャリアステージ毎の集合研修に加えて、時宜にかなう集合研修も提供しています。これまでの研修事例には、大学の国際化に伴う「専門を英語で教える際の方法」、情報技術の発展に伴う「授業に ICT を活用する方法」、大学院拡大に伴う「研究指導上の留意点」などがあります。

- ・テーマ別 FD・SD 研究会の支援

FD・SD に関わるテーマ別研究会を支援しています。これまでに名古屋経済学教育研究会、名古屋哲学教育研究会、名古屋 SD 研究会、名古屋大学留学生研究会、なごや科学リテラシーフォーラムなどが教職員有志によって組織され、活動が展開されています。

- ・教員メンタープログラム

個々の教員に対する支援として、メンタープログラムを運営しています。新任教員が一定の勤務経験をもつ教員と交流することを促進しているほか、授業に悩みをもっているなど教員個々のご要望に応じてメンターマッチングを行っています。

- ・大学教員準備講座

大学教員をめざす大学院生等を対象に、大学教員になるために必要な基本的知識やスキルの習得を支援する「プレ FD」を実施している。これらは、大学院生に対するキャリア形成支援の意味をもっており、大学院生のための研修シリーズとも連動させています。



## ◎センターおよび拠点の規定

名古屋大学高等教育研究センターFD・SD教育改善支援拠点運営委員会規程  
(平成22年7月20日規程第14号)

(趣旨)

第1条 名古屋大学高等教育研究センター規程(平成16年度規程第195号)第5条第2項の規定に基づく名古屋大学高等教育研究センター(以下「センター」という。)のFD・SD教育改善支援拠点運営委員会(以下「拠点運営委員会」という。)に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項等)

第2条 拠点運営委員会は、センターの教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する事項について審議する。

(組織)

第3条 拠点運営委員会は、次に掲げる拠点運営委員をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 センターの教授1名
- 三 学務部長
- 四 名古屋大学以外の学識経験者若干名
- 五 その他センター長が必要と認めた者

- 2 前項第4号及び第5号の拠点運営委員は、センター長の推薦により、総長が任命又は委嘱する。
- 3 前項の推薦を行う場合は、センター長は、名古屋大学センター協議会の議を経るものとする。

(任期)

第4条 前条第2項の拠点運営委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 前項の拠点運営委員に欠員が生じたときは、その都度補充する。この場合における拠点運営委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 拠点運営委員会に委員長を置き、第3条第1項第1号の拠点運営委員をもって充てる。

- 2 委員長は、拠点運営委員会を招集し、その議長となる。ただし、委員長に事故がある場合は、あらかじめ委員長が指名した拠点運営委員が議長となる。

(定足数)

第6条 拠点運営委員会は、拠点運営委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席者の過半数によって決する。

(意見の聴取)

第7条 拠点運営委員会が必要と認めたときは、拠点運営委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 拠点運営委員会が必要と認めたときは、専門委員会を置くことができる。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、拠点運営委員会に関し必要な事項は、拠点運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

この規程は、平成22年7月16日から施行し、平成22年6月10日から適用する。

## ◎委員会実施状況

### 第1回拠点運営委員会

日 時：平成22年10月12日（火）10時～12時

場 所：名古屋大学 文系総合館 7階 オープンホール

出席者：木俣委員長（名古屋大学），羽田委員（東北大学），青野委員（金沢大学），  
田中委員（京都大学），安村委員（中京大学），神谷委員（南山大学），  
池田委員（名城大学），夏目委員（名古屋大学），安田委員（名古屋大学）

議 題：

報告事項

1. FD・SD教育改善支援拠点運営委員会委員の名簿について（資料1）
2. FD・SD教育改善支援拠点運営委員会設立の経緯について（資料2-1、2-2）
3. その他

審議事項

1. FD・SD教育改善支援拠点の活動方針について（資料3）
2. 専門委員会の設置について（資料4）
3. その他

配布資料1 FD・SD教育改善支援拠点運営委員会委員名簿

配布資料2-1 教育関係共同利用拠点 申請書

配布資料2-2 教育関係共同利用拠点の認定について

配布資料3 「FD・SD教育改善支援拠点」の目指すもの

配布資料4 FD・SD教育改善支援拠点運営委員会規程

### 第2回拠点運営委員会

日 時：平成23年6月24日（金）13時～14時40分

場 所：名古屋大学 文系総合館 7階 オープンホール

出席者：木俣委員長（名古屋大学），羽田委員（東北大学），青野委員（金沢大学），  
安村委員（中京大学），青木委員（南山大学），池田委員（名城大学），  
夏目委員（名古屋大学），丸岡委員（名古屋大学：安田委員の代理）

議 題：

報告事項

1. FD・SD教育改善支援拠点運営委員会委員の交代について（資料1、2）
2. その他

審議事項

1. 平成23年度 高等教育研究センター事業計画について（資料3、4）

## 2. その他

配布資料 1	FD・SD教育改善支援拠点運営委員会委員名簿
配布資料 2	FD・SD教育改善支援拠点運営委員会規程
配布資料 3	平成23年度 高等教育研究センター予算案
配布資料 4	名古屋大学FD・SD教育改善支援拠点の2011年活動方針

### 運営委員会委員名簿

羽田 貴史	(東北大学高等教育開発推進センター教授)
青野 透	(金沢大学大学教育開発・支援センター教授)
田中 每実	(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)
安村 仁志	(中京大学副学長)
青木 清	(南山愛学副学長)
池田 輝政	(名城大学副学長)
木俣 元一	(名古屋大学高等教育研究センター長)
夏目 達也	(名古屋大学高等教育研究センター教授)
一居 利博	(名古屋大学学務部長)

## ◎拠点が提供している教育改善支援ツール

### 刊行物(書籍)

中井 俊樹・上西 浩二編『大学の教務Q&A』玉川大学出版部、2012年3月

夏目 達也・近田 政博・中井 俊樹・齋藤 芳子『大学教員準備講座』玉川大学出版部、2010年3月

近田 政博『学びのティップス 大学で鍛える思考法』玉川大学出版部、2009年11月

中井 俊樹編『大学生のための教室英語表現 300』アルク、2009年4月

中井 俊樹編『大学教員のための教室英語表現 300』アルク、2008年12月

中井 俊樹編『英語で教える秘訣—大学教員のための教室英語ハンドブック』アルク、2008年3月

中井 俊樹・山里 敬也・中島 英博・岡田 啓『eラーニングハンドブック〜ステップでつくるスマートな教材〜』マナハウス、2003年8月

池田 輝政・戸田山 和久・近田 政博・中井 俊樹『成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部、2001年4月

### 刊行物(冊子) \*WEB 公開あり

『研究者のための科学コミュニケーション Starter's kit』第2版,2011年6月\*

『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』2011年3月\*

『教務のQ&A』2011年3月

『物理学講義実験ハンドブック』第2版,2011年6月

『Eight Principles for Linking Research and Teaching』2010年5月\*

『経済学英語ハンドブック 授業で使える例文集』2009年3月\*

『学位への道』2009年3月

『研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか』2008年1月

『Researching Japanese Higher Education: 1998 - 2008』2008年\*

『ティップス先生のカリキュラムデザイン』2007年3月\*

『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』2004年1月\*

刊行物(冊子・リーフレット シリーズ) \*WEB 公開あり

『ティップス先生からの7つの提案』\*

- 「大学院生編」2011年3月
- 「教務学生担当職員編」2007年5月
- 「IT活用授業編」2006年7月
- 「大学編」2005年9月
- 「学生編」2005年9月
- 「教員編」2005年9月

ファカルティガイド\*

- 「多人数授業の工夫」2011年7月
- 「ミニットペーパーを活用する」2011年7月
- 「留学生を受け入れる」2011年3月
- 「マスメディアに情報を提供する」2011年3月
- 「物理学講義に実験を取り入れる」2011年3月
- 「プレゼンテーションを指導する」2011年1月
- 「学生同士でレポートの読みあわせをさせる」2011年1月
- 「学生を図書館に行かせる」2011年1月
- 「メンター教員のためのガイド」2010年10月
- 「メンティ教員のためのガイド」2010年10月
- 「市民を対象に講演する」2010年3月
- 「授業にICTを活用する」2010年3月
- 「学生に的確なレポートを書かせる」2010年3月

『新入生のためのスタディティップス』\*

- 2008年版(2)「学問を始めよう！」2008年3月
- 2008年版(1)「「学識ある市民」をめざして」2008年3月
- 2007年版(2)「自発的に学ぼう」2007年3月
- 2007年版(1)「「学識ある市民」をめざして」2007年3月
- 2006年版(1)(2) 2006年3月

## WEB 公開

ファカルティガイド

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>

ミニットペーパーテンプレート

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/minute.html>

シラバステンプレート

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/syllabus.html>

ティップス先生からの7つの提案

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

成長するティップス先生

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>

ティップス先生のカリキュラムデザイン

[http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/curriculum\\_design.pdf](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/curriculum_design.pdf)

名古屋大学新入生のためのスタディティップス

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>

名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/>

研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/>

Eight Principles for Linking Research and Teaching

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/LinkingResearchandTeaching.pdf>

経済学英語ハンドブック 授業で使える例文集

[http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/english\\_handbook.pdf](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/english_handbook.pdf)

Researching Japanese Higher Education: 1998 - 2008

[http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/Researching\\_Japanese\\_Higher\\_Education.pdf](http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/Researching_Japanese_Higher_Education.pdf)

プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/prohandbk.pdf>

FD・SD教育改善支援拠点の活動（1）  
平成23年度総合報告書

---

2012年3月30日発行

制作・発行 名古屋大学 高等教育研究センター  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
E-mail [info@cshe.nagoya-u.ac.jp](mailto:info@cshe.nagoya-u.ac.jp)  
名古屋大学消費生活協同組合印刷・情報サービス部

印刷・製本 〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
E-mail [insatsu@coop.nagoya-u.ac.jp](mailto:insatsu@coop.nagoya-u.ac.jp)



